【神速】のペルソナ使い

どうなの新島

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

汝、トリックスターの”従者”よ。

今こそ、この世の歪みの深淵に立ち向かうがいい。

※紫猫侍様から頂いた表紙です。

目次

Castle of Lust 1

1—1【Awakwning of rebellion】 19

1—2【Another me】 33

1—3【Only understanding person】 52

1—4【Phantom Thief】 66

1—5【Codename:Soldier】 76

1—6【I believe in you】 85

1—7【Take your heart】 93

1—8【Phantom Thief Dance】 105

1—9【Captive bird】 118

1—10【Adieu】 131

1—11【Codename:Noir】 140

1—12【Public perception】 150

Museum of Fiction

2—1【Counselor and Painter】 161

2—2【The Truth of The Suspicion】 170

2—3【Undergo Interrogation】 179

2—4【IT WAS FUN WHILE IT LASTED, GOODBYE.】 190

2—5【Codename:Fox】

2—6【COOPERATION:Adjustment】

2－7【Farewell to the Master】

Castle of Lust
1—1【Awakwning of rebellion】

—4／11　朝—青山一丁目—

「……新学期早々イライラするな」
東京に住んで16年と少しが経つが、この人混みだけはどうも慣れない。そう思いながら、傘を忘れた彼は孤独に歩く。
特に雨の日はなおさらだ。夏祭りでよくあるストレスがたまる程の人ごみに、大量の傘が加わった。となれば、その状況に直面したことがなくとも、かかるストレスがどれ程のものか大方想像がつくだろう。
突然降りだしてきた雨を回避するために、彼は近くの洋服店の軒下に逃げ込んだ。
いつ止むかはわからないが、雨に濡れながら学校に向かうよりかはまだマシだろうし、時間にも余裕はある。濡れた髪を少しだけ整え、彼はスマホを開いてニュースを眺める。
「……日本、大丈夫かね」
スマホの画面に映るニュースを見て、彼は思わずそう呟く。
増税、通り魔事件、いじめ見過ごしに、丁度昨日起こった地下鉄暴走事件。ディスプレイに並んでいるニュースは、日本はお先真っ暗、と言いたくなるような内容ばかり。決して口には出さないが、そう吐きたくなるような情勢なのは否めない。
とはいえ。暗いニュースを見て何が楽しいのかと我に返り、彼はスマホをポケットにしまって雨が止むのを待つ。
（……流石に止まない、か）
短時間で雨が止むとも思えず、このまま立ちっぱなしも面倒臭い。そう思い、立ち去ろうとすれば、彼の隣に人が駆け込んできた。
服は秀尽の制服、ボタンは赤色のため同学年、しかし顔は見たこと

がない。
――訳アリの転校生か、それとも俺の記憶に残っていないだけか。そう考察して、彼は顎に手を当てる。
訳アリの、という言葉が付いてしまうあたり、仮に隣に来た彼がそれであれば警戒すべきなのだろう。実際、彼はその転校生がどんな奴なのかと気になっていたのだから。
どちらもありえた。ありえた、が。
（……いや、記憶に残っていないは無いな。この癖っ毛は一目見たら忘れないだろうし）
頭のてっぺんで暴れている癖っ毛を一度見て、忘れる訳がない。
彼の中で、それが在学生でない事の否定になり、隣に来た生徒が転校生である事の証明となった。
「そんなにじろじろ見て……俺の顔に何か付いているのか？」
何か、不思議な。
擬音で表すなら『きょとん』という顔持ちをした転校生が、何かあったのかと彼に尋ねる。
「いや、そんなことはない……同学年なのに見たことのない顔をしてたから、つい眺めちまった。すまん」
「俺は気にしてないから大丈夫だ」
案外、話の通る奴なのかもな、と。
噂を聞く限りではとんでもない奴が来る、という感覚でいたのに。蓋を開けてみれば、来た転校生は物わかりの良い人だったのだから。
これが本当に例の転校生か？　あまりの普通さに驚き、彼は『本当に転校生であるのかどうか』を尋ねる。
「あぁ、そうだ」
「お前が……」
噂のか、と言おうとした瞬間に、彼は言葉を飲み込む。
（……というか、噂の事知ってんのか？）
果たして。この転校生は、今現在学校で流れている噂を知っているのだろうか。
簡潔に説明するなら、今度来る転校生は、前科持ちだって内容の噂

なのだが。その噂は、知らない誰かによって尾ひれを付けられ、あまりにもリアリティが無さすぎる噂になってしまっている。
誰が流したか分からない噂は殺人、放火、クスリの何でもござれのオールスター状態。数打ちゃ当たるじゃないんだからとツッコミたくなるのを抑え、彼は噂の真偽を確認してみることにした。
「一応聞いとくけど、殺人とかは？」
「やってないが」
「クスリは？」
「至って健康だぞ」
「放火」
「しそうに見えるか？」
「……ま、だよな。どれもやってるようには見えないよ」
まぁ、そんな訳ないよな、と。
彼は両掌を上に向け、肩を竦めておどけたような様子を見せる。
「噂、ホントに知らないんだな。こっちじゃ今言ったこと全部やってるとか言われてるんだぜ？」
「面白い話だな」
「ま、ハナから信じちゃいないけどな。とてもじゃないけど、やってたら今頃少年院行きだろうから」
――――まぁ、今言った事を『面白い話だな』と一瞥してしまうあたり、相当肝が据わっていそうなのだが。
そんな不思議と笑えるような感覚を彼は覚え、訳アリ転校生と軽い話でも交わしながら、雨が止むのを待ち続けていた。
二人で雨が止むのを待っていたら、フードを被った生徒が走り込んで来て、またもう一人軒下で雨宿りをする仲間が増えた。
フードを被った生徒が象徴であったフードを外すと、そこから長いブロンドヘアーがばさりと零れ落ちた。
（……高巻か）
――――高巻　杏。
ブロンドヘアーに高身長、見る者を魅了する人形のような顔立ちを携えた、一言で表すなら『高嶺の花』という言葉がお似合いの女生徒。

一応、彼も面識がないわけではない。言葉を交わしたのは数回程度だが、それでも”何も知らない”という訳ではないし、不快な感情を抱いている訳でもない。
ただ、それとは別で。
別に、彼女が悪いのではない。悪いのはもっと別の人間であるのだが、彼は〝できる事なら、今ここにはいて欲しくなかった〟と、顔に浮かべはしないものの、若干の不快な気分を覚えていた。
(高巻が来たら、セットでアイツが来るのが決まりなんだけど……ほら、早速来た)
白い車が店前に止まるよう合わせて減速していくのを確認し、彼は隣に立つ転校生を尻目に見る。
(説明……しとくか、鴨志田のヤバさ)
「おい」
「どうかしたか?」
「忠告だから聞いとけよ……学校で平穏に過ごしたいなら、鴨志田にだけは関わるな」
「鴨志田?」
「そ、鴨志田」
白い車が目の前で止まり、助手席の窓が開いていく。
「おはよう、学校まで送ろうか?」
――――鴨志田　卓。
秀尽学園の体育教師であり、バレー部顧問。同時に、元オリンピックの金メダリストでもあり、自身の受け持つバレー部を全国大会出場レベルまで育て上げた実績を持つスーパー教師。
……であるのだが。”鴨志田のヤバさ”という言葉を彼が言ったように、この鴨志田という男には裏が存在する。
表の姿だけを見れば完璧人間、教師の鑑とも言える存在なのだが、裏の姿は全くの別人であり。『指導』と称した部員に対する暴力や、女生徒に対するセクハラ。働いた悪事は数知れず――――というのが、鴨志田という男の本性なのである。
無論、そのような事が露見すれば、鴨志田は今頃牢屋の中にいるの

であろうが。鴨志田のタチが悪い点が、裏の姿を完全に隠し切れてるという部分にある。
体罰を訴えようとすれば、訴えられる前に暴力を重ねて揉み消す。セクハラを訴えようとすれば、訴えられる前に脅してもみ消す。
仮にどちらかを訴えようが、それが信じられる可能性はほぼゼロに等しい。万が一漏れたとしても『あの鴨志田先生が？』となるだけで、効果はゼロ。
故に、彼が鴨志田の裏を知り、酷く嫌悪している理由は凡そ察せると思うのだが。隣にいる転校生もいずれそうなってしまうのではないかと思い、彼は裏を伝える事にした。
「あいつがか？」
「アイツがだな」
――――俺はアイツに夢を断たれた。
嘘偽りのない、真剣な顔持ち。それでも、その顔は決して澄んでいる訳ではなく、激しい憎しみが見えるような顔をしていて。
そう語る彼の顔を見て、転校生はその”本気さ”を確信する。
『乗せて行こうか？』と訊ねることができる程距離が近く、尚且つ優しさまであるあの教師が？　と言いたげな目をして聞いた転校生に対し、彼は断言する。
再び転校生の顔を見返せば、鴨志田に注意を払うような目をしており。何が悪であり、どのような面が彼の夢を断ったのか。それを探ろうとしているようにも見えた。
隣に立っていた高巻は「ありがとうございます」と車に乗り込み、高巻を乗せた車が走り去って行く。
「まぁ、信じられないかもしれないけど。俺はアイツに嫌われているし、俺もアイツを嫌っている。アイツに嫌われたら、俺みたいなはみ出し者になるぞってことだ。気をつけな」
「……信じよう。『夢を断たれた』と言ったお前の目は本気だったからな。それに、人と関わらない無関心な奴なら、前歴があると言われている転校生に対して丁寧に忠告もしない。はみ出し者にも見えないが、俺と同じ事情持ちか？」

「その事情持ちだ。俺の名前は『宮本伯』。お前は？」
「『雨宮蓮』だ。よろしく」
「ああ、よろしく。こんなはみ出しものでも良ければ仲良くしてくれ」
――――意外と、仲良くなれるのかもしれないな。
そう思いながら、宮本は走り去る車を眺め、止みそうもない雨に少しばかりの不安を抱いていたら。
バシャバシャと水しぶきをあげながら、誰かが勢いよく走りこんできた。
「クソッ……変態教師が」
「その声……追っても無駄だ、『坂本』。もう追いつかないだろ」
――――坂本竜司。
元陸上部のエースで、少しおちゃらけた普通の高校生だった。
だった、というのは。今はそうじゃないという意味を表しており。
当時、陸上部のコーチだった人物――――先程も話題になった鴨志田を殴り、その結果陸上部は事実上の廃部。
文字通りグレた坂本は髪を金色に染め、いかにも自分はヤンキーであるという風貌をしている。
それ故、坂本に近づく生徒もおらず。結果孤高の問題児として、宮本や雨宮とは別の意味で話題になっている。
「その声……宮本か。　鴨志田の野郎好き勝手しやがって、お城の王様かっての……」
「宮本、この人は？」
「『坂本竜司』……ま、こいつも俺たちと同じ事情持ちだよ。悪い奴じゃないから安心しろ」
とはいえ。このような見た目ではあるが、宮本はどちらかと言えば〝理解者〟側であった。
陸上部のいざこざを全て知ってる訳じゃないが、少なくとも、坂本も被害者側だというのは分かっている。
陸上部のコーチが鴨志田だったというのは知っているし、坂本の鴨志田に対する態度も考慮してみれば。陸上部廃部の理由は『坂本が鴨志田を殴った』というだけではない。

そして、その何かは――――おそらく、俺と同じだろう、と。そう考えていたからこそ、宮本は坂本を嫌っていなかった。
「事情持ち……？　って、お前が噂の転校生か？」
「雨宮蓮だ、よろしく」
「俺は坂本竜司、よろしくな！　……ってか、お前ら学校遅刻すんぞ？」
「傘がない」
「同じく」
「知るか！　さっさと行くぞ！」
まぁ、仕方ないか。
朝から濡れるのは勘弁だが、裏道を通ればどうにかなるだろう。そう思い、宮本が一歩足を踏み出すと。
「……いって」
軽い眩暈と頭痛が、彼を襲った。
視界がぐにゃりと曲がる不快感をなんとか抑え、よろける体をなんとか踏ん張らせ、彼は落ち着いて深呼吸をする。
一回、二回。三回もすれば、ほんの少しではあるが気分はマシになり。ゆっくりと顔を上げ、立ち止まった事を謝ろうとすれば。
「……お前らもか？」
頭を抑え、頭痛に苦しんでいるのは彼だけでなかった。
雨宮も、坂本も。先程自分がそうしていたように頭を押さえ、空いた片手を膝に突いて気分を和らげようとしていた。
「あぁ……俺もだ」
「新学期早々ムカつくぜ、帰りてー……」
「随分奇妙な事があるもんだな……同時に頭痛が来るなんて」
三人は裏路地を通り、水たまりを避けて学校へと向かう。
ショートカットをしているとはいえ、遅刻しないかどうかが心配だと。そう思い、時間を確認するために宮本がスマホを取り出す。
表示されていた時刻は、８時２５分。このまま行けば、まず遅れる事はない。
――――しかし、それよりも。現在時間を確認するためにスマホを

取り出したというのに、彼の視線は別の部分へと向けられていた。
「……圏外？」
「どうした？」
「いや……スマホが繋げなくて。圏外になってたからさ」
都心にいれば４Ｇと表示される、左上のスマホの通信状況を示す文字は『圏外』を表していた。
同時に起こる頭痛や、都心で圏外になるスマホ。１年に１回もあれば珍しいと言われるような出来事が、同時に起こる違和感。
事実、宮本は少しばかり不思議に思っていた。
――そういえば、人気があまりにもないな、と。
「ここ……秀尽学園だよな？」
その不思議な感覚は、坂本の発した言葉によって〝本物〟となる。『秀尽学園だよな？』という、その学園の生徒であればまず発することはないだろう言葉。その言葉が、坂本の口から出てきたのを聞き、彼は顔を上げる。
――何を言ってるんだ、と。そう思いながら。
「……どう、なってんだ？」
「夢、じゃねぇんだよな……？」
「これが学校か？」
三者三様。
学園に通う二人は驚きを隠せず、転校生で慣れていない雨宮は驚愕する二人に訊ね。それぞれが、それぞれらしい反応を見せ。目の前に広がる異様な光景に対して、宮本が口を開く。
「……城、だよな」
『秀尽学園高等学校』と書かれた銘板の先には、巨大な城が広がっていた。
紫色にライトアップされた石製の城にかかる『バレー部地区大会優勝』の横断幕が、城とのミスマッチを誘い、なんとも奇妙な感覚ではあるが。
節々に〝ここは秀尽学園である〟という要素を感じさせる。それでも、目の前にあるのが何時も通う学校には見えない。

広がる町並みは、何時も見ている物となんら変わらない。
しかし、何故か学校だけが別世界へと変わっている。
「……入るしかないのか？」
「信じらんねー……けど、入るしかねぇよな」
「昨日来たときはこんなのじゃなかった気がするが……とりあえず、一旦入ってみよう」
広いホールに赤を基調とした内装。天井から吊るされた巨大なシャンデリアがホール全体を照らし、厳粛で豪勢な雰囲気を醸し出している。
確か、一生の内に行きたいと思っていたヴェルサイユ宮殿もこんなような雰囲気だったか。なんとなく、宮本はインターネットで見た懐かしい雰囲気と城を重ね合わせてみるが。
「なんだよ、これ……」
「学校……ではないよな」
「独特な高校なんだな」
「ボケてんのか!?」
「冗談だ。しかし、昨日来た時とは全くの別物だな」
「ああ……それに、ただの城って訳じゃなさそうだな」
――何か、気持ち悪い。
朝に覚えたような、鴨志田に出会ったことで覚えたような不快感。ヴェルサイユ宮殿と雰囲気は似ていたとしても、決定的に違うと識別出来るその感覚。
細胞レベルで嫌っているのか、そんな雰囲気を〝なんとなく〟覚えた宮本が、雨宮や坂本に続いてホールの正面を向く。
「趣味ワリーよな……見てるだけで腹立ってくるぜ」
「同感だ。流石にあれはな」
「あれは……鴨志田だったか？」
やはり、城に対して感じた不快感は偽物でもなく。
ホールの正面に視線を送れば、半裸で赤いマントを装着し、王冠を被った巨大な鴨志田の絵画が飾られているのが見えた。
気持ち悪い、と言うか。学校のあった場所に、鴨志田を王として讃

え、崇拝する城があるだなんてなんとも皮肉な話だと。鴨志田の裏や現状を知っているからこそ、伯は絵画を見てそう思わされたのだが。
正面ホールの横にあった扉が大きな音を立てて開くのを聞き、そんな不快感も一瞬だけ消えた。
あまりにも人気がなかったものだから、誰でも良い。最悪、鴨志田だって――――とにかく、誰かに会いたい。そんな思考を抱いて空いた扉を見つめれば。
「誰――――」
だ、という言葉は口から出てこなかった。
何故なら、開いた扉から姿を現したのは。研ぎ澄まされた剣を構えた甲冑だったのだから。
誰でも良い。扉が開いた時点でそう願ったのは事実だが、これではますます気味の悪さが増すだけだった。
（……流石に、おかしくないか？）
甲冑が持っている剣先は、何時でも使用できるように鋭く研がれているよう見える。人の体に突き刺せば、誰であろうといとも容易く体を貫通するだろう。
――――ここは危険だ。
そう理解するのは容易かった。
「城から出るぞ二人とも！　明らかに様子がおか――――がっ！」
しかし、冷静になるには遅すぎた。
入って来た扉から逃げることを促した瞬間、宮本の背中に激痛が走る。
「宮本！」
そのまま勢いよく床に倒れ、甲冑が持つ盾で背中を強く抑えつけられる。
（このままじゃ、二人が……！）
「お前ら、早く逃げ――――」
――――せめて、二人だけでも。
その思いで宮本は顔を上げる、が
「クソっ！　離しやがれ！」

「宮本！」
時すでに遅し、だった。
二人が同じように甲冑に押さえつけられるのを確認した所で、彼もトドメの一撃を背中に叩き込まれる。
「がはっ……！」
「連れていけ！」
連れ去られる二人の姿。
その景色を最後に、宮本は気を失った。

＊＊＊

「……ここは？」
目覚めたときには、宮本は牢獄に収容されていた。
強く抑えつけられ、その上気絶する程の攻撃を直に貰ったからか。背中はまだヒリヒリと痛み、立ち上がるのも億劫になる程だった。
とはいえ、黙って寝ている場合ではない。彼は鉄格子に手をかけて、ゆっくりと外を見まわしてみる。
「雨宮と坂本はどこ行ったんだ……？　ここにいるのは俺だけなのか……？」
大声を出し、二人の安否を確認するか。そう考えもしたが、そうすれば甲冑が再び姿を現すだろう。
自分の近くに二人がいる保証はどこにもない。その上甲冑が来るとしたら、今度は本気で殺す気で来るはずとも言える。
下手に動けば迎えるのは死だけだ。非現実的な状況に直面していても、頭は随分と冷静に回っていた。
「ただのコソ泥だと思ったら……まさかお前だったとはなぁ、宮本」
牢屋の外から、聞き慣れた声がする。
しかし、その声の主は坂本でも雨宮でもない、と。それはハッキリとわかっていた。雨宮はもっと若い声をしているし、坂本はこんなねちっこい喋り方で喋らない。
（……ああ、頭はそれなりに冷静だったのに忘れてたよ。この腐った

城の王様が誰なのかを）
となると、声の主はこいつしかない。
かつ、かつと。むき出しになった石の上を歩む音がする方に顔を向け、そのあまりに酷い声の主の姿を見て、彼は顔を歪める。
「絵画といい服装といい趣味悪ぃぜ……カモシダさんよ……」
「まさか貴様もいるとはな……また俺様に逆らうつもりか？」
朝も見た『鴨志田　卓』が、嫌味のある憎たらしい笑みを浮かべながら、そこに立っていた。
――――だが、目の前に立っているのは、鴨志田であって鴨志田じゃない。
ハートだらけの趣味の悪いマントに、その下はおそらくパンツ一枚のみ。状況が状況であれば、今すぐにでも写真に撮って十数年はネタにしていただろうが。そんな余裕すらも見せずに、宮本はここにいない2人の場所を聞いた。
「二人をどこやったんだ!?」
「二人とも別の牢屋に収容されている、処刑されるのも時間の問題だろうがな」
つまりは、まだ〝生きている〟。
良かった。そう胸を撫でおろして、ここから出るために、あえて鴨志田を煽ってみせる。
「ああ、そうかい……教えてくれてありがとさん」
何もしなくたっていい。いい、が。こうでもすれば、きっと短気で傲慢な鴨志田が釣れるだろうと。そう踏んで、伯は唾を鴨志田の靴にかける。
「貴様……！　その反抗的な目が癪に障るんだよ！」
――――釣れた。
鴨志田が牢獄の扉の鍵を開けた瞬間に、ゆっくりと腰を落として待ち構える。
（チャンスだ！）
自分が扉の鍵を持っていない以上、ここから出るには外側から誰かに開けて貰う必要がある。

（鴨志田を突き飛ばして、鍵を奪って突っ走るしか道はねぇ……！）
リスクこそあるが、ここで動かなければ二人の命が危ない。
幸い、脚には自信がある。声こそ聞こえないが、そう遠くにはいないはずだ。
鍵を奪って、鴨志田が起き上がる前に牢屋の扉を閉める。とても成功するとは思えないが、やるしかない。そう言い聞かせて、無防備な鴨志田にタックルをかます。
（入った！）
――――だが、鴨志田とて元日本代表選手だ。
その体の質は未だ失われていないし、たかが一高校生が歯向かおうとしても、余裕で捻り潰せる程度には仕上がっている。
「ほう……貴様、まだ歯向かう意思があったか」
ニヤリ、と鴨志田が笑う。
足元に食らいついた宮本を足を振るうことで跳ね除け、強く背中から壁に打ち付ける。
「がはっ！」
「無駄に頭の回るネズミめ……まだ歯向かう気か？」
これが欲しかったんだろう？　と言わんばかりに、チャラチャラと鍵を見せびらかす鴨志田を。宮本は強く睨みつける。
たとえどんな事があろうと。鴨志田に従うだなんて、死んでも御免だ。鴨志田に対する怒りと憎しみが詰まった彼の反抗の意思は、止むことがなかった。
「黙ってくれよ……そのニヤケ声聞いてると、吐き気が沸いてくる」
「ッ……！　貴様！」
倒れ込んだ宮本の腹に、鴨志田が流れるように蹴りを入れる。
どんなに自分の事が嫌いであろうと、現実の鴨志田では殺しはしないだろうが。ここは何もかもが狂った世界で、異常な学校にいるのは異常な鴨志田。常識は通用しない。
意識を失えば、本当に死に直面する。それだけはダメだと思い、彼は唇を強く噛み、荒い息を抑えて鴨志田を強く睨み続ける。
「貴様は俺が『王』として立ち回るには邪魔すぎた！　野球部で実績を

残し、その中心に立っていたのが貴様だ！」
「王……野球部……何、言ってんだ？」
「陸上部と一緒に潰すことを考えた！　俺の手にかかればいつでも潰すことは可能だった！　しかし……それだけじゃ足りなかった！　陸上部を潰した俺に最後まで反抗し続けた貴様がたまらなく癪に障った！　だから野球部の奴を脅して貴様の腕を潰した！　残念だったよ！　貴様の痛がる姿を生で見れなくて！」
一瞬。
ほんの一瞬。それこそ、時間にして表せば一秒もあるかないかの秒数。
しかし、鴨志田の口から聞こえた言葉は、宮本が抱く強い憎しみを忘れさせてしまう程の力を抱いていた。
鴨志田の影響で”夢を断たれた”のは知っている。
ただ、それでも。鴨志田がそこまで関与していた事を知らされたのは、初めてだったからか。
――何を、言っている？
有り余る程に存在する憎しみを捨て、疑問が浮かび上がった瞬間に。
「なんだ!?」
鴨志田の蹴りが、一瞬止まった。
その後数秒もしない内に、爆発音が聞こえた方向から複数の足音が聞こえてきた。
甲冑か？　そう思考を巡らせるも、鴨志田の狼狽え方からしてそれはない。
となると、有り得るのは――その少しばかりの彼の希望は、見事的中した。
「宮本！」
「その声は……なぜ逃げ出している!?」
「坂本と……それ、雨宮、か？」
左手の人差し指を雨宮らしき人物に向けつつ、宮本はそう訊ねる。
雨宮らしき人物、というのは。坂本の隣に立つ彼の姿が気絶する前

と後で大きく変わっており、あのようなロングコートは着ていなかったはずだ、と。それを確かに覚えているからこそ、宮本は雨宮に訊ねた。

ああ、と力強く頷く雨宮を見て、宮本も隙に乗じて立ち上がろうとするが。足に力が入らず、自分の物ではないかのような感覚を覚える。

「まぁいい……ならそこでこいつと一緒に聞いているがいい！　野球部を潰す前にまずはお前から潰すことを考えた……その醜い精神力すらも折ってしまう位の強い衝撃を与えることにした。まずは野球部の一人を脅し……その後はプレー中に事故を装い、お前を潰すように指示を出した」

――――まさか。

鴨志田の口から出された言葉が真実であるならば。そう察した宮本が、息を絶え絶えにしながらも鴨志田に訊ねる。

「……じゃあ、あの時のデッドボールは！」

「察しがいいな！　お前が受けた左手の指の骨折の原因になったデッドボール。あれこそがお前に対する報復だ！　あそこまで上手く行くとは思ってなかったけどな！」

――――ああ、そうか。

憎しみとは違う、一種の絶望のような感情。

そんな絶望した顔を見れて満足だ、と言わんばかりに鴨志田が高笑いをするが、それを見たとしても、彼の憎しみは戻らない。

幸い自分の指は元通りになったから良いものの、その脅された部員の心の傷は治ることはない。

いや、そうではない。

鴨志田という男がとことん憎く、憎く、憎く。何故、かのような極悪人がほめたたえられ、自分が影として生きなければならないのか。

指が元に戻ったとしても、夢が戻る訳でもない。

消えない傷を作られたのは、自分もか――――その絶望に、皮肉にも元に戻らない指のみを伸ばしていた左手が、ぱたりと力を失ったかのように地面に落ちる。

「お前ら……早く逃げろ……」
「おい、ドア開けらんねーのかよ!?」
「鍵がかかってる、さっきのような大技を放てば壊せるだろうが、それだと中にいる宮本まで……!」
「どうにもなんねーのかよ!?」
……このまま、牢屋の中で最期を迎えるのか。そう全てを投げ出し、目を閉じて文字通りの”死”を受け入れる。
坂本の怒鳴り声、雨宮の俺を呼ぶ声、鴨志田の高笑い。その全てが遠くなって行く。
（……くだらない人生だった）
「これで……止めだ！」
そして。
鴨志田に対する”憎悪”すらも手放した瞬間。
情けない。
頭の中に、『宮本　伯』の声が響いた。

＊＊＊

……誰、だ？
散々歯向かう姿勢を見せておいて、所詮はその程度か？
……この、程度？
生を諦め、死に体を委ねる浅ましいその姿を見ると反吐が出る。
それでも”我”なのか、とな。
……何が言いたい。
貴様も、そこらの有象無象と変わりない眠りこけた獅子なのか、と問うているのだ。

……んだよ、それ。

歯向かうことを諦め、死を受けいれるその姿が。

貴様の”本当の姿”なのか？

――――ピクリ、と。

謎の声に対し、今まで受動的だった彼が。『それは違うだろう』と言わんばかりに、体を大きく揺らして反応する。

「……違ぇ」

幻聴か、それとも本当に聞こえているのか。

――――この際、頭の中に響く声の正体なんて何だって良い。俺が俺自身である事の証明。最後まで、鴨志田に対する反抗の旗を掲げてやる。

傍から見れば、何か吹っ切れたのか。そう感じてしまうような余裕に、鴨志田に対する消えない怒り。

忘れかけていたその２つを取り戻して、彼はもう一人の自分（宮本伯）に強い意志を見せつける。

「俺の、姿は……こんなんじゃねぇ……鴨志田に、平伏すなんて……一瞬たりともクソ喰らえだ！」

「ふん……ついに幻聴が聞こえるようになったか。こいつもそろそろ終わりだな」

地面に両手を付き、もう一人の自分の質問に答えるかのように、彼は失いかけていた意思を見せる。

一度は消えた、心に燃え盛っていた”叛逆の炎”を見せつける。

頭の中に、笑い声が響く。

そうだ、そうだよ。俺が見たかったのはその抗う姿だ。求めていた物の現われにより、気分が良くなった『宮本　伯』が、再度質問を投げかける。

もう一度、お前に聞こう。

戦う意思（叛逆の心）はあるか？

頭の中に響く声に対して、ニヤリと口角を上げる。
――そんな物、答えるまでもない。旗を掲げ続ける限りは、俺の答えはたった一つだけだ。
その想いが、彼を立ち上がらせる。
「ある、に……」
蹴りの嵐を喰らっても尚、彼は立ち上がる。
「あるに……！」
不屈の魂が、彼の中に秘められている力を呼び起こす。
「あるに……決まってんだろ！」
――叛逆の心が、唸りを上げる。

その心意気、しかと受け止めた。
貴様が力を求めると言うのなら、我の力を少しばかり授けよう。
我は汝、汝は汝
深き眠りから覚めた英雄よ。
思うままに力を振るうがよい。

――ああ、そうさせて貰おう。

血盟の証だ。
さあ、高らかに我が名を呼べ！

――行くぞ。

Awakwning of rebellion
反逆の目覚め

来い、アレキサンダー！

1―2【Another me】

青い炎が、彼の体を大きく包むかのように生成される。
強風が、彼の心の勢いを体現するように吹き上がる。
彼自身は、自分の体に何が起こってるのかはハッキリとわかっていない。
突然、”自分の声”が聞こえた。
その声が、自身に降り注ぐ窮地を救い、覆いかぶさる仮面を引き剥がしたらこうなった。
それを除いて、確かに分かっている事がたった一つだけあるとするならば。
地面から吹き上がる風によって逆立った髪が元に戻り、”何か”が起こった痕跡さえも消え。
ただ一つの事実を確信した宮本が、右手で握り拳を作り、鴨志田に対し悪人のような笑みを浮かべる。
「……最高の気分だ」
肉体的にも、精神的にも。その状態がピークと呼べる程までに調子が良い事。
それが、ただ一つだけ分かっていた事実だった。
「オ、オイ……アレって！」
「俺の時と同じだな、俺もあんな風になっていたし、間違いないだろう」
――――成程。あの爆発の正体はこれか。
雨宮と坂本がいた方向から聞えた、謎の爆発音。それを自分が体現したからこそわかる、そこで何があったかの正体。
となれば。あの甲冑も雨宮が吹き飛ばしてきたのだろう。そう察して、尻餅を着いた鴨志田に一歩、二歩と歩み寄る。
「おい、鴨志田」
「ヒッ……！」
「……今すぐ鍵出しゃ見逃してやる」
ただ、彼はとにかく冷静だった。

圧倒できる力を得たにも関わらず、”最善”を理解し、”最善”を尽くす。
今の目的は、鴨志田に仕返しをする事ではない。
できる事であれば、現実の世界やこちらの世界で溜まった鬱憤を晴らしたいというのは確かなのだが。まずはここから脱出するのが最優先だと判断し、鴨志田に牢屋の鍵を要求する。
「わ、わかった……ほら……！」
「……立場が逆転したらすぐにこれか。少しは反抗してみせろよ」
つっても、俺が言える事じゃないか。
そう自嘲的に笑えば、鴨志田が差し出した鍵を手荒に受け取り、牢屋の錠に鍵を通して捻り、扉を開ける。
「宮本！　お前大丈夫だったのかよ!?」
「なんとかな」
「その姿……お前も『声』が聞こえたのか？」
「話は走りながらにしよう。あの甲冑が来るのも時間の問題だしな」
――あぁ、でも。これ位なら、きっと二人も許してくれるだろう、と。
走り去ろうとする前に、牢屋に閉じ込められた哀れな鴨志田の方を向いて、馬鹿にするような笑みを浮かべる。
「牢屋がお似合いだぜ、鴨志田サン」

＊＊＊

「それで、雨宮も窮地に陥った時に声が聞こえたと……」
「頭に声が響き、契約を交わす。俺と大体同じだな」
「で、服装が変わって仮面が着く。そして、不思議な技が使える。それも確かなんだな？」
「あぁ……だが、説明は難しくてできないな。あの感覚はなんとも説明しにくい」
「ま、俺にも出せるんだろうけどな……とにかく、甲冑に見つからないように突っ走るぞ」

とにかく、無我夢中に走り続けた。
雨宮が言うには、『甲冑なら不思議な力で倒すことができる』らしいが。宮本はその発動条件を理解していないため、戦闘は基本的に避ける方向性で行くことにした。
鴨志田もバカではないだろうし、自分らを捕らえるためにもそれなりの援軍をここに呼んで来てると考えられる。出会い頭に戦いを挑んで倒して走って、とやっていれば、騒動を聞き付けた甲冑が集まってきて雨宮一人じゃ処理しきれなくなって……と、悪い結果になるのは見えている。
「ぜぇ……ぜぇ……お、お前ら……疲れてねーのか……？」
「全くだな」
「俺も。坂本の体力がないだけじゃないのか？」
「これでも元陸上部だったんだぜ……体力には自信があるんだけどよ……」
「となると……身体能力の強化も兼ねてるのかもしれないな。とりあえず、甲冑も見当たらないし一旦休もう」
「すまねぇな……」
逃げ道の多い牢屋の一部屋を借り、どさりと座り込んで体力を回復させる。
ぜえぜえと息を吐く坂本に対し、宮本と雨宮の息は整ったまま。更に手首を触ってみれば、脈拍も通常時と一切変わっていないようにも感じられた。
明らかな身体能力の向上。特段足が速くなっているようには見えないが、スタミナの方はかなり増しているようにも思えた。
「……ってか、訳分かんねーよな。服も変わってるし、どうなってんだ」
「雨宮は黒のロングコートで、俺は黒の軍服……制服が黒いからこうなってるのかもな」
「ソレ、走りずらくねぇの？」
「制服で走ってるのとそんなに変わらないな。ベルトが高い位置にあるのが気になる程度だ」

「走りずらいのは確かだが、身体能力もその分上がっているからな。あまり不便には感じない」
更に言えば、服装も大きく変化していた、
どちらも黒を基調としており、雨宮はロングコート調、宮本は軍服調の服装に変わっている。制服が元々黒かったが故にこうなっているのかもしれないが、原理はわかっていない。
と言うよりか。先程まで着ていた制服はどこへ行ったのか、という方が問題であり。この城を抜けた後もこうであれば、無事に抜けられたとしても学校に行けないじゃないかという不安の方が強かった。
「へー……成程な。やっぱ楽じ――――『おい！　隣にいる奴ら！　ワガハイを助けてくれ！』」
「……誰だ？」
明らかに三人の誰でもない声が牢屋の外から聞こえ、三人共立ち上がり、周りの様子を伺う。
聞こえている方向からして、近くの牢屋から声を発しているのだろうが。先程確認したときには、人がいる様子はなかったはずのような気がしたが故に、ある程度の警戒はしていた。
していた、が。鴨志田の仕掛けた罠かもしれないが、これが過去の自分たちと同じように本当だったら――――そう考えれば、体が動かない訳がなかった。
甲冑を単独で処理できる雨宮を先頭に牢屋の扉を静かに開け、声が聞こえる方向へと足を運ぶ。
ある程度歩き、ここから声が聞こえるだろうという牢屋の目の前に立つ。
――――のだが、その牢屋に人がいるようには見えない。奥が暗がりで見えないため、もしかしたら見えにくい場所にいるのかと思い、宮本が目を凝らして奥を見てみようとする。
「……どこにいるんだ？」
が、やはり確認できない。
というか、寧ろその声は下から聞こえるような気がするのだが――――そう思えば、声の主は彼らの足元から声を発する。

「下だ！　下に落ちてる鍵拾って扉を開けてくれ！」
「下ぁ？」
　坂本がそう声に出し、三人で下を向いてみれば。
「……クマか？」
「ネコにも見えるな」
「タヌキみたいな見た目してんな……って、ここから出たいのはこっちもなんだよ！」
「クマでもネコでもタヌキでもねーよ！　次言ったらタダじゃおかねーからな！」
　――そこにいたのは、二足歩行の猫だった。
　いやいや待て待て。
　第一、猫は四足歩行の生物であるし、精々言葉を発せたとしても『ニャー』という鳴き声だけだろう。そう言いたくなるのも否めない。
　否めない、が。牢屋を隔てて彼らの目の前にいる謎の生き物は、少なくとも人間と呼べるものではない。近いのは猫か熊かたぬきか。
　まぁ、それが猫だとして。黒い肌を持った２～３０ｃｍ程度の猫が、人語を喋りつつ彼らに助けを求めている。ついでに猫と呼ばれて怒り心頭である。
「覇気がないからそんなに怖くないぞ」
「うるせー！　というより、お前達だって出口を探してるんだろ！
　ワガハイが出口に案内してやる！」
　――”出口”。
　彼らが今一番欲しがっている情報であり、この猫はその情報を握っている。それを知り、三人の心が揺さぶられる。
　出口を知っているとはいえ、この猫が味方だという保証はない。とはいえ、この猫の助け無しで脱出できるのかと聞かれれば、答えは『いいえ』になる。
「オマエらだって外に出たいだろ!?　それに、ワガハイはクセっ毛と軍人の服が変わった理由も説明してやれる！　脱出できて謎も解明できる、悪くねーだろ？　な？」
「本当にか？」

「本当だって！　信じてくれよ！」
「なぁ……どうするよ」
閉じ込められた鴨志田が増援を呼んでいない訳がないし、仮に再び甲冑に見つかれば、戦いは免れられない。
こちらで戦力になりそうなのは雨宮と宮本のみで、その内片方は戦闘経験すらない素人。一対一の戦いならまだしも、一対多となれば苦戦を強いられるだろう。
服装が変わった理由が説明できる。つまり、この猫も自分らと同じ力を所持していると考えられる。
正直な話をしてしまえば。このまま何の情報もなしに地下道を走り回ってもジリ貧になるだろう、と全員が思いかけていたのは事実だ。
二人には無尽蔵のスタミナがあるとはいえ、そのスタミナが人間基準で高いレベルでしかない坂本がこちらにはいるのだし。いくら気を付けろと言ったとしても、無理なものは無理だろう――――そう考えていたからこそ、宮本は屈んで鍵を拾った。
「……出すぞ。嘘かもしれないけど、頼らずに行くよりマシだ」
「マジか!?」
「鴨志田の仲間だったら俺達で押さえ込むまでだ」
「敵でも何でもねーから安心しろって。てか、カモシダの仲間なら牢屋にぶち込まれてねーからな!?」
――――まぁ、それはそうか。
鴨志田の手によって仕掛けられた巧妙な罠かもしれないが、俺たちと同じ能力を持っているのなら、鴨志田の側近として置いておいた方が良いだろう。
確かにそうだなと思い、宮本は鍵を拾い、南京錠を開けて猫を外に出す。
「フゥ～！　シャバの空気はうまいぜ～！」
「一応聞いておくが、名前は？」
「モルガナだ。猫って呼び方はやめろよな」
「わかったよ、モルガナ。出口までの案内頼んだ。ついでに戦いの方

もな」
「で、出口ってどこなんだ――――『侵入者だ！捕まえろ！』」
お手並み拝見のチャンス。
そう言ってもさほど問題ないようなタイミングで、鴨志田が呼んだであろう二体の増援が彼らを発見し、捕らえようと躍起になっていた。
「来やがったな……軍人！　オマエにペルソナの出し方を教えてやる！」
「任せたぞ！」
「ペルソナはもう一人の自分だ！　仮面を外す、つまり心の枷を外せばペルソナは現れる！　クセっ毛、お手本を見せてやれ！」
「アルセーヌ！」
雨宮がペルソナのを宣言すると、雨宮の目に付いていた仮面が消え、背後に『アルセーヌ』が現れた。
「来い！　ゾロ！」
モルガナもペルソナを出したのを確認し、宮本は息を吐いて俯き目を閉じる。
（……心の枷を外す、か）
現役時代にもやっていた、彼なりのルーティーン。こうすれば自然と心と頭が落ち着いて、視野が広がる。心と体のバランスが最高になって一体化する。
それができれば、もう一人の自分と向き合うことだってできるはずだ、と。そう確信していたからこそ、敵が目の前にいるというのに余裕を持っていた。
ゆっくり、落ち着いて。三度深呼吸を行えば、心の枷を外した彼が目を開眼する。
「ぶっ放せ……アレキサンダー！」
宮本の顔を覆う仮面が砂のように溶けていき、それが完全に消失したと思えば。
青い炎でできた渦のようなものが背後から現れ、〝ソレ〟がだんだんと人の形のように変わっていき、青い炎が完全に人の形を形成すれ

ば、彼の背後に巨大な筋肉質の男が現れる。
アレキサンダー――――そう言われれば、世界最大の帝国を創り上げた〝最強の戦士〟が思いつくだろう。
「これが、俺のペルソナ……！」
「ふん！　意気がりおって！」
「軍人、随分とサマになってんじゃねぇか！　頼んだぜ！」
「あぁ、任せろ！」
けたましい咆哮を開戦のゴングとして、彼らの〝初陣〟が始まった。

＊＊＊

「ここを通ったら出口だぜ」
「何から何までありがとな」
「すげ……ホントに知ってたんだ」
「ホントにってなんだよ！　それより、オマエらなかなかやるじゃねーか。流石にワガハイには劣ってたけど、二人ともそこそこ良いペルソナ持ってて驚いたぜ」
〝ペルソナ〟。
そのキーワードが、この世界では非常に重要らしい。
誰しもが持っている、心に秘めた〝もう1人の自分〟。特定の条件を満たした場合に現れる仮面を強引に剥がすことでペルソナ使いとなり、この世界にいる敵と同等に戦うことができる――――と、専門用語こそ多いものの。宮本や雨宮が得たチカラは〝信頼できる武器〟という認識で問題なかったようだ。
モルガナのゾロや雨宮のアルセーヌ、宮本のアレキサンダーのように、神話や歴史上の人物の名前を持つことが多く、契約を交わすと服装が変わり、決まってナイフや銃などの武器を持つらしい。らしい、のだが。
「なぁ、モルガナ」
「どうした、軍人」

「モルガナはパチンコ、雨宮はピストル。ペルソナってに覚醒したら、銃もセットで付いてくるのは間違いないんだよな？」
「間違いないぜ。つーか、オマエがおかしいだけだろ」
「一丁前に軍服着といて銃を装備してないって、もはやギャグだろ……」
何故かはわからない。何故かはわからないが、宮本だけ銃を持っていなかった。
モルガナ曰く、覚醒したら銃も一緒に付いてくるのがデフォルトらしく。事実、雨宮はハンドガンを持っていたし、モルガナも『本当に効いているのか？』と威力に疑問こそあれど、一応遠距離系の攻撃手段を持っていた。
ただ、何故か。やはり何故かはわからないが、彼は銃を持っていなかった。
初期衣装が軍服なのにも関わらず、頼れる武器と呼べるものは二本の短剣のみ。銃を所持していないとなれば、どうしても射程の有利不利は生まれてしまう。そして、それを覆せなくなった場合、とてつもなく不利な状況となるのは間違いない。
とはいえ、弾倉に限りがある以上、銃での攻撃はどちらかと言えばサブ攻撃に当たるのだろうし、メインを失ってない分まだマシなのかもしれないが。やはり”制限されている”感は否めなかった。
「……詰んでないか？　これ」
「何言ってんだ……で、この城の外に出りゃ元の世界に戻れるぜ。ワガハイはまだここに用があるし、オマエらとはここでお別れだな」
狭い通気口を抜けて外に出れば、そこに広がるのは元の世界――――ではなく、元の世界のような街並みであった。
これで現実に戻り、後ろを振り向けば元の学園が広がっていればよかったのだが。そんな都合の良い事もなく、振り返れば、やはり『先程の出来事は嘘ではない』とでも言うように巨大な城が立っている。
「まだここに用がって……ペルソナ？　ってヤツを使えるなら捕まんねーとは思うけど、こんな世界で何するつもりなんだよ」
「ワガハイの計画に乗ってくれるってなら説明してやるぜ！」

「帰るぞ」
「あぁ」
「酷い目に遭うのはゴメンだもんな」
「おい、オマエら帰んじゃねぇ！　特にクセっ毛と軍人！　オマエらは既にワガハイの計画の一部に入ってるんだからな!?」
『計画の一部に入っている』とやら、何か不穏な言葉が聞こえた気がするが。
そんな不穏な計画の内容を聞く前に、そそくさと逃げるようにして彼らは現実世界の方へと歩みを進めた。

＊＊＊

『現実世界に帰還しました』という無機質な音声と共に、彼らは元の世界に帰ってきた。
二人の服装は制服に戻っているし、暴行を加えられた宮本に目立った外傷があるわけでもない。
宮本も雨宮も坂本も、三人を取り囲むこの世界も。全てが元通りになっていた……のだが、一番元通りでいて欲しかった〝時間〟だけは元通りにならなかった。
向こうで過ごした時間も現実世界にバッチリ加算されているようで、朝に降っていた小雨は止み、太陽も元気に顔を出している。
スマホで時間を確認すれば１２時過ぎ。これだけの大遅刻をして学校に向かえば、三人して怒られるのは確定だろう。
普段であれば、宮本も坂本も素直に帰っていた。午後から行くだけというのは普通に無駄だと考えていたからだ。
ただ、転校初日の雨宮がいる。初日からサボりとなれば、先生からの評価もますます悪くなるだろう。〟前歴からして遅刻するのは案の定〟と変らない可能性もあるが。
更に言えば、あのような出来事があった中、直ぐに帰ります――――なんて事ができる程肝は据わっていなく。
モルガナから色々な事を教えてもらったとはいえ、やはり未だ謎の

方が多い世界。話し合おうが解決する訳ではないが、それでも一人になるのが少々不安だった事は事実だ。
「……なぁ、結局あの世界って何だったんだ？」
「モルガナが『オマエらはワガハイの計画の一部に入っている』とか言っていたが……」
「もう一度、あの世界に行くことになるのかもな。死ぬ思いはしたくないけど、何とか生きてけそうだったし。そもそも夢だったかもしれあいけどな」
　とはいえ。窮地に陥りながらも、もう一人の自分に意思を見せ、叛逆の心をペルソナに昇華させた感覚は未だに二人の中に残り続けており。
　やはり、その感覚が”あの世界は夢ではない”という事実を強くさせる。
「オマエらはいいけどよ、俺はあの世界じゃ無力なんだぜ……？　また連れてかれたら今度こそ死んじまうよ」
「とりあえず、学校に行こう。話は放課後にでも」
「ケーサツに見つからないようにな」

―４／１１　放課後―教室―

あの後、彼らは先生にたっぷり怒られた。
あれだけの大遅刻をして怒られないはずがないのだから、それはそうだろうと言いたくなる気持ちもわかる　が。とはいえ、仮に警察の通報があったら間違いなく生徒指導もセットだったと考えれば、それを回避できてラッキーだったとも言える。
　普段の素行が悪い坂本や、前歴持ちで転校初日だった雨宮は未だ怒られているが。鴨志田との問題の火種にはなったものの、態度や成績はそれなりに真面目だった宮本は、『次はやるな』というレベルの説教で終わり、一人悠々と廊下を歩いていた。
（……ま、屋上だな。一番話を聞かれなさそうなのは）

確か、屋上(あそこ)は立ち入り禁止だった筈だと。
屋上の扉に”立ち入り禁止”と書かれた張り紙が貼ってあったことを思い出した宮本が、あそこであれば問題ないだろうといった判別を下し、廊下で教師と立ち話をしている雨宮の方へと向かう。
「屋上に来てくれ」
そう手短に、小声で耳打ちをしてアイコンタクトを取れば、意図を察した雨宮は頷き、それを見た宮本は屋上へと向かっていく。
「……やっぱ、立ち入り禁止って書いてあるな」
まぁ、そっちの方が彼にとってはありがたいのだが。
元より噂なんて完全に出回っているのだし、今更屋上に侵入して悪評が増えようと気にはしない。そう思い、彼はドアノブに手を掛け、鍵のかかっていないドアを開ける。
思っていたよりもドアはすんなりと開いたため、これならトラブルもなく安全に話ができる。
そう、彼は思ったのだが。
「ふんふふ～ん……」
そこに人がいる、という予想外の事態は考えていなかった。
――――ＯＫ、いったん閉じよう。もう一度貼り紙を見てみるんだ。
ゆっくり扉を閉じ、屋上から一旦出て、扉に貼ってある貼り紙をもう一度声に出して読んでみることにした。
立ち入り禁止、Ｋｅｅｐ　ｏｕｔ――――人が入っちゃいけないよ。
「いや、いただろ」
人が入っちゃならない場所に一人でいるだなんて、きっと地縛霊か何かに違いない――――とできれば、どれ程良かったのだろうか。
「……んな訳あるか」
冷静に一人ツッコミを入れ、宮本はもう一度ドアを開ける。
ドアを二度開閉すれば、その人物がいなくなっているという怖い話がある筈が無く。先程と同じ位置に、彼女は存在していた。
こちらに背中を向けているので顔は分からないものの、ピンク色の

セーターを着用している、という事は伺える。他にわかる情報と言えば、髪にパーマがかかっている位だろう。
とはいえ。雰囲気からしてではあるが、自分や雨宮や坂本のような”こちら側”の人間には感じることができなかった。
とりあえず、このままここに居座られていると今朝の話をしようにもできないのだから。何をしているのか話を聞き、ここを退いてもらうようにしよう。そう考え、宮本は歩み寄り、声をかける。
「すみません」
「はーい……って、貴方は？」
ふわふわのパーマを揺らしながら、座っていた生徒が立ち上がり、くるりと振り返る。
彼女の手に視線を向けてみれば、手先が黒く汚れており。更に視線を下に移せば、小さなプランターが複数個存在していた。
――園芸部か、それとも。そう予測をつけ、彼は更に話を切り出す。
「何してるんですか？」
……まぁ、そう聞き返されてしまえばおしまいのような気はするが。
立ち入り禁止の屋上にいる彼女もそうだが、その屋上に理由もなしに忍び込む宮本も宮本である。
と言うか、彼はそう聞かれた場合の理由を考えていなかった。
「ここで野菜を育ててるの、先生の許可を貰ってね。知ってるのは先生と貴方だけ」
「……園芸部じゃないんですか？」
「ふふ、そう見えたよね。それに、学校で野菜を育ててるなんて知って驚いたでしょ？」
「手先が黒く汚れてたので……それでも、驚きましたよ。小さなプランターで野菜を栽培するのを見るのは初めてでしたし」
――まぁ、悪い人ではなさそうだ。少なくとも、チクるような事はしなさそうに見える。
心の中でそう思い、『どうして貴方はここに？』と聞かれなかったこ

とをほっと安堵して、本題に移る。
「ここ、まだ使います？」
「ううん、もう帰る所。だけど……」
「何か問題でも？」
「そんな事はないよ。でも、せっかくこうやって出会ったんだし。貴方に、一つお願い事をしようかなって」
「お願い事……」
まぁ、いくら”可愛い先輩”のお願いであろうが、内容が面倒臭ければ断るつもりでいた。
屋上に出入りしようが、特段気にされないのは嬉しい事であるが。今は自分の周りの事に手を回すので精一杯であるし、何よりあの世界の事も気になる。モルガナのプランというのも気になる。
数時間もかかるようなお手伝いであれば、結ばない方が吉だろう。とはいえ、内容を聞かずに断るのもどうかと思い、宮本はその内容を言うように促す。
野菜栽培をしているとの事であるし、少しプランターの手入れを手伝って欲しいだとか、掃除を手伝って欲しいだとか。まぁ、大方そこら辺だろう。目をキラキラさせながら話す彼女を見ながら、彼はそう思っていた。
「実験台になってほしいんだけど……」
――――当然、そんな斜め上の”お願い事”が飛んでくるとは、予想にもしていなかった。

1―3【Only understanding person】

―4／12　放課後―屋上―

「じ……実験台、って……？」

一歩、二歩、三歩。

人間は、生命の危機を実感したときに、その対象から離れるというのは想像に難くないが。

やはり、そう言われたらそうなるよな――――と言われてしまうような行動を、実験台にされることを危険視した宮本は取っていた。

「あっ、違うの！　そんなに怖がらないで！　実験台というか……私が作ったお野菜を食べてみた感想が聞きたくて」

「あぁ、なんだ……実験って、味見のですか。それは別に構わないんですけど、自分なんかでいいんですか？」

「この事を知ってるのは先生と貴方だけだから、貴方にしか頼めないの」

「なら先生がいいんじゃ……」

「同年代の子の方が、率直な感想をくれるんじゃないかと思って……ダメかな？」

「ダメではない、ですけど……」

受けて不利益を被る訳でもないし、時間もさほど要求としない。ついでに野菜も食べられる。

”お願い事”としては、やりやすい上このない内容である。事実、野菜を食べて味の感想を言うだけで役に立てるのなら誰でも素直に受ける、のだが。

（美味いか苦いかまずいかの三択しか用意されてないぞ……俺の口……）

――――彼は、自他共に認めるバカ舌だった。

よく『回転寿司のマグロはアカマンボウ』だと言われているが。正

直、宮本はそんな事はどうでも良いと思っている。
何故なら、アカマンボウにしろ、本物のマグロにしろ、美味しいのには変わりないのだから。
他の食べ物でもそうだ。まずい物はどんなに高級でもまずく、美味い物はどんなに安くても美味いのだから。そこに『濃厚な～』や『クリーミーな～』という言葉を付ける必要は無い。ただ『美味い！』だけで良い、と彼は本気で考えている。
そんな壊れた信号機のような判断しかできない男に食レポを頼んで、期待通りの回答が返ってくるのだろうか――――という話だが、返ってくる訳が無い。
（それに……野菜、苦手なんだよな）
――――更に言えば、彼は若干偏食気味である。
別に食べられない訳ではない。食べられない訳ではないが、どちらかと言えば野菜が苦手だという話であって。
ただ、その〝どちらかと言えば苦手〟レベルのものであっても、このお願いに関しては致命傷になる。
その二つを自分でも強く理解していたからこそ、答えられるお願い事であろうにも関わらず、宮本はどうするべきか悩んでいた。悩んでいた、が。
「……分かりました。協力します」
しぶしぶ、と言うよりかは『どうにかしよう』という自身への課題の面の方が強かったが。宮本は、彼女のお願いを受けることを選択した。
受けない方が彼女の為になるんじゃないか。そう考えるも、貴方じゃなきゃダメだと言われ、断るのも……と感じ、ぽっきりと折れてしまった。
「ありがとう！　私は『奥村　春』。放課後は屋上にいるから、用があったらいつでも声をかけてね」
「よろしくお願いします、奥村先輩。自分は『宮本　伯』って言います」
「とびっきりおいしい野菜を持ってくるから、楽しみにしててね？　宮本くん」

「……はい！」
奥村が屋上から去り、それと同時に坂本と雨宮が屋上に訪れる。
「いっちばんのり……って、もう来てたのか」
「呼び出した奴が一番最後ってのも締まらないだろ？　俺はそこそこ優等生だからな」
先に屋上に来いた宮本が、座りなという意を込めて、廃棄された数個の机と椅子を手で軽く叩く。
会話を盗み聞きされる心配がなく、かつ不良三人が集まっても違和感がない場所。屋上は、それらの全てを満たしてる最高の場所だと言えるだろう。
「結局よ、あの世界って何だったんだろうな。鴨志田が王様とか、妙にリアルで気持ちわりいっつーか……」
「流石に夢じゃないだろうな。力を覚醒した感覚は俺の中に残ってるし……雨宮も残ってるだろ？」
「あぁ、俺もその感覚は残ってるが……あの世界が夢じゃなかったとしたら？」
「……結局そこなんだよな。夢じゃなかったら、じゃあ一体何なんだよって話だ」
どの方向からあの世界を探ろうにも。結局、夢じゃなければ何なんだって話に落ちてしまう。
邪悪な王が支配する力に迷い込み、窮地に陥り、謎の力に覚醒する。そんなＲＰＧのような世界をリアルで体験したと伝えれば、１００人中１００人が嘘だと一蹴するだろう。
ただ、あの世界は紛れもない真実だと。
夢じゃなければ何だと言いつつも、もう一人の自分の問いかけに答えた二人は、そう確信しているのだ。
集まったは良いものの、やはり情報が足らなさすぎる。
故に、三人を包むのは沈黙。その沈黙の空気は数分離れることはなく、痺れを切らした坂本によって解放されることとなった。
「なぁ……一旦、考えんのやめねーか？」
「数日、数週間経って何も起きなければ綺麗サッパリ忘れる。それが

正解なのかもな」
「モルガナが俺たちを利用するつもりなら、向こうから接触しに来るだろう。またあの世界に行くかもしれないし、覚悟はしとくべきかもな」
「ま、明日から仲良くしようぜ。一回死ぬ思いしたからかもしんねーけど、なんかお前らとの間に絆ができた気がすんだ」
「二人がいなければ、前歴持ちの俺はずっと一人だっただろうからな。助かってる」
「なら、あそこから生き延びた記念に飯でも食って帰るか、安い牛丼屋でも良ければだけどさ。これからよろしくな、蓮、竜司」
なら、早速行こうとなり。立ち上がり、屋上から去ろうとするが。
「……あ、そうだ」
――――大事な事を聞き忘れてた。そう思い出し、ドアノブを握りながら、宮本は振り向いて尋ねる。
「どうかしたか？」
「牛丼屋で食レポしてみてくれないか？」
「何言ってんだ？」

―４／１２　放課後―校門前―

あの不思議な体験から一日が経過したが、やはり目立って変わったことは何も無かった。
朝から三人で集まり、昨日と同じルートで、同じ時間に歩いてみたはいいが。何度通っても現れるのは何の変哲もない学校だった。二足歩行で人語を喋るネコが急に話しかけてくるなんて事もなく、全てが異常なく進んでいる。
……ただ、竜司を除いた二人のスマホに、謎のアプリがインストールされているという異常事態は起きているが。
ウイルスか、はたまた本体のアップデートで追加されたアプリか。開けばアプリの正体が確認できるとは分かっているが、ウイルスを開

いた場合のリスクが大きすぎる。
特にアプリの見た目が不気味であり、自己主張の激しい赤い瞳がこちらを見つめているのだ。
ただ、蓮にも確認を取ってみれば、そうやらそのアプリは検索エンジンのような類のアプリらしく、ウイルスではない――――というのが、ここに至るまでの話である。
「赤い目のアプリ？」
「俺と伯のスマホに勝手に入っていたんだ。竜司のとこにも入ってないか？」
「いや……俺のとこには別に入ってねーけどよ、開いてみたりはしたのか？」
「音声認識のアプリだってのは蓮のスマホで確認済み。それ以外は進展なしってとこだな」
検索エンジンのようなアプリと称したが、そのアプリを一言で表すのなら〝異質〟だった。
キーワードを打ち込む部分はあるが、肝心の検索ボタンはどこにもない。検索エンジンのような機能を持っているというのに、調べたい物は調べられず、文字を打ち込むだけ打ち込んで終わりという謎の仕組みである。
「ちょっと見せてくれよ、その赤い目ん玉のアプリ」
「はいよ」
伯はアプリをタップし、スマホを竜司に見せる。
アプリにあるのは『キーワード入力』と『履歴』のみ。履歴を一応確認してみたはいいが、検索ボタンがないのに履歴が残ってる訳がないだろう。何故あるのかがわからず、やはり謎のままだった。
「よくわかんねぇアプリだな」
「一応色々試してみたが、検索ボタンが無いから履歴に残る訳でもないんだよな」
「履歴な……蓮のには残ってねぇのか？」
「使った記憶はないが……一応確認してみるか」
蓮がアプリをタップし、右上にある履歴のボタンを押す。

――――誰しもが、『ないだろう』と思っていたその瞬間。蓮の表情が一転し、驚きの声を上げる。
「なっ!?」
「どうした？」
「……ある」
「あん？」
「使った形跡がある……一件だけだが」
「嘘だろ!?」
三人で蓮のスマホを覗き込み、一件のみの履歴を確認する。
『カモシダ』『シュウジンガクエン』『ヘンタイ』『シロ』。履歴に残っていたのは四個のキーワードだけだが、全てのキーワードに共通しているのは、昨日起こった奇妙な出来事。
「鴨志田に城、秀尽学園……どのキーワードからも昨日の出来事が想像できるな」
「ヘンタイは……まぁ、あの鴨志田の姿指してるんだったらわからなくもねぇな」
「まさか……このアプリがあの世界に行く鍵の役割を担ってんのか？」
伯と蓮のスマホにしかインストールされておらず、履歴に残っているのは昨日の出来事と関連深いキーワード。
使用回数はその一回だけ、使用日時は４月１１日のＡＭ８：１９――――奇しくも、彼らが頭痛に襲われた時間とほぼ一致している。
「そういや、こっちに帰って来たときに、スマホからそれっぽい声出てたような気がすんだよな……」
「特定のキーワードを入力する事で、異世界に飛ぶことが出来るアプリ……か」
「それじゃ、これをタップすればあの世界に行けるって事なのか……？」
無意識の内に発していたキーワードをこのアプリが認識し、偶然の内に異世界に迷い込んだ。
結局全部夢でした、というオチの話と比べれば信憑性は何倍もある

だろう。何より、あの世界が夢ではなかったという話にも繋がるのだから。
　どっちにしろ夢のような話であるのなら、現実の方を選ぶ。ただそれだけだ。
「……もし、俺たちの仮説が全部合ってたとしてだ。蓮のスマホの履歴を読み込めばもう一回あの世界に行けるとして、だ」
「行く覚悟はあるか、って話か？」
「そういう事だ。無意味な世界じゃないとは思ってるし、確実に生きて帰って来れるのなら行く価値はあると思ってる」
　ペルソナの力も万能ではない。
　多数に囲まれるリスクはゼロでは無いし、その延長線上に死があるというのは昨日の出来事で充分承知している。
　――――それでも、あの世界に行かなくちゃならない。声は届いてこそいないが、心の中にいるもう一人の自分がそう言っている気がしたのだ。
　ぐっと右手で握り拳を作り、止まない鴨志田に対する怒りを目に宿し、伯は言う。
「死ぬ危険性があっても俺はあの世界に行く。一度決めたのを変えるってのは性に合わなくてな」
「俺も、覚悟ならとっくに決めてるぜ。鴨志田と関係があるかもってなら放っておいちゃならねぇだろ」
「俺も行こう。謎が謎のままなのは気持ちが悪いからな。戦力は多い方がいいだろ？」
「心強くて助かるぜ、二人とも」
　蓮のスマホでアプリを開き、再度履歴を確認する。
『カモシダ』『シュウジンガクエン』『ヘンタイ』『シロ』。ヘンタイは必要かどうか分からないが、それ以外の三つは昨日のあの事件と関わりが深いキーワードだ。
　恐る恐る履歴の一番上に表示されたページをタップすると、スマホから無機質な機械音声が流れ始めた。
『カモシダ……シュウジンガクエン……ヘンタイ……シロ……』

「来た……！」
『ナビゲーションを開始します』
ぐにゃり、と視界が歪む感覚。
昨日も覚えた感覚だ。三人共同じ事を脳裏に浮かべ、一瞬の気持ち悪さから解放されて目を開いてみれば――――
「本当に来れちまったな……」
「服も昨日と同じだ。短剣も腰のホルダーに刺さってるし、やっぱり夢じゃなかったんだな」
紫色の雲に覆われた禍々しい空、ピンク色にライトアップされた巨大な城、心に宿る叛逆の魂。
たった一つの学校だけが大きく変貌しており、それが異世界に来たことと、アプリの使用用途をハッキリとさせる。
――――間違いない、昨日と同じ景色だ。そう確信し、ふらふらと歩き回り、きょろきょろと周囲を見渡していれば。
「シャドウが急にザワつき出して、もしかしてと思って来てみれば……せっかく逃げ延びたのに、また正面から来たのか」
彼らが異世界に入ると同時に、丁度良いタイミングでモルガナが彼らの所へと歩いてきた。
「何しに来たかは想像できるぜ。それならワガハイについてこい。教えられる限りの事は教えてやる」
「どうすんだ？　ついてくのか？」
「……まぁ、ついてしかないだろうな」
「判断が早くて助かるぜ、蓮」
「気を付けろよ。昨日のでシャドウの警戒が高まってるからな」

＊＊＊

「わかったか？」
「わからねーよ」
「理解しようとはしたがな……」
「嘘だとは思ってないけど、流石にな」

彼らがモルガナから教わった事を大まかに表すのならば、こういう事である。

・正真正銘、ここは秀尽学園である。

・この世界は鴨志田の歪んだ心が作り出した、『パレス』と呼ばれるもう一つの現実。

・パレスでは何でも主の認知存在の思い通りに行く。

・この世界の敵は『シャドウ』と呼ばれている。

・彼らが持つペルソナもシャドウではあるが、契約を結んだシャドウは力を貸してくれる。

ペルソナは力を貸してくれる味方、シャドウは敵。それは今までのこの世界の様子から直感的にわかったものの、根本的な――――パレスについては、仕組みから何まで何もわからなかった。

パレスが作られた理由は？　この世界の構造は？　鴨志田だけが作れる世界なのか？　あのアプリの創造主は？　――――と、謎を言い出せばキリが無い。

「もう一回言っとくけど、オマエらはワガハイの計画の中に組み込まれてるんだからな。理解して貰わなきゃ困るぜ」

「拒否権は？」

「無いぜ。つっても、オマエらにとってもメリットがあるから断らないと思ってるけどな」

「嘘ついてねぇだろうな？」

「嘘ついてねぇよ！」

――――と、モルガナは一切〝計画〟の内容を話してくれないのだが。モルガナがいなければ何も理解できなかったのもあり、彼らはそこそこ感謝している。そこそこではあるが。

「それより、ペルソナが使えるオマエらに良い事教えてやる」

「良い事？」

「ペルソナを出すのは〝心〟だが、ペルソナを理解するのは〝頭〟だ。頭で意識すれば、ペルソナの情報もデータみたいに掴めるぜ」

「頭……向かい合え、って話か」

目を閉じ、ペルソナを頭で理解してみようとしてみれば。

アレキサンダー
アルカナ『調整』
習得スキル
・ガル
・大切断
・レイズスラッシュ
・物理ブースタ
弱点：念動　火炎
耐性：物理　疾風
無効：無
反射：無
吸収：無
特性：神速

――――成程、モルガナの言う通り、これなら確かにわかりやすい。何も知らずに戦っていた今までとは違って、この攻撃を喰らったら危険、この敵には強く出れる、そういう情報のが一目でわかるのは良い。アルカナや特性など、わからない事もあるのだが。
ただ、伯の思考はもっと他の部分に向けられていた。
（……物理ブースタって何だ？）
こんなスキル、あったのか？　と。伯は心の目を細くし、過去の体験を思い浮かべる。
風属性の”ガル”や物理技の”大切断”、”レイズスラッシュ”は、無意識の内に使っていたからかなんとなくわかる。
だが、”物理ブースタ”だけはイマイチピンと来ない。常時発動で、物理技の火力を高めるスキルみたいなものだろうかという想像はできるが、名前だけではどれ程火力を上げるのかがわからない。
頭の中で物理ブースタに焦点を合わせ、どのような効果なのかを把握する。
・物理ブースタ：物理攻撃威力２５％増、体力消費微増

（……いるか？　これ。燃費が悪くなるだけだろ）
本来設定された限界を超えた分、体にも負担が回って来るという事だろうか。
なら覚えなくても良かったと言いたくなるが、こればかりは仕方ない。体力管理さえしっかりすれば上手く運用できるだろうし、何より他と比べて一撃が大きくなるのは大きい。そう思い、伯はペルソナと向き合うのをやめ、目の前に広がる惨状を目に焼き付けた。
彼らが訪れたのは、昨日収容された地下牢獄――――ではなく、その近くにあった体育館がぼんやりと見える場所。
何人か見慣れた生徒が拷問器具にかけられ、酷い仕打ちを受けているのだが。無論、ここは現実世界でないし、これも鴨志田と同じ認知存在なのだろうと全員が理解していた。
「しっかし、胸糞悪いぜ……鴨志田のヤロウ、現実でも部員にあんなことしてるってことだよな」
「ここが鴨志田の心の世界なら、奴には部員がああ見えてるってことだ。間違いないだろうな」
「……まぁ、誇張はされてるけど、野球部のときと同じだな。拷問だと揶揄されるのならあながち間違いではない」
モルガナが言うには、拷問まがいの体罰を受けているバレー部部員は『認知の存在』であるらしく。鴨志田の中に強く存在すればするほどその姿が鮮明に現れ、それらをどのように見ているかがわかるらしい。
言うなれば、現実世界の鴨志田の表面上には映らない、隠された真実がこの城に映されるという事だ。
認知存在のバレー部部員は拷問まがいの体罰を受けているという事は、案の定、現実の鴨志田も体罰を行っているという事になる。
鴨志田がそんな奴だとはわかりきっていた事だが、やはり〝確証〟が得られたのは大きい。後は現実世界に戻り、バレー部部員に聞き込みをして体罰のウラを取る。それさえできれば、あの鴨志田だって黙ってはられないはずだ。
「とりあえず、ここを出て一旦城の外に出よう。欲しい情報は得られ

たしな」
「長居も厳禁だしな。カモシダにバレちまう前にとっとと行こうぜ」
部屋から出て、地上に続く階段を駆け上がりメインホールへと向かう。
ここを抜ければ現実世界だ。その境目でもあるメインホールを素早く駆け抜けようとした瞬間、前方に大きな人影が複数見える。
「……また貴様らとはな。過ちを二度繰り返すとは、救いがたいな」
「そう上手くは行かせないってか……！」
鴨志田の横には他と比べて巨大な甲冑が一体、それを取り囲むように甲冑が二体。普通の甲冑相手なら、初心者の蓮や伯でもサシで倒せるかもしれないが。
問題はあのでかい甲冑。鴨志田の戦闘能力は無に等しいし、奴を倒せれば脱出できるだろう。そう思うが、その隣にいる巨大な甲冑の身は、実力がかけ離れていると肌で感じていた
竜司を守ることが必須だが、竜司を守りながら戦って勝てる相手とも思えない。速攻で普通の甲冑を倒し、その後に三対一で戦っても勝てるかどうか危うい相手だろう。
「部員の顔は全部覚えた！　観念すんだな！」
「だからどうした……まぁいい。どうせここで死ぬのだから無駄に足掻いておけ。構わん、まとめて殺せ」
鴨志田の横にいた巨大な甲冑が、一際強そうなシャドウへと変貌する。
――――始まる。そう理解した伯が、力を持たない竜司を後ろに逃げるよう促し、突撃してきたシャドウの攻撃を受け止める。
「ぐっ……！」
「伯！」
一撃一撃が重い。それなのに、動きは素早くてガードも硬い。
負けじとペルソナを出して反撃をするが、どれも有効打にはならない。
「クソっ！」
ガン、と背中に痛みが走った。

――――昨日のように、盾で押さえつけられたと理解したときには既に遅い。
（二対三じゃ不味い……早く抜け出さねぇと！）
熟練者のモルガナがいるとはいえ、数で囲まれればこっちが不利なのには変わりない。
多少のダメージは受けるかもしれないが、無理矢理上を向いてガルをぶっ放せばここから抜け出せる。そう考えて体の向きを変えようとするも、押さえつけが強すぎて抜け出せない。
それができないのなら、力比べに勝って強引に押し返すまでだ。そう考えを変えて抜け出そうとすれば、抜け出させまいと力が増して、背中に走る痛みは更に強くなる。
（どうにかしねぇと……！）
――――そう思えども、もう遅い。
蓮も、伯も、モルガナも。ペルソナを使える三人が捉えられ、残るは力を持たない竜司だけとなった。

＊＊＊

「やめろ……」
あっけなく、という言葉が一番似合う。
彼の掌の内にはない、ペルソナの力を持った三人が手も足も出ずにやられてしまったのだから。
唯一動ける彼はただ茫然としているだけで、歯向かおうにも瞬殺されるのが目に見えていて動くことすらできない。その悔しさをぶつけようにも、ぶつけ場所がどこにもない。
唯一手の空いている鴨志田が、何もできない無力な彼へと歩み寄って、嘲笑うかのような表情を浮かべて口を開く。
「すぐ感情的になるクズさ加減は変わらないな。少しの間、練習を見てやった恩を忘れたか？」
「あんなもん練習でもなんでもねえ！　体罰だ！」
「クビになったあの監督も救えないバカだ。正論言って俺様に楯つか

なければ、エースの脚を潰すだけにしてやったものを……今のお前は役立たず、お友達の危機も救えない存在意義のないクズだ。似合ってるぜ？　『裏切りのエース』君」
「クソッ……クソがっ……！」
力を持たぬ彼は膝を地面につき、何もできない怒りをぶつける為に床をどんどんと叩く。
――俺に『力』があれば。
――アイツらみたいに『ペルソナ』さえあれば。
それさえあれば、助けられる。昨日蓮に助けてもらったように、俺だって――そう思えども、彼に力が降ることはない。
才能の差か、それとも『自分はこの程度の小さな人間』だと知らしめるための神のイタズラか。
夢を粉々にされ、大切な友人が殺されようとして。そんな状況に陥ろうが力を得られない自分に怒りと嫌気が差す。
――あぁ、俺は。そう思い、怒りと共に〝絶望〟を覚えた瞬間。
――力が欲しいなら立て！　立ち上がれ！
ホール一帯に、一人の声が響き渡る。
「……伯」
「お前の苦しみを一番理解できるのは俺だ！　お前は誰よりも強い！　誰もができなかった〝反抗〟ができた唯一の人間だ！」
――お前の『叛逆の意思』で呼び覚ませよ！　ペルソナを！
強い押さえつけがあるにも関わらず、伯は叫ぶ。
お前ならやれる。お前は悪くない。悪いのは他でもない鴨志田だ。怒りをぶつけろ。目を覚ませ。眠る力を呼び覚ませ。
――その〝叛逆の意思〟で、未来を。
誰も発していない、その言葉が彼の脳内に流れ込んできた瞬間。
「……あぁ、そうだな。伯の言う通りだ。」
彼は、悪人のような笑みを浮かべながらゆっくりと立ち上がる。
絶望なんて、覚えるだけ無駄だ。
鴨志田に対する感情なんて、これまでもこれからも、たった1つだけで良い。

たった一つの、怒りだけで。
そう理解した彼は、悪人のような笑みを止め――――鴨志田も驚愕するような憎悪の目を向け、ビッと指を差す。
「あ？」
「ニヤけたツラで、こっち見てんじゃねえよ！」
――――叛逆の雷が、心に落ちる。

随分と待たせたものよ。
力がいるんだろう？　ならば契約だ。
どうせ消しえぬ汚名なら、旗に掲げてひと暴れ。
お前の中のもう一人のお前が、そう望んでいる。
我は汝、汝は我
覚悟して背負え！
これよりは、反逆のドクロが貴様の証だ！

――――あぁ、お前と共にぶっ飛ばしてやる。
ＦＲＥＡＫＩＮ（クソっま）、ＢＯＲＩＮＧ（ねぇ！）
ぶっ放せよ、キャプテン・キッド！

「……やるじゃねぇか、竜司」
唯一の理解者が、同じ力に覚醒した喜びを噛みしめながら。にやり、と窮地に追い込まれていた伯が、笑みを浮かべる
肩を気持ちよく回し、豪快で、尚且つ振り切った笑顔を浮かべる『坂本　竜司』を見ながら。
「これが、俺のペルソナ……こりゃあいい！　これさえありゃ、鴨志田

に一矢報える……！」
「ぶっ放せよ、キャプテン・キッド！　」
竜司がそう叫ぶと、彼らをを押さえ込んでいるシャドウに雷が降り注いだ。
バチン！　と勢いの良い雷の音が押さえつけられながらも彼らの体に伝わる。それと同時に起こったのは、自然と体が軽くなる感覚を覚えたこと。
脳が、打開のチャンスが訪れた事を彼らに知らせる。
――――逃すか。一瞬の判断ミスが命取りになる空間で、研ぎ澄まされた彼らの脳は正常な判断を下した。
「アレキサンダー！」
「アルセーヌ！」
「ゾロ！」
三者がそれぞれのペルソナを背後に出し、あっという間に雑魚シャドウを片付ける。
「このまま押し切るぞ！」
荒れ狂う怒りが、シャドウを襲う。
ただのシャドウなど格下に過ぎず、実力差があったシャドウも竜司の加わりで手数が増え、余裕で倒すことができ。
遂に、鴨志田を取り巻くシャドウはいなくなった。
「はぁ……はぁ……どうだ！」
「こいつは驚いたぜ……リュージにも素養があったとはな」
「雑魚が一人力を得たところで……言っただろう？　ここは俺様の城だと。まだわからんようだな」
――――まさか、また援軍か。
シャドウも全員倒れ、ホールにいるのは無防備な鴨志田ただ一人。四人のペルソナ使いを圧倒できる程の力を持っているのかもしれないが、そうには見えない。
まだ余裕はある。シャドウが来るなら薙ぎ倒すまでだ。四人全員がその思考でいると、昨日と同じ箇所の扉がまた開き、足音が一つだけ聞こえてきた。

援軍か。そう思い、目を配らせれば――――そこにいたのは、モルガナ以外の全員が知る人物だった。
「なっ……高巻!?」
「おおっ！　なんて……にゃんて綺麗な女の子だニャ！」
「見損なったぞ、モルガナ」
「あれが……鴨志田から見た高巻ってことだよな」
――――際どい水着を着た、絶世(高巻)の美女(杏)。
それが、鴨志田から見た高巻の姿であり、つまり現実世界での扱いが――――と、その酷さが嫌でも想像できる。
とはいえ、来たのが援軍ではないのは幸いと言えるだろう。この世界を理解していればであるのだが。
（……鴨志田を倒したら、この世界はどうなるんだ？）
欲望の世界の主を倒したらどうなるのか。この世界の仕組みが解明されていない以上、今そのチャンスが訪れていたとしても、それはしない方が良いだろう。
この世界に取り残されるか、崩壊するか。はたまた、心の世界を壊せば現実の鴨志田に影響を与えるんじゃないのか。猪突猛進な竜司はともかく、残りの二人はその可能性を危険視していた。
「オマエら、ここは一旦引くぞ！」
「倒さねぇのか!?　敵がいない今がチャンスだろ!?」
「悪いが俺も賛成だ。まずはここから逃げ出して立て直そう」
「冷静で助かるぜ！」
素早い動きで援軍が来る前に去り、モルガナを除いた彼らは現実世界へ帰還する。
――――オマエら、ワガハイを無視するとかマジねぇから！　というモルガナの悲痛な叫びを背に受けながら。

―４／１２　放課後―校門前―

色々命の危険はあったが。体罰の裏は取れ、後は聞き込みを行うだ

け。
　着々と鴨志田を追い詰める手段は整い、このまま行けば奴の悪事が明らかになる――――そう考えてはいたが、蓮を除いた二人はとある問題に衝突していた。
「……いや、バレー部のヤツらは吐かないかもしれないな」
「どうしてだ？」
「俺たちが経験してるからだな。鴨志田の奴、自分の悪評が漏れそうになったら部員を黙らせるんだ」
「つっても、俺たちは鴨志田と対抗してて浮いてたから別に何もされなかったけどな。言った所で不良が文句垂れてるって程度にしか扱われねぇし」
「そうか……」
「でも、一人でもボロ出しゃこっちの勝ちなんだ。脅すなりなんなりして吐かせようぜ」
「あんまり手荒な手は使うなよ、目付けられてる蓮がいるんだから。とはいえ、やっぱり聞き出せなかった時の保険が欲しいな」
　バレー部部員からの聞き出しに失敗しても良いように、別の手を考えておいた方が良さげではある。
（野球部、陸上部の生徒から体罰の事を聞き出すのは得策じゃないか。廃部の原因は俺と竜司って事で通ってるし……何より、今更何をと言われるだろうし）
　現在進行形で鴨志田から嫌がらせを受けてて、かつ鴨志田と関わりが深い人物。
　そんなピンポイントに当てはまる人物がいればな、と。最後の〝な〟を心の中で発そうとした瞬間に、伯の脳内に電流が走った。
「……あ」
「どうした？」
　――――いる、いるじゃないか。
　鴨志田の城に出現する程歪んだ認識を受け、かつその関係が周囲に理解されている人物が。
　聞き出すのが難しいかもしれないが、あくまでサブプランとして扱

うとするなら問題はない。本命はバレー部部員として、そっちで完成させてしまえば良い。

「……高巻から聞き出せばいいじゃないか」

プランＢの形成を確信した伯が、そう呟いた。

1―4【Phantom Thief】

―4／13　放課後―体育館―

『俺はダメだった、そっちは？』
『まだ終わってないけど、今のところ全滅』
『同じく』
（……まぁ、これはダメそうだな。予想していたとはいえ）
やむなし。そう思い、ため息をついて伯はスマホをポケットに仕舞う。
――無理なモンは無理だ。逆らうだけ無駄なんだよ。
――お前らが嗅ぎ回れば、その苛立ちの矛先が自分たちに向きかねない。
（『良い迷惑だからやめろ』か……）
模索をした際に言われた、何気ない一言。
それが伯の頭の中をリフレインして、どうしたものかと思わせる。
まぁ、彼らの気持ちもわからないわけではない。
鴨志田の支配からの突破口を見つけた蓮や竜司、伯と違って、他大多数の被害者にはどうしようもできない悪として認識されている。
鴨志田の悪事が都合良く漏れて、なんてのはまずあり得ない。
あり得ないんだから、歯向かうだけ無駄。
ならば現状に甘んじ、これ以上被害が増えないようにする。
真っ当かどうかは別として、彼らの言い分もそれなりに理解はできるのかもしれない。三人でなければ。
並々ならぬ憎悪を向けた二人に、それに協力する転校生。元々の彼らの気性の問題もあるが、何より『やられたまま』では嫌だ。刺し違えてでも悪事を世に晒してやる。そういった面がかなり強く出ているからか、一切の理解を示すことはしなかった。
「仕方ない……ならプランBだ、まだ鴨志田関連の事を聞き出す手は残ってる」
グループチャットに『仕掛けてくる』と送り、保険がいるであろう

場所へと伯は走り出した。

―４／１２　放課後―校門前―

「……高巻から聞き出せば良いんじゃないか？」
「いや、そりゃ高巻と鴨志田の関係はズブズブかもしんねーけどよ、鴨志田の体罰については聞き出せねぇだろ」
「あくまでサブプランだな。聞き出せるなら、部員から体罰の事を聞き出すのが一番良い」
　彼女の性格をある程度知っていれば、鴨志田に対して従順であるなんて想像はまずできないはずなのである。
　現に、それなりに交流のあった伯と竜司は違和感を覚えていた。
　気の強い性格をした高巻が現実世界であのような扱いをされ、不満や文句が出てこないのか。
　あれだけ鴨志田に溺愛されているのなら、不快感を覚えているはずなのにその傾向が見られないでないか。
　現実世界で見る分には違和感も無かったが、認知世界のフィルターをかければかなりの違和感があるように見られる。
　隠されていたのは抑圧された不満か、それとも言い出せない恐怖か。どちらにせよ、高巻の証言を鴨志田にとって不利に働くことは間違いないだろう。
　つまり、何か裏があってもおかしくない。もしかすれば、それが打倒鴨志田の切っ掛けになる一打になりえるかもしれない。
「……確かに、高巻から話を聞くのは構わないが。誰が聞きに行くんだ？」
「ま、そこは比較的生徒ウケがいい俺が行くべき……だな。蓮も竜司も腫れ物扱いだろうし」
「大丈夫なのか？」
「失敗しないようにはするさ。使わないのが一番なんだろうけどさ」

＊＊＊

そのようなやり取りがあって、今に至るのだが。

当社比とはいえ比較的生徒受けが良かった自分も失敗したものの、まだ望みはある。そう思っていたのもあって、プランBを選択せざるをえなかった伯には、案外余裕があった。

「いたいた……けど、取り込み中か」

中庭に、お目当ての人物（高巻杏）がいたのはいいものの。

どうやら、見る限りでは誰かと話をしているようで。パレスで習得したスキルで物陰に隠れて伺い、話し相手を確認してみれば。それなりに離れているというのに、遠くから見てもわかる程に痣を作った女生徒が相手であることが目視できた。

だが――――あれだけの痣があれば、やはり疑問に残る。

（……普通、あんなになるか？　流石にならないよな？）

顔に1つや2つの痣ができている程度なら、練習で作ってしまったという可能性もある。それなら、問題になる可能性もあるだろうが、さほど問題は無い。

ただ、”これ”は違う。

物陰に隠れ、遠くから見ても認識できる程の痣の量。怪我で作ったのかもしれないが、あれでは怪我と押し通しても疑われそうな上、親や教師から体罰を受けているんじゃないか。そう誤解されかねない可能性も――――

「……あ」

ある、と心の中で呟こうとしたことで。

伯の中で、一つの仮説が浮かんだ。

（ちょっと待てよ……？）

――――もしかして、あの女生徒も部員の1人か？

そう予測した伯は顎に手を当て、大まかにシナリオを考え始めた。

（あの痣の量……仮にあれが鴨志田の体罰だとするのなら、辻褄が合うかもしれない）

友人を守るために、鴨志田の前で『良い子の高巻杏』を演じている

のだとしたら。
友人を上手く立ち回らせるために、鴨志田の前で『都合の良い高巻杏』を演じているのだとしたら。
ありえない話ではない。断定こそできないが、少なくとも信用に足る仮説ではある。
……問題は、それを引き合いに出して地雷を踏むか踏まないか、だが。そう考えていると、彼のポケットにあるスマホが通知音を鳴らした。
開いて差出人を確認してみれば、竜司からのＬＩＮＥであることが確認できた。何か情報でも掴めたのか。そう思いながら、伯は内容を見る。
《ｌｅｆｔ》『そういや、言い忘れてたんだけどさ』《／ｌｅｆｔ》
『どうした？』
《ｌｅｆｔ》『高巻はさ、バレー部の鈴井と親友なんだ』《／ｌｅｆｔ》
『鈴井？』
《ｌｅｆｔ》『だから高巻から鈴井繋がりで体罰の事を聞き出せるかもしれないし、高巻に頼んで鈴井に話を聞いてもらうってのもできるかもしれねぇ』《／ｌｅｆｔ》
『ポニーテールの子か？』
《ｌｅｆｔ》『そう！それだ！』《／ｌｅｆｔ》
《ｌｅｆｔ》『そこら辺は伯の腕前にかかってる、任せたぜ』《／ｌｅｆｔ》
元あった場所にスマホを戻し、心の中で竜司に感謝しつつ、再度二人の様子を眺める。
（ナイスアシストだ竜司、その鈴井が高巻とセットで目の前にいる）
少し不安定な仮説だったが、竜司から得た情報でバレー部部員だと確定した。
もはや、伯の仮説は”こうかもしれない”ではなく、”こうだ”と断定できるレベルまで来ているだろう。
ならば、話し終えて去る前に聞くのがチャンス。そう判断をして、物陰に隠れていた伯は立ち上がり、二人の元へと歩み始めた。

「すまん、高巻。聞きたいことがある」
「……何？今忙しいんだけど」
「ほんの少しでいい。1分だ。1分でいいから話を聞きたい」
「要件は？」
「鴨志田についてだ。知っている事があれば話をして欲しい」
『鴨志田』という言葉が伯の口から発せられた瞬間、高巻は再び怪訝そうな顔をした。
とはいえ。鈴井と二人きりかつ誰もいない中庭で話していたとなれば、近からず遠からず、その話の内容には”体罰”が関わっているだろう。
そう考えれば、高巻の反応は至って自然だとも言える。話していた事が体罰の内容であれば、それは地雷になりかねないワードなのだから。
「……鴨志田先生に、何するつもり？」
「別に何もしないさ……個人的に嫌いだから噂を集めてるってだけだ。あいつの裏を知ればそうしたくもなる」
「裏……？　てか、誤魔化しても無駄。あんたらもう噂になってるから、なにしようとしたってみんな協力してくれないし」
――――成程、部員が話さなかった理由はそれもか、と。妙に納得をして、小さく溜息をついた。
（蓮や竜司が浮いていたとしても、俺になら話くらいは聞いてくれると思ったけど。話すら聞かなかったのはそういう事だったか）
大方『問題児には話すな』とでも、裏で手引きされているのだろう。
あの世界が鴨志田の心の世界であれば、変に暴れたせいで”何か”を感じ取らせたのかもしれない。
「一応、忠告……それだけ」
「……そっか、時間奪って悪かったな」
これ以上粘ったとしても、不当に時間を奪うだけになるだろう。
高巻の言ってる事が本当であれば、どれだけ粘ろうが鴨志田の事を話すとは思えない。そう判断して、伯は帰ることを決断してスマホを開いた。

『すまん。何も聞けずに終わってしまった』
『仕方ねぇよ、とりあえず屋上に来てくれ』
『思わぬところから情報を手に入れられそうだからな』
思わぬ所から、という言葉が引っかかるが。
鴨志田関連で何か掴めたのなら、それに縋るだけだ。藁にも縋る思いで、彼は屋上へと向かった。

―４／１３　放課後―屋上―

「……は？」
「まぁ、そう言いたくなるのはわかるけどよ……」
「こないだは勝手に帰りやがって！　あと猫じゃねーよ！」
――そこには、ネコの姿をしたモルガナがいた。
いや、そもそもモルガナはネコに近かっただろう、とか。
いや、ネコの姿をしたネコはネコだろう、とか。
このままだとネコという言葉でゲシュタルト崩壊を起こしてしまいそうだから、手短に何があったかを説明すると。
城の中で出会ったモルガナは、どうやらこちらの世界にも干渉できるようで。干渉してこちらの世界に来れば、姿が変わって黒猫の姿になる……らしい。
らしい、というのは。現状彼が話を聞いただけで、どういう原理かまでは見ていないからなのだが。
それでも、蓮や竜司によれば『使える情報を持っている』らしいのだ。二足歩行から四足歩行へ退化したモルガナを頼るしかないだろう。そう思い、伯が屈んでモルガナを頭の上に乗せると、モルガナは話を始めた。
「さっき、そいつが言ってた事だけどよ。城の方から攻めるんだ」
「どういう事だ？」
「あの城は、カモシダが見てるこの学校だ。城の出来事に本人は気づいてないが、心の奥では繋がってるのさ。だから、もしも城が消えち

まえば本人にも影響が出る」
「……まぁ、つまりは。学校と城はリンクしていて、何か出来事があれば相互的に干渉し合う、って話か？」
「そうだな」
いくら鴨志田がどうしようもないクズだとはいえ、人間の心というのは、機微で些細な出来事でも反応する繊細な物だから。
その”心”に直接干渉したとなれば、どれだけ小さなきっかけであろうが、現実の鴨志田もあっという間に変わってしまうのかもしれない。
「で、あの城は鴨志田の歪んだ欲望そのものだ。そいつが消えるってことは……」
「鴨志田がまともになる、ってことだな？」
「その通り！」
欲望の城を消してしまえば、現実の鴨志田が持つ欲望まで消える。
欲望が消えれば、現実世界の鴨志田は善人になる。
理論としては納得が行くだろう。問題は、あちらの世界をどう壊せばいいか、だが。そこも、ペルソナ使いが四人もいれば問題なさそうにも思える。
「パレスを消す、ってのは欲望の世界を消すってことだ。歪んだ欲望が消えたら、消された本人はそれに耐えられなくなって罪を自白しちまう。しかもパレスが消えるって事は、ワガハイ達の足も消える！」
「そんなことできんのかよ！」
――ただ、まぁ。
何か引っかかるというよりか、純粋な質問として。静観をしていた伯が、口を開く。
「……上手すぎないか、と思うんだ。欲望って言ったって、別に持ってても悪い欲望だってあるんだろ？　上手く悪いのだけ切り取れるのか？」
「まぁ、オマエの言う通りだな。もし、歪んだ欲だけじゃなくて、正しい欲も消えちまったら。そりゃ廃人と同じだ、保護でも受けられなきゃ死んじまうだろう」

必要な事を満たしたい。そう思うから人間は活動する。欲があるから人間が動けてる、というモルガナの言葉のは間違いじゃない。
その活動する為の動力源を失ったら、どうなってしまうか。いくらあの世界に通じていないとはいえ、想像ができない訳ではない。
「死んじまうってことかよ!?」
「それはわからない。もしかしたら死んじまうかもってだけだ」
――”死”。
人間にとって最も危惧することと言うより。生物である以上、いつかは訪れる”死”。
それが、自分たちの手によって引き起こされるかもしれない。
「……なぁ、二人はどう思うよ?」
らしくない神妙な顔持ちをした竜司が、真っ先に二人に問う。
”死ぬかもしれない”。それはつまり、殺人に加担してしまう可能性もあるという事なのだから。
当然、はいやりますとは言えるわけがなかった。
「殺人はご免だな」
「同じくだな……何をしてもいいわけじゃない。何でもしていいってのは、鴨志田の野郎がやってることと同じだ」
鴨志田のした事は、誰にとっても当然許せない悪である。
だが、鴨志田の知らないところで好き勝手して結局廃人にして……なんてのも、到底許される行為ではない。
綺麗事のように聞こえるかもしれないが、同じ立場に上がりたくはない。伯の言葉からは、そういう意図が読み取れた。
「他にやれる方法はないと思うけどな、二日経ったらまたここに来る。それまでにやるかやらないか決めといてくれ」
そう言って、モルガナはするりと伯の頭の上から飛び降り、屋上から去っていった。
「ぬか喜びかよ、クソッ!」
「……万が一、だ。万が一、その方法しか無かったとしたら。その際は、また三人で集まって結論を出そう」
――どうすればいいんだ? 何が正解なんだ? もしかした

ら正解すらないのか？
モルガナの口から発せられた衝撃の事実に、彼らは動揺を隠せないでいた。

―４／１５　午前―教室―

《ｌｅｆｔ》『改心以外の案、思い浮かんだか？』《／ｌｅｆｔ》
『さっぱり、新しい接触は？』
《ｌｅｆｔ》『昨日、高巻と話した。しかも結構重要な事も聞き出せた』
《／ｌｅｆｔ》
どうやら、蓮が高巻との接触に成功したらしい。
そしてそのまま話を聞いてみたが。鈴井のレギュラーを約束する代わりに、鴨志田と関係を持っていた事。鴨志田と関係を持っている噂を気にしてた事や、その上鴨志田に肉体関係まで迫られていた事。
――良くもまぁ、そこまで行けるな、と。
はっきりと言ってしまえば、そのドス黒い感情は胸糞悪いという言葉にも収めることができない。
部員の虐待に加えてセクハラ未遂とまで来てる奴に、情状酌量の余地なんてあるのか。やはり改心という手を使うべきか。牛丸の授業に退屈を感じた伯が、そう考えていると。
「おい……あれ」
がたり、と。音を立てて、一番前の席の生徒が勢い良く立ち上がった。
その生徒が見ているのは、窓の外側――と言うよりかは、その先の先。目線がやや上を向いているのを考えると、屋上のようにも見えるが。
まさか、と思い伯も立ち上がる。蓮に視線を合わせ、アイコンタクトを取り。
「飛び降り……!?」
考えている限りでは最悪の言葉が生徒の口から飛び出たのを言葉

を皮切りに、彼ら以外の生徒も立ち上がって、教室の外へ出始めた。
嫌な予感がする。伯の頭の片隅に、信じたくない一つの可能性が浮かんだ。
――――鴨志田の支配下に置かれてる高巻が電話を断ったらどうなる？　誰がストレスのはけ口になる？
想像はしたくないが、答えは一つしかない。
「蓮！　竜司の制止を頼む！」
おそらく、この飛び降りと鴨志田が深く関わっていることに、竜司も薄々気づいているだろう。
となれば間違いなく鴨志田の所へ向かう、そこで感情に任せて殴りでもしたら全てがおしまいだ。
最終手段ではあるが、自分たちには『改心』がある。
鈴井に全てを話すことはできないが、説明して納得させればまだ間に合うかもしれない。
人が死のうとしている。ターゲットが死ぬかもしれない、と言って日和り、その手を使わないなんて言ってられない。
――――頼む、間に合ってくれ。
その思いを胸に、伯は屋上へとダッシュで向かった。

―４／１５　午前―屋上―

「鈴井！」
ガシャン、と大きな音を立てながら、伯はドアを開けて屋上へと突っ込んだ。
荒くなる息を整えながら、そこにいるはずの一人を探そうと、目を動かす、が。
「そんな……嘘だろ？」
そこにはもう、彼女の姿はなかった。
響くのは、少しばかり強い春の風と地面から聞こえる騒ぎ声のみ。
屋上には彼以外の一人もおらず、それが意味するのは――――言わな

くとも、わかるだろう。
ゆっくりと、彼は膝から崩れ堕ちる。
それと同時に彼を襲ったのは、人が救えなかった悲しみと、鴨志田に対する強い怒りの二つの感情だった。
「鴨志田の野郎……鴨志田……鴨志田ァ！」
――一体、どれだけの人を苦しめた？
――どれだけの人を自分の支配下に置いた？
他でもない自分が経験したからこそ、彼女の苦しみが強くわかる。辛かったんだろう、と察せられる。
「……上等だ、それならこっちも手を打ってやる」
絶望へと追いやられた、鈴井や竜司を救うために。
今も尚支配下に置かれている、バレー部部員を救うために。
それ以外にも大勢いるであろう、王の奴隷となった被害者を救うために。
――そして、他でもない自分自身を救うために。
彼は、鴨志田を『改心』させることを決意した。
『放課後になったら中庭に集合しよう。モルガナに伝えるぞ』
『覚悟はできた、って』
――やってやる、絶対に。
そう思い、彼はゆっくりと立ち上がって階段を降りる。
絶望と怒りに塗れた彼をつき動かしているのは、心の中にあるドス黒い衝動のみだった。

―４／１５　放課後　中庭―

「で、鴨志田の所に行った結果、俺たちと三島を含めた四人が退学処分か」
かたん、と。空き缶がゴミ箱に当たり、小気味良い音を立てて捨てられる。
蓮と竜司から話を聞く限りでは、どうやら鴨志田は本気でおかんむ

りだったらしく。四月終盤の理事会で吊るしあげてやる、と宣言したらしい。
「すまねぇ……お前まで巻き込んじまった」
「そんな気にすんなって。鴨志田の事だ、何かと理由を付けて俺を飛ばそうとするだろうし……それに、まだ間に合うだろ？」
殴りたくなる衝動を抑えた竜司も、それを止めた蓮も。
この二人がちゃんと動いていなければ、こうやって仕掛ける事すらできずに一発退学になっていた。そう考えれば、かなりのファインプレーだろう。
間に合うだろ、という伯の言葉に対し。もう迷っていられない、と言いたげな表情を浮かべて二人が頷く。
「ハクから話は聞いたぜ、全員覚悟を決めたんだってな？」
「人が死にかけてんのに黙ってられっかよ！」
「鴨志田に苦しめられた人を救えるのは俺たちだけだ……救うしかないだろう」
「……幸いなのは、鈴井が生きてたってトコだな。ここは神様に感謝しなきゃな」
「改心の方法はさっき伝えた通りだ、いつ潜入するかはオマエらに任せる」
四人全員が覚悟を決め、今すぐにでも侵入しようとすれば。
「ねぇ……退学って、本当？　もう噂になってる」
「……ああ、本当だ。なるつもりはないけどな」
「鴨志田やるなら、私も混ぜてよ。志帆があんな風にされたのに、何もできないなんてイヤだよ！」
何か物言いたげな顔をした高巻が、彼等の所へとやってきた。
――彼女も、鴨志田に利用され、唯一の親友を失いかけてる被害者の一人である。
彼女の気持ちも強くわかる。わかる、が。
ペルソナの力がなければ生きていけないあの危険な世界に、生身で突入させる訳にはいくまい。
親友を奪われた気持ちも、何もできない悔しみも。その感情をぶつ

けるための最適な所があるというのなら、その想いを復讐心に変えるというのも。
三人共鴨志田の支配下に置かれ、叛逆の心を抱き続けていたからこそ”わかる”のだ。
「お前には関係ねぇ、クビ突っ込むな」
「関係なくない！　志帆は私の……！」
「……悪いが、邪魔しないでくれ。ケリはつけるし、鴨志田の野郎に全校生徒の前で土下座だってさせてやる。だから今は待っててくれ、頼む」
そして、わかるからこそ。彼女を連れていく訳にはいかない。黙って見ていてくれ、と言うしかない。
その場にいるのが耐えられなくなったのか、高巻は走り去ってしまった。
「容赦ないな……」
「……まぁ、高巻の気持ちもわかるけどな。ペルソナの力がなくちゃ、あそこにいても荷物になるだけだからな」
「何も無いなら今日から行くぞ。鴨志田の気が変わってしまう前に、全部終わらせてしまおう」
「行くぞ、オマエら。鴨志田のオタカラを盗んであっと一泡吹かせてやろうぜ」
その姿、”怪盗”の如く。
色欲の城に存在する狂ったオタカラを盗みに、怪盗一味は歩み始めた。

＊＊＊

「……やっぱり、何かするつもりだ」
やはり、鴨志田に一矢報いると宣言したとはいえ。
伯が来たことにより、鴨志田に対する聞き込みを行っているという事を知った彼女は、不思議で堪らなかった。
普通、鴨志田を止めるのであれば。バレー部の部員であったり、そ

れこそ彼女本人であったり、色々裏を知ってそうな人に聞き回るはず。
実際、伯が彼女の所にも聞き込みに来たのだから。何かしようってのは本気なはずであるのに、気になって彼らを追いかけてみれば、ただ校門前で突っ立ってるだけ。
あの目は『本気』だった。
あの言葉も『本気』だった。
ただ、しかし。本気だったとすれば、こんな所にいる必要も無い。そう思い、ちらりと顔だけ覗かせ、バレないように高巻が覗き見をする。
「何か言い始めた……スマホが鍵で……鴨志田に、秀尽学園に――――」
そして、最後のキー城ワードを言った瞬間。
ぐらり、と彼女の視界が歪む。
（……何!?何が起こってるの!?）
初めて訪れたとしても、ハッキリと理解できる一瞬の違和感。
何事も無かったかのように、無視できない程の不快感。
――――しかし、その一瞬の違和感が、自身を『現実』から引き離した事を実感させる。
彼女の視線の前には、紫色で彩られた巨大な城が立ちはだかっていた。

1―5【Ｃｏｄｅｎａｍｅ：Ｓｏｌｄｉｅｒ】

―４／１５　放課後―カモシダ・パレス―

「うっし！　ひと暴れするとしますか！」
「この広さじゃ、オタカラまでのルート確保は一発じゃ無理そうだな……できる限り力は温存してくぞ」
色欲の城を見上げ、鴨志田を改心させることを決意した”怪盗”四人が歩み出す。歩み出す、が。
「なぁにこれぇ!?」
聞き覚えのある、女性らしい高らかな声に引き止められた。
モルガナ以外の三人が『まさか』と思い振り向けば、そこにいたのは先程も突っぱねた高巻だった。
「高巻ぃ!?　なんでいんだよ!?」
「その声は坂本!?　それに宮本に、雨宮くん…!?　ってか、ここどこなの!?　学校なんだよね!?」
「ナビに巻き込まれたんだろうな……俺達が初めて行ったときは、蓮のナビに巻き込まれた形だったし」
現に、彼らもここに入るために全員がナビを起動している訳ではない。ナビこそインストールされてはいるが、使用しているのは蓮のナビのみ。
つまり、ナビには”周りの人を巻き込む可能性がある”という特性がある。その上で、たまたま迷い込んでしまったとなる。
大方、そういう事だろう。伯がそう言えば、モルガナがそれに賛同する。
「ハクの言うとおりだな。これから使う時は気をつけろよ？」
「喋った!?　化け猫!?　てか、鴨志田に関係あんだよね!?　説明しなさいよ！　それまで帰んないからね！」
「……仕方ない、無理にでも追い返そう」
「気は乗らねぇけど、仕方ねぇな……入ってきた場所に戻せば元の場所に戻れんだよな？」

「すまない、高巻。少し強引になるが」
よっこいせ、と。三人で強引に高巻を抱え、現実とパレスの境目である裏路地へと運んで行く。
「ちょっと！　離しなさいよ！」
「終わったら全部話すから、よ！」
境目のある裏路地で高巻を降ろせば、水に溶ける泡のように姿が曖昧になって行き。最終的には、体が完全に現実へと戻ったのか、消えてなくなってしまった。
「ったく……次からは気を付けねぇとな」
「シャドウ共には気づかれてるだろうからな。気合入れていくぞ！
頼りにしてるぜ、『ジョーカー』！」
「ジョーカー？　なんだそれ、あだ名か？」
「だっせぇ言い方すんな！　コードネームだよ！　コードネーム！
本名で呼び合う怪盗なんてマヌケだろ!?」
まぁ、確かに。
怪盗というのは身元を隠すものだというモルガナの主張はあながち間違いではないし、何よりファンタジー感あふれる世界にいるなら”なりきる”のも重要だろう。
「それは納得したけどよ……なんでこいつがジョーカーなんだ？」
「戦力的に『切り札』だからな。ハクもハクでそれなりに強いが、ジョーカーには度胸があるだろ？」
「悪くないな……ジョーカー、いい響きだ」
「次にリュージだな、お前は……」
「『スカル』でいいんじゃないか？　ドクロマスクが特徴的だし」
「いいじゃねーか！『スカル』！　いいセンスしてんな伯！」
「で、最後にハクだが……」
「伯は……」
モルガナ、”ジョーカー”が揃えて口に出し、残された人間体のコードネームを考えてみるが。
伯がその場のノリで決めてもいいのだが、呼び名となるのならカッコいいコードネームが欲しくなるのが人間の性。

ジョーカーは戦闘性能、スカルはマスク。となれば、伯もそこから引っ張ってくればいいと思うかもしれないが。
「……なんつーか、ペルソナと衣装があんまマッチしねーよな。ハク」
「仮面も至って普通だしな……二人と違って半分割れてるのは特徴だけどさ」
アレキサンダーと言えば、紀元前の最強の戦士として名前が挙がるが。服装は紀元前にあったものと言い難く、ロングコート調の軍服。紀元前と中世。どちらを取るかという問題になり、それが悩ましい。
実際、伯もどちらにするか悩んでいたのだが、決め手となったのはジョーカーの閃きだった。
「『ソルジャー』なんてどうだ？」
「……悪くないな」
――ソルジャー。直訳すれば”兵士”や”戦士”。
近接攻撃しか残されていなく、チーム内随一のスピードで敵を翻弄し、尚且つ軍服を着ているとなれば、もはやそれ以外にあり得るのか、というレベルの出来のコードネームだとも言える。
うん、悪くない。そう思い、ソルジャーが満足げに親指を立てる。
「で、モルガナはどうするよ」
「猫」
「猫じゃねーよ！」
「『モナ』でいいんじゃないか？　呼びやすいし」
「呼びやすいならそれで納得する」
とまあ、このように全員のコードネームが決まり。
”ジョーカー”と”ソルジャー”と”スカル”と”モナ”の四人は通気口を通り、色欲の城へと潜入した。
「……また、入ってこれた」
現実世界で起こったイレギュラー（高巻杏）の存在を軽視して、だが。

＊＊＊

「だーっ……疲れたぜ……」
「いったん休憩を挟もう。ソルジャーも疲れてきてるからな」
「すまないな……燃費が悪くてすぐ疲れるのは、どうにかならないもんかな」
「ただ、その分助かるのも多いぜ。心配すんな、疲れたらワガハイのペルソナが回復してやる」
認知の薄い小部屋――――セーフルームと呼ばれる部屋に入り、四人は休憩を取る。
元々のスタミナがあり、ペルソナ使いの増加により疲労は分散されているとはいえ、やはりソルジャーの燃費の悪さは隠すことができず。合間合間に休憩を挟むことでごまかし続け、三歩進んで二歩戻るような状況になりつつはある。
ただ、着々と進んでいる。
強いて言うなら、ソルジャーとスカルの役割が似ていてバランスが悪い位で――――これで一人、搦め手を使えるペルソナ使いさえいれば――――とは思うものの、やはり四人もいればサクサクと進んでいく。
ミネラルウォーターを片手に持ったソルジャーが、ジョーカーの”特異”を思い出す。
「……そういえば、ジョーカー。アレはなんなんだ？」
「アレ？」
「アレって言ったらアレだ。逆にどう言えば良いんだ」
「モナに聞けばいいだろう……と言いたいが、モナも知らないんだろう？」
「ワガハイだってあんなのは見るのは初めてだぜ。心は一人に一つ。それはペルソナだって同じだからな」
まぁ、簡潔に話すのであれば。
敵シャドウ――――つまり、彼らが持つペルソナにあたる、誰の意思も持たない心の象徴である存在を、ジョーカーは”仮面”にし、それを自身のペルソナにすることができるのだ。
ソルジャーがそれを”特異”として思い出した理由は、彼もやって

みた結果交渉こそ成功したものの、吸収されたのはジョーカーの仮面にであり。
　原理はわからないが、ジョーカーにしかできない。それ故に、”特異”と呼んでいる。
「まぁ、気にすることはねぇんじゃねぇの？　強いんだからそれでいいじゃねぇか。あんま気にすんなって」
「まぁ、それはそうだけどな……」
「できなかったのを引き摺ってるのか？」
「そりゃあな。アレキサンダーと使い分けられたら強いだろ」
　柔軟な戦いができさえすれば、この燃費の悪さも気にならなくなると思うけどな。ソルジャーがそう付け加え、ペットボトルのキャップをぐいっと捻る。
　モナに回復魔法（ディア）をかけ続けて貰う位なら、ジョーカーのようにペルソナを増やし、あり余る精神力（SP）を使用して回復をした方が良いに決まっている。そう常に”最善”を求め続けるのも、ソルジャーらしいと言えばらしい話だ。
　口に当てて水を飲もうとすれば、不意にドアに耳を当てるモナの姿が目に映る。
「……モナ？」
「……いや、なんか外が騒がしくてよ」
「なんか聞こえんのか？」
「ああ。姫って言葉が執拗にな。きな臭いぞ、コレ……ちょっと探ってくるぜ」
「姫……」
　ばたん、と扉が閉まる音を聞いて、ソルジャーは顎に手を当てて考える。
「……まさか」
　――――いや、一度は追い返した。こっちの世界に入って来れるのは俺たちだけで、高巻じゃ入って来れないはずだ。
　そう理由をつけて”最悪の事態”を否定しようとするも、決して否定はできない。

ただ、有り得てしまう。
あの世界に干渉したことで、高巻もナビを持っている可能性が。
ソルジャーにしろ、スカルにしろ。ナビがインストールされていたのは、パレスに入った直後。
つまり、有り得る。一度目のように、知らない内にナビが反応して入ってしまった可能性が。
「おい、やべえぞ！」
「早っ！」
「何があった!?」
反応からして――――その思考が過る中、ソルジャーは帰ってきたモナに駆け寄る。
「アン殿が……オマエらの知り合いの！」
「……いや、さっき追い返したろ？」
「……そういう事か」
「やっぱりか……！」
疑惑を浮かべるスカルに、事態を察するジョーカーに、疑惑が確信へと変わるソルジャー。
三者がそれぞれの反応を見せるが、二人の反応を見たスカルも直ぐに”どうなっているか”を察する。
「まさか……俺らの時みてえにこっちに!?」
「ありえない話じゃねえぜ！　オマエらも迷い込んできたんだろ!?」
「シャドウに出会ったら……モナ！　どこにいるかわかるか!?」
「食堂っぽい部屋の先だ！　そこにいる！」
姫という言い分からして、手荒に扱われるような可能性はかなり薄いが。それでも、あの鴨志田の元に差し出されれば、何をされるかはわからない。
最悪、ジョーカーから聞かされた話の中で、彼女が言っていたような事が――――という線だってありえる。鴨志田が”王子”で高巻が”姫”であれば。
「せっかく逃がしてやったのに、テメェから来たのかよ……！」
「行くしかねえぞ！」

――――もう二度と、被害者を出してたまるか。
全員、その想いを胸に。モナの指示通り、四人は高巻を救いに向かった。

＊＊＊

「シャレになってないっての！　ふざけんな、鴨志田ッ！」
一方、現状を理解していない高巻（こちら）杏では。
X字の柱に両手足を拘束された高巻と、それを見守る鴨志田。そして、”認知上”の高巻と、勘違いをして連れてきた複数のシャドウ。
本物の高巻の置かれている状況が状況故に、如何にもな雰囲気が漂っているが。シャドウが持つ短剣は彼らの時のように鋭く研ぎ澄まされており、一歩踏み外せば第惨事になる事間違いなし。
故に、ヒリついた雰囲気が漂っていた。
「高巻！」
ドカン、と。タックルをしたような音と共に、四人がその部屋へと侵入する。
それを見た鴨志田はやれやれといった振る舞いをすれば、再度張り付けられた高巻に目を向けて。
「……何回来るんだよ、お前ら。それで、どうせお前もそこの賊と同じだろ？　俺様に文句があって来たんだよな？」
「アンタ、許さないから！　よくも志帆を……！」
「けど、えっと……名前、忘れたけど、あいつ飛び降りたのお前のせいだからな？」
あいつ。
鈴井でも、志帆でもなく。仮にも自分の持つ部の部員であるというのに、彼女を呼ぶ名前は”あいつ”。
どれだけ琴線に触れれば良いのか、どれだけ人の心を逆撫ですればいいのか。
もはや怒りすらも湧かず、どれだけ人の命を冒涜すれば――――という、疑問すら湧いてしまうような鴨志田の行為。

「え……？」
それに対する反応は、高巻も同様で。
怒るのではなく、唖然。どうしてそんな事ができるのか、という疑問。
そんな高巻の絶望した顔を見れば、鴨志田は面白がるようにケラケラと笑う。
「お前が相手してくれないから、代わりしてもらったんだよ」
「ふざけないでっ！」
「あいつが飛び下りたのも実際こいつのせいだし、代わりになったのもこいつのせい。悪いのは全部こいつ。事実だろ!?」
「テメェが悪いに決まってんだろ!?」
「それ以上騒げばこいつを殺すぞ、賊め」
「クッソ……！」
鴨志田に完全に主導権を握られていて、動くことができない。
その気になれば、高巻は瞬殺される。ペルソナの力を持っていない彼女であれば、剣で一刺しされるだけで一瞬に。
救わなければならない。ただ、動けば彼女が殺される。
スピードに特化したソルジャーであれば、間合いを詰めて一撃――
――という可能性はあるが、タイミングのシビアさから、やるにはリスクがある。
懸かっているのが自分の命であれば、窮地を脱するためにソルジャーは動いていた。
ただ、懸かっているのは他でもない人の命。それでは動けるはずもなく、眺めることしかできず。
ただ、ケラケラと悪趣味な笑みを浮かべる鴨志田に対し、怒りを募らせることしかできない。
「どうせならお前らも見てけよ、解体ショー。一発ヤれて気分がいいんだ。見物料はいらねぇぜ」
「やめろ！」
「人の心を踏みにじりやがって……！」
「全部……私のせい？」

もう、どうにもならない。どうにもならないのであれば、鴨志田の言う通りじゃないのか。
ソルジャーやスカルのように。その思考が頭を支配して、忘れてはならない怒りを失った高巻が、言葉を漏らす。
「はは……これ、天罰なのかな。志帆の」
「最初っからそういう顔してりゃいいんだよ」
もう、これは。
動かなければ、鴨志田の言う”解体ショー”が行われてしまう。それを察した三人が、それぞれのペルソナを召喚しようとすれば――――
「言いなりのままでいいのか？」
静観を続けていたジョーカーが、口を開いた。
「……え？」
憎き存在に対し、言いなりのままでいいのか。
その言葉を聞いた彼女の顔にある翡翠の目は見開かれ、絶望から”正気”へと戻る。
それはまるで、ペルソナに覚醒したソルジャーやスカルのようで、既視感を覚えるというのも無理はない。
まさか――――その思考が、同じ末路を辿った二人の頭に一瞬過る。
「……そう、だよね。そんなのやに決まってる。こんなクズに言われるがままなんて……どうかしてた」
「あ……？　奴隷は大人しくしてりゃいいんだよ」
「もうね……無理。マジでムカつきすぎて……」
もう、偽物の”高巻　杏”とは違う。
鴨志田の付属品でもない、鴨志田の女でもない。正真正銘、本物の高巻　杏が、本心を露わにする。
「どうにかなっちゃいそうよッ！」
――――叛逆の”炎”が、心に灯る。

まったく、出番が遅すぎるのよ。
お前が立ち向かわないで、誰が恨みを晴らしてくれるの？
許す気なんて、初めからなかった。
お前の中のもう一人のお前が、そう叫んでる。
我は汝、汝は我。
やっと契約、結べるね……

――――わかったよ、カルメン。

omg(う)!!(ち) We(ら) are(最) SO(強) awesome(じゃ)(な)(い?)

もう、我慢なんてしない！

1―6【I believe in you】

―4／15　放課後―駅内―

「どれがいい？」
「炭酸じゃない方」
「どれも炭酸だ」
――――炭酸以外の飲み物を知らないのか、こいつ。
竜司以外の全てがそう思うが、自身の分を買ってきていないとなれば献身的にも取れるような行動であり。
仲間のために飲み物を買いに行きつつ、それでも炭酸のみを買ってくるのは、竜司らしいと言えばらしいようにも思えるだろう。
高巻と蓮がコーラを選び、伯が残りのサイダーを選べば。ひょこりと鞄の隙間から顔を出すようにして、モルガナが尋ねる。
「ワガハイのは？」
「猫に炭酸は飲めないだろ」
「ワガハイはただのネコじゃねーんだぜ、ハク。……や、ネコじゃねーよ！」
「板についてきたな、ツッコミが」
「ねぇ、宮本……その猫、モルガナ、だっけ？」
「……信じられないとは思うけど、今の感想は？」
「私、猫と喋れてるんだね。スゴく、不思議な感じ……正直、ペルソナってのもまだ信じられなくて……」
あの世界の恐怖を痛い程知り、叛逆の意思にまで目覚めてしまったのであれば。
もはや、どのようにして鴨志田を改心させるかを黙っている必要もない。それを判断した彼らは、ペルソナも、オタカラも、喋る猫（モルガナ）の存在も。その全てを高巻に伝えることにして、今に至る。
「アイツ自身の口から罪を告白させるなんて……ホントにできるの？」
「被害に遭ってるバレー部員も意気消沈。教師も親も、鴨志田が結果

を残してるから何も言わずに見て見ぬフリ」
「俺たちが騒いで暴動まがいを起こしたって、握り潰されるのがオチだろうな……だから、あの世界に賭けるしかない」
　ある程度、理解はできた――――というか、あの鴨志田に一矢報いることができるのなら、理解できずともやるしかない。
　ここら辺は竜司に近い感性を持っているようで、『私にもやらせて』と言わずとも、既にやる気を見せた表情を見せてくれている。
「……私は、志帆の仇を取りたい。親友をあんな目に遭わせてのうのうとしてるなんて、私は絶対に許せない」
「やる気なんだな？　高巻」
「まぁ、良いんじゃないか？　戦力増強にも繋がるし、伯の負担も減るだろう」
　四人から五人に増えさえすれば、戦闘中に誰か一人を温存させることすらできるという考えもできる。
　正直、これは彼らにとってメリットしかないのだ。伯の燃費の悪さを考慮すれば、交代で戦闘を行わせるというのは全員が抱えた弱点の補完になる。
　ピーキーな性能をしている伯はもちろん、戦力の増強が目論めることを好意的に捉える蓮やモルガナもＯＫマークを作る。
　ただ、腐れ縁――――と言うよりかは、『俺たちがどうにかするから黙って見てろ』という思考が強かった竜司のみがしぶしぶと言った反応を見せていたが、ぽっきりと折れて加入を認めた。
「連絡先交換するぞ、高巻」
「杏でいいよ。高巻だと堅苦しくてなんかヤダ」
「……わかったよ、杏」
「じゃ、よろしくね。モルガナも」
　スマホを取り出して手際よく連絡先を交換すれば、高巻はひらひらと手を振りながらその場から立ち去る。
「いい子だな……あの健気な心配り……友達思いで、おまけに美人……なんて子なんだ。ワガハイ、すっかり心を奪われちまったぜ……」

「惚れるな。目を覚ませモルガナ」
「惚れてねーよ！」
「いや、蓮の言う通りであれはどう見ても惚れてただろ」
「お前、そもそもオスなのかメスなのかどっちかはっきりした方がいいんじゃねぇの？」
「そもそも猫じゃねーよ！」
お決まりの流れをモルガナがかませば、猫らしくない咳き込みを数回し、重大な発表をするかの如くして『言っておきたかった事がある』と述べる。
「パレスの中じゃ連絡取れないからな。ワガハイ、こっちに残ってやるよ。というわけで、オマエ。ワガハイのお世話を頼む」
――――逃げなければ。
これはつまり、蓮が『無理だ』とさえ言ってしまえば、矛先が自分たちに向く。高校生とパレス潜入の二足の草鞋に加えて、モルガナのお世話まで加わる。
そんな事になれば、間違いなく死ぬ。主に体力面で。
その危機を察した二人が、ぶんぶんと手を振って拒否の構えを見せる。
「任せた。うち、ぜってー無理だから」
「俺も。任せたぜ、蓮」
「ちょっと待て」
「……まぁ、一人暮らしだから是非飼いたいし、俺はこういう猫も好きだけどな。すまん」
「ならお前が飼え」
火の玉ストレートのようなツッコミが飛んでくるが、伯はそれをサラリとかわす。
とは言え。一人暮らしというのは随分と寂しいもので、”飼えるなら飼いたかった”という伯の言葉は、嘘偽りのない本音である。飼えないのだが。
「マンションだから持ち込み禁止。だから飼いたくても飼えないってワケ」

「俺も。おふくろが許してくれる訳ねーしな」
「……まぁ、それならどうにかしよう。どうにかできなそうだが」
はぁ、と蓮が溜息を付けば、モルガナの居住先が確定する。
最悪、蓮でもダメなら杏に頼めばいいか、と。颯爽と断った二人がそう考えれば、ふんふんとご機嫌そうなモルガナが明日の予定を話す。
「一旦立て直そうぜ。薬でも武器でも、いつまでも絆創膏とかボロナイフ便りじゃオマエらも不安だろ？」
「……とは言っても、市販品じゃたかがしれてないか？」
「ま、そこは〝認知の世界〟だからな。効果が強いクスリだ！　って認識さえすれば、市販品レベルでも役に立つかもしれねーぜ」
――それでも、しれないか。
役に立つと役に立つかもしれないでは天と地の差だが、確証性はないものか。そう伯が案じれば、蓮がメガネをくいっと上げる。
「任せろ。アテはある」
「本当か？」
「善処はする」
「善処……まぁ、何も起こさないよりかはマシか」
この流れで『アテがある』と言う辺り、ドラッグストアやその類ではなさそうにも思える。
なら、薬は蓮に託す方が良いだろう。その流れで纏まれば、今度は武器調達をどうするかの話へと移り、それも竜司が知るミリタリーショップに行こうという話で纏まる。
「それじゃあ、明日は買い出しの日にしようぜ！　伯も行くだろ？」
「ああ、そうさせてもら……」
う、と言う前に。
何かを思い出した伯が、顎に手を当てる素振りを見せて考え事をする。
――竜司には悪いが、関係は悪くしたくない。タイミング的にも、パレス潜入で忙しくなる前に顔を出しておいた方がいいだろう。
うん、そうしよう。そう考えを纏めて顎に手を当てるのをやめれ

ば、伯は両手を合わせて〝すまん〟という意思を三人に見せる。
「明日は用事があったのを思い出した。ミリ屋は日曜に回そう」
取引相手は御贔屓に。

―4／16　昼―屋上―

屋上を訪れれば、土いじりをしている先輩が一人。
ドアの開いた方向を見れば、色々と噂になっている後輩が一人。
誰にも知られていない、秘密の関係。
その関係は、年頃の高校生の心を揺さぶるには充分なものであり。
屋上への来訪を喜んだ奥村は立ち上がり、伯に笑顔を見せる。
「あら、宮本くん。来てくれたの？」
「野菜の話あったじゃないですか……これから忙しくなるんで、今日貰おうかと思いまして」
「うん、わかった。家庭科室の冷蔵庫にあるから今持ってくるね」
駆け足で家庭科室に向かう奥村の背中を見送り、一人伯は思う。
（……そう言えば、俺が退学になる噂を知っているんだろうか）
知っているか、知っていないか。それさえ聞けば、選択肢は二つのようにも思えるが。
とは言え、その実態は二者択一。聞けば返ってくるであろう答えは、伯も察していた。
半日で杏に知られていたとなれば、一日後には学年を跨いでいるに決まっている。〝鴨志田の勅命〟というブランドも付け加えれば、猶更。
その酔狂な程にイカれたブランドの力を痛い程味わってきたのだから、多少の覚悟はしている――――と言うよりかは、ほぼ確信めいている。
――――まぁ、仕方ない。
小さめの手提げを引っ提げ、家庭科室から帰って来た奥村の姿を見て、前述の通り『仕方ない』と思いつつ、噂の件について聞こうと

したが。
「……どうしたんですか？」
少し、ではなく。
出会って一週間の伯ですら読み取れる程の違和感（仮面）を顔に着けた奥村の姿を見て、伯は思わず言葉を出そうとするのを取りやめる。
あぁ、多分、これは。
何を言いたいかが、なんとなくわかる。見透かされないように心の奥底で苦笑いをしてみせれば、奥村が口を開く。
「……宮本くん、退学だって噂が流れてて。本当にそうなのかなって、思っちゃっただけ」
「……やっぱり知ってたんですね」
悲しんでくれているという事は、とりあえずは好意的に思っててくれていたという事か。
出会って一週間程度しか経っていない上に、色々と”噂”になっている自分の身を案じている奥村に対し、心の中で感謝の意を示す。
「でもね……私は、宮本くんがそんな事をするような人には見えないの」
「そう思う理由は？」
「宮本君、野球部だったんだよね？」
「……それは過去の話ですし」
「私は、宮本くんが野球部で頑張ってるのを知ってた。宮本くんがチームの中心となって活躍してるのも。……ただ、初対面で名前を知ってたら驚かれそうだったから、知らないフリをしてたけど」
そう言えば、そんな事をするような人には見えないという部分の”本題”へと移る。
「宮本くんが野球部を潰したとかも言われてるけど、私はそうは思わない。何かに向かって、ひたむきに努力してた人が……その努力の先となる大切な物を壊さないと思うし、退学になるような事件なんて起こさないとも思ってる」
「……そうですか」
「それに、ほら。宮本くんって、すっごく優しいし……出会ったばっか

の私が言うお願いなんて、聞いてくれないと思ってたから」
自分が頑張るのを知っていた。だから、そんな人じゃないと信じる。
――――余程の事であれば、鴨志田を絶対とするが故に思考停止して”鴨志田を信じる”という行動をするだろう。
何故なら、それが楽だから。
鴨志田を信じ、崇拝していれば何かしらのおこぼれが来る。
おこぼれが来ずとも、少なくとも被害者の立ち位置からは脱却できる。
いじめのような構図であるが、ほとんどの人は自分の利益を優先する。
ある例外を除けば、いわくつきの転校生の蓮や、鴨志田に逆らう伯や竜司と関わろうとはしない。それが楽で、それが最善なのだから。
(前から知ってるって事は、俺が鴨志田に逆らったのも……)
奥村は、伯をずっと前から知っていると言っていた。
それが意味するのは、こうなるまでの事情も知っているという事。野球部が潰れた原因も、鴨志田に嫌われている事も。その全てを知っているはずだというのに。
(だったら……なんで、俺なんかを)
普通の人であれば、自分と絡まないはずだ。
普通の人であれば、自分に提案なんて持ち掛けないはずだ。
その”はず”をことごとく無視し、裏にある事情を理解し、それでも尚――――
「……俺を、信じるんですか?」
驚嘆と疑惑が混じった言葉が、伯の口から漏れる。
それを聞けば。うん、と即答しながら一回頷き、奥村は見上げるようにして伯の顔を見る。
「信じるとか、信じないとかじゃなくてね。……私が知る貴方なら、そんな事は絶対にしないと思ってるから。ずっと信じてるよ、宮本君は」
”信じる”。

その行為の重さ、難しさ。それはこの学校にいれば、痛い程知っているだろうに。
「ふふ……宮本くん、嬉しい事でもあったの？」
「……え？」
ぽかん、と。
何を言ってるんですか。そう言いたげな顔をしている伯に、奥村がクスリと笑って何が起きているかを伝える。
「宮本くん、笑ってたから、つい。それとも、面白い事でもあった？」
笑っていた。
その事実を知れば、伯は目を瞑って。
「……どっちもですよ、どっちも」
信じる人がいた事の嬉しさに、こんな自分を信じる酔狂な人がいるのだと知った面白さ。
それがあるから、どっちも。
蓮や竜司も杏も、味方と呼べる存在ではあるが。それは互いの過去を認め合い、打倒鴨志田に向けて一致団結をしているからという、ある種の”似た者同士”であるからであって。
奥村は、伯がパレスに潜入できることをしらない。それよりも、打倒鴨志田に奔走していることすらも知らない。
何も知らないと言うのに、自分を信じる。
”似た者同士”とは違う、仲間であって仲間ではないような感覚を覚えた。腫物扱いされていたのもあって、それがたまらなく嬉しかった。
（……だから、笑ったんだろうな）
そう思えば、表情にらしさを取り戻す。
現役の時に常に見せていた、席を譲ることのなかった絶対的王者が故の自信。それを見せられるのは、それを知っている相手だからか。
「安心してください。退学にもならないし、吊るしあげにもされないんで」
今自分にできることは、退学にならないよう動くと宣言することだけだと。

まずは、理解してくれる先輩を安心させる。手は明かせないものの、どうにかする意思は伝える。
だから、今は。
先輩に伝えるのなら、この言葉が一番だろう。そう確信して、伯が自信ありげな笑みを浮かべながら口を開く。
「”信じて”ください。俺は必ず戻ってきますから」
「……うん、信じてる」
「信じるの、得意でしょう？」
「心の中身がわかる人だけだよ、宮本くん」
くすりとおどけるように奥村が笑えば、伯も合わせるように笑い。屋上の扉がある方へと歩んで行き、扉を開け、屋上から去る。
貴方を信じる。
その言葉を背負った背中は、また一段と大きく映っているのかもしれない。

1―7【Ｔａｋｅ　ｙｏｕｒ　ｈｅａｒｔ】

―４／２０　放課後―カモシダ・パレス―

「……これがオタカラなのか？」

最深部に辿り着き、宝物庫と思われる部屋に足を踏み入れ、オタカラであろう物を目の当たりにしたソルジャーが一言。

しかし、その言葉は。初めて見つけた喜びと言うよりも、『本当にこれか？』という疑問の方が強いようにも思える。

ソルジャーが疑問を口にすれば、同じようにに杏――――もとい、”パンサー”とジョーカーも疑問を表す。

「ていうか、なんか浮いてるし……」

「靄みたいだが……」

試しにジョーカーが触れてみようとすれば、するりと手の中を通り抜けてしまう。

まるで煙のように実態を持たない”オタカラ”は、盗もうと思っても盗めそうにない見た目をしている。

オタカラを盗むと言われれば、王冠や金銀財宝、それに関わらず実体化した何かを盗むという想像をするのが普通であり。事実、モナ以外の全員がその想像をしていた。

しかし、目の前に現れたオタカラは、煙のようで掴みどころがなく。確かに、欲望の具現化と言われれば”形のないモノ”という解釈もできそうではあるが、いかんせんそれだと肝心の盗む行為ができない。

「まぁ待て。ここまで来れたら話そうと思ってたんだ」

モナがトコトコと歩いてオタカラに近寄れば、残るメンバーの方を振り向く。

「オタカラは場所を突き止めただけじゃ奪えない。実体化させてやらなきゃいけないんだ」

「実体化……？」

「さっきジョーカーがやったのを見ただろ？　このままだと、ワガハイたちが何をしようが盗めやしない」

「例えば……考えられるのは”オタカラに強いショック”を与えるとかか？」
「鋭いぜソルジャー！　そういう事だ！」
それをどうにかするための”実体化”。
認知世界で彼らを殺害しようとした出来事に関して鴨志田が言及すらしなかったのは、そもそも現実の鴨志田がそうしたという事を知らなかったから。
だが、逆も然りではない。現実世界で鴨志田に関して嗅ぎ回れば嗅ぎ回るほど、パレスの警戒度は上昇していったという過去がある。
現実でイライラする出来事があれば、心に大きな影響を与える。
ただ、心が勝手にイライラすることはあり得ない。心を抱く本人に影響があって、初めて心の変化が起こる。
「えっと……つまり、どういうこと？」
「欲望には、もともと形なんて無いからな。自分の欲望が、誰かに狙われてるって事をまず本人に自覚させなきゃいけない。欲望を『奪われる』って強く意識させるんだ。それで初めて、オタカラは姿を現す」
「お前の欲望を奪う……怪盗っぽいじゃねぇか！」
「……で、どうすればいいんだ？　今の俺たちが鴨志田に接近したらどうなるかわからないだろう」
ただ、予告するにも懸念せねばならない点はある。
退学を命じられた自分たちが無理に鴨志田に接触すれば、もしかしたら理事会前に退学になる可能性もある。
更に言えば、改心した後にどうなるかはわからないが『問題児の彼らがどうこう言ってきて……』という感じで主犯格だとバレる可能性もある。
自白の範囲が不透明な以上、鴨志田に直室接近するのはリスクがあると言えるだろう。そう考えてジョーカーが尋ね、モナが返答を返す。
「いいや、名前を出さずにカモシダの元に直接送ればいいんだ。予告状ってヤツだな」
「予告状……怪盗らしくなってきたな」

「ただのイタズラだと思われないように、カモシダの罪状まで付けてやればいい。オマエらだって、何やってんのかを目の当たりにしただろ？」
「あんのバレー部への体罰……許せねぇよな」
「志帆だけじゃなく、他の生徒にも……」
あれだけ好き勝手やっていても誰も反抗しないとなれば、絶対的な王座に就く鴨志田ももはや『余裕』を感じているだろう。
親や先生までバックに付けているのなら磐石であるだろうし、何より駒が大多数となれば数の暴力で事件も揉み消せる。その背景はパレスにも表れているし、おそらくこれから何をしようが動くことはないだろう。
そんな余裕を感じているときに、”自分がやってきた悪事は全てバレてるから覚悟しとけ”。という手紙が届けば、いくら余裕の鴨志田とは言え危機感は感じるだろう。それも、やってきた悪事の内容がきめ細かく書かれているとなれば尚更だ。
「でもよ、予告状を出せば盗めんのなら、最初っから予告状を出しとけば良かったんじゃねぇの？」
「甘いな、スカル。刷り込んだ”盗む”って意識は直ぐに薄れちまうんだ。薄れりゃオタカラの実体化も溶けて、またモヤモヤに変わっちまう」
「そうすれば二枚目以降はただのゴミ。また出したとしても、イタズラとして扱われるのが関の山……だろうな」
予告されたは良いものの、その正体不明のオタカラも盗まれてないという結末で終わったとなれば、ただのコケ脅しとして扱われる可能性が高いだろう。
そういう意味でもシビアというか、心を扱っているのだと言う実感も湧いてくる。
「ただ、ちゃんと出せばオタカラは実体化するぜ。ここまで来れば後一歩だ」
「となると、今必要なのは予告状か……」
「俺がやる！　こういうのは派手にやりてえんだよ！」

「アンタで大丈夫？」
「誤字脱字は気を付けろよ」
「わーってるって！　ド派手な花火、一発上げてやるから楽しみにしてな！」
――――まぁ、こういう時のスカルはしっかりやるべき事をやる奴だから大丈夫か。
多少心配であるが、締める所はちゃんと締める。多少心配であるが。それがスカル――――坂本竜司という男である事を知っていたから、多少物言いはせど任せることにした。
「……いよいよ、か」
「待ちくたびれたぜ、この時をよ」
「やるっきゃない……やってきた事全部暴いてやる」
「オマエら、随分やる気みてえだな。……いつやるかはオマエに任せるぜ、ジョーカー。リーダーはオマエだからな」
――――やれやれ。血気盛んなメンバーを抱えたな。
きっと明後日やると言おうが、明明後日やると言おうが。どうせ残りのメンバーは『明日が良い』と言うのだから、決行日は言わなくともいいか。
フッ、とリーダーらしい悪い笑みを浮かべれば、着けた仮面を眼鏡を上げるように指で仕草をして、口を開く。
「さぁ、ショータイムだ」
ショータイム。
怪盗らしい掛け声で士気を上げれば、彼らはパレスから脱出した。

―４／２１　朝―秀尽学園―

「予告状……？」
「朝来たら、貼ってあったってよ！」
大量の生徒が押し寄せる中、その隙間を縫うようにして間を抜けて。はらりと一枚落ちた〝予告状〟を手にし、伯は思う。

（……結構サマになってんな）

『色欲』のクソ野郎、鴨志田卓殿。
抵抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつける
お前のクソさ加減はわかっている
だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って
お前に罪を告白させる事にした
明日やってやるから覚悟しなさい
『心の怪盗団』より

切り抜き文字を上手く活用し、赤と黒の二色で彩った予告状。多少文章の粗さはあれど、そこは竜司らしいと言うべきか。

実際、周りの声を聞くために耳を澄ましてみれば、やれ噂は本当だったのかだの、やれ俺は信じないだの。ただのイタズラとして扱われるより何倍もマシな結果となっているのを見れば、充分効果は見込めるだろう。

さて、ここにいる必要もない。

後はササっと授業を終えて、放課後が着た瞬間に即パレスへと乗り込むだけだ、と。そう思い、そそくさとその場から立ち去ろうとすれば。

「……どうも、鴨志田先生」

予告をされた鴨志田卓（本人）がその場に現れ、怒りを込めた目線を伯へとぶつけてきた。

それと対称的に、伯の目には余裕が浮かんでいる。それはもう、今まで鴨志田が抱いてきたような”余裕”を。

「……お前がやったのか？」

「で、そう思う理由は？」

「俺に歯向かって退学にされるって事を忘れてるのか!? 俺に恨みを持っているお前が一番だろう！」

――――確かに、そうかもしれない。
激高する鴨志田を見ていた生徒のほとんどがそう思いながら、視線を主犯格（伯）の方へと向ける。
手の込んだイタズラだとして、大抵の奴はやるはずがないし、やる必要がない。
やるにしても、鴨志田じゃなくていい。それこそ公民の牛丸だの、威張りちらかす地理の山内だの。鴨志田よりも表立って嫌われている教師は多く、仕掛けるならもっと適任がいるという言い分もわからなくはない。
それこそ、鴨志田をターゲットにする時点で絞り込むことができる。
特に、球技大会の段階から鴨志田の裏を探ろうと嗅ぎまわったり、退学を告げられた問題児三人組がやったとすれば、動機の裏取りもできている。
「だったとしても」
俄然。
民意によって決められる悪が流れ込んで来ようが、伯はその態度を崩さない。何せ、言い方を変えれば伯は〝無敵〟であるのだから。
鴨志田によって退学にされると言われている以上、どのように立ち回ろうが立場がこれ以上悪化することはない。
守る物すら存在しない上に、上手く行けば全てを日の目に当てた上で退学も取り消せる。
――――どうせなら、派手に暴れてやろうか。
そう悪知恵を働かせれば、伯が鴨志田にカウンターを仕掛ける。
「俺が退学だというのはどうでもいい。どうでもいい、が。これがただの一生徒のイタズラだとしても、先生は何も恐れる必要はないでしょう？」
「減らず口を叩くな！」
「仮に先生の言う通り、俺がこの騒ぎの主犯だったとして。大抵の生徒は『どうせ消える前に一暴れしたかったんだな』と思うだけでしょうね。だってそうでしょう？　貴方はこの学校のヒーローと言って

も差し支えない人物なのですから」
仮に、これが本当にただのイタズラだったとして。
そうだったとすれば、でっち上げられた鴨志田は何も気にせず堂々と”やってない”を貫けばいいだけの話である。
裏さえなければ最高の教師であるのだし、そもそもでっち上げられようが積み上げてきた物が本物であれば、まず生徒は疑いはせども信じはしないだろう。
どうでもいいと一蹴して、普段通りの鴨志田先生を演じる。生徒にとって最高の教師を演じる。それさえしてればまず信頼は崩れることはない。
まぁ、過剰に反応するメリットが何一つない。やっていなければの話であるが。
それが正解というか、”優しい鴨志田先生”であればしないはずであるのだ。
「むしろ、反応する方に驚きましたよ。信頼の厚い鴨志田先生であれば、こんな噂は気にせずに放っておくと思ってましたから」
「……お前に俺の何がわかる？」
「部員と顧問の関係だったじゃないですか、”元”ですけれど」
つまり、過剰に反応すれば反応する程、鴨志田自らが墓穴を掘っていくことになる。
大逆転が待っているが故に堕ち続ける伯に、その意図を理解していない鴨志田は後をガンガン追っていく。
「野球部の臨時コーチになって愛のあるシゴキを行ってくれた鴨志田先生が、まさか。バレー部部員には体罰まがいの事をしているかもしれないだなんて。信じられませんね、本当に」
だんだん、周囲も異常性に気づき始める。
鴨志田先生が押されていないかという考えではなく、”鴨志田先生は本当にやっているのではないか”という半信半疑の思考への移行。
だからと言って支持する訳ではないが、退学を命じられた問題児の言い分も一理ある。そして、鴨志田がそれを受けて言い淀んでいるという事実も認識している。

場が傾いたのを確認すれば気分が良くなり、ジョーカーのようなフッと澄ました笑いを浮かべ。鴨志田の横を通り過ぎてその場から去ろうとする前に、墓穴を掘った鴨志田のみに聞こえるような位置で立ち止まれば。

「……あんまり舐めんじゃねぇぞ。覚悟しておけ」

――――心に隠した〝叛逆の意思〟を匂わせて、伯はその場を去る。

（……まぁ、少し派手に立ち回ったかもな）

派手に立ち回ったことは自覚している。ただまぁ、それはそれとして。

焦る鴨志田の表情が見れ、尚且つ痛烈なカウンターをかますこともできて。鴨志田の信頼も揺らがすことができたのだし、さほど問題はないだろう。

気分は良く、『効果覿面だったぞ』とグループチャットに送り、伯は階段を登って教室へと向かった。

「……野球部部員だった生徒よね、あの人」

――――あの鴨志田への挑発で、彼も墓穴を掘っていたということを知らずに、であるが。

1―8【Phantom Thief Dance】

―4／21　放課後―カモシダ・パレス―

「重すぎんだろ……！」
「それだけ欲望がでかいって事か……？」
「頑張れよな！　ワガハイは持てないからな！」
「スカル、もっと力込めて！」
――――これが”心の怪盗団”の初めての活動か。
横で身振り手振りを振るモルガナ以外の全員がそう思う程に姿は滑稽で、それは怪盗という華麗な物でもなければ、どちらかといえば昭和初期の泥棒のようで。
これだけ滑稽な姿であろうと、シャドウがいないのもあって襲撃の危険はない。警戒度が極限まで高まったと考えればおかしな話である、が。
――――させるか！
バン！　と砲台のような爆発音が鳴り響くと同時に、怪盗団が持っていた巨大な王冠（オタカラ）が打ち落とされる。
それでも、怪盗団は動揺しない。これが当たり前であったと想定していたかのように、撃たれたバレーボールの行方も見つめない。
仮面の奥に潜む瞳で見つめるのは、三度出会ったパレスの王。それも無力だったあの時とは違い、対等に戦える能力を全員が持った状態で。
「最後の最後まで邪魔しやがって……！」
「待ち伏せか？　変態教師」
「趣味悪……！」
怖気づかない。
戦える。今までは虐殺とも取れる攻撃を受ける一方だったが、その気になれば――――いや、もっと確実に。力を合わせれば、確実に倒すことができる。
だからこそ、更に煽る。

逃がすかよ。そう言いたげに先陣切ってソルジャーが鴨志田との距離を詰めれば、待ってましたと言わんばかりに口を開いて攻撃（口撃）を始める。

「……お山の大将自らが出向いてくれたんだ。歓迎しないとな」

「何だと!?」

「所詮”学校”って狭い範囲でしか王様気取りができなかった小物だ。仮にもバレーのオリンピック選手だってのにな。滑稽滑稽。鶏口なるとも牛後となるなかれとは言うけど、その結果がせいぜい小物界の大物ってなら笑えるだろ、そりゃ」

な？　と同意を求めるように悪人じみた笑顔を浮かべて、ソルジャーは背後を向く。

――――所詮”小物”に俺たちは負けない。

――――王様気取り。だからどうした。

最大級の被害者の一人だからこそ、言いたい事が全て伝わる。取り繕った笑顔の下に隠れているのは、紛れもない憎悪の念。

仮面の下に隠さなくていい、ではなく隠すな。怪盗風情と罵られようが、隠さぬことでこの手で引導を渡せるのであればそれでいい。

「来いよ、鴨志田。俺らの手で全部終わらせてやる」

最後の最後まで残されたメインディッシュ。それを見なかったことにして盗んで逃げるというのは、荒々しいとも言える怪盗団らしくはない。

肉体と精神の一体化――――心の化身でもあるペルソナを全員が発現させれば、鴨志田もそれに合わせるかのように姿を変えていく。

禍々しい音と共に変貌を遂げていく鴨志田。その姿を言葉で表そうとも、その気味の悪い姿は言葉では言い表しにくい。

大きく伸びた舌。

元々あった腕から更に二本増えた腕。

増えた腕が握る巨大なナイフとフォーク。

どこを見詰めているのか分からない焦点の合わない目。

「全部！　俺様の勝手だろうがぁぁぁぁぁ!!!」

それでも、適切な言葉を探すとすれば――――怪物。

キメラでもない、幻獣でもない、少しばかりの人間の要素がほのかに見え隠れする、禍々しい魔王。
開戦のゴングの代わりを担ったのは、鴨志田のけたましい咆哮だった。

＊＊＊

「モナはペルソナで回復メインのサポートを頼む！　残りの４人で鴨志田を殴るぞ！」
醜く変化した鴨志田を見て、ソルジャーは思う。
（ここまでは想定通り。後は互角以上に戦えるかどうか……）
お前の欲望を盗む。そう予告されたのにも関わらず、最深部にはオタカラを死守するシャドウもいなかった。
それが意味するのは、パレスの主が直々に現れ、惨めな怪盗団を抹殺しに来るということ。
易々と終わる可能性が無いに決まっていたからこそ、怪盗は焦らない。
ここまでは予定通り。何も問題はなく、理外の行動は何も起こっていない。だから焦ることなど何もなく、煽りを用いて開戦を速めた。
だからこそ、準備は念入りにしてきた。
ソルジャーの指示を仰ぐと同時に展開されるフォーメーションが、この事態が予想外ではないことの証明になる。
人間の姿をした４人を鴨志田と相対するように配置し、その４人を壁にするかのようにしてモナが後ろに構える。
回復に特化したモナを完全ヒーラー役で設置し、残りの４人は全員アタッカー。これがベストであるとソルジャーは判断した。
「戦えてるじゃん！」
「戦えてる、で満足しねぇよ！　ぶっとばしてやらぁ！」
パンサーとスカルの言う通り、戦えてはいる。
相手がパレスの主である以上、並のシャドウとは力も体力も全てが違う。体験したことのない長期戦まで考えられるし、後半ジリ貧にな

ればどうなるかは目に見えている。
　ある程度力をセーブしつつ、向かってくる攻撃をいなす、時にはガル等のペルソナの力を使ってじわじわと攻撃を重ねていく。
　長期戦上等。その気持ちで始まった鴨志田戦から数分が経過した上で、まず怪盗団側はほとんどダメージは受けていない。
　ダメージを受けた瞬間にモナの回復が起動し、ノータイムで攻撃に移る。その上で力をセーブしているのだから、体力も消耗していない。
　このまま続けば勝てる。鴨志田の体力が削れていればの話だが。
「……どうなってるんだ？」
「ああ……それなりに攻撃してるはずだが」
　立ち込める暗雲。予想外の事が起こっていなかった怪盗団に訪れた、最初の試練とも言える予想外。
　メインアタッカーとして前に出がちなソルジャーとジョーカーが不安を感じ取り、一度鴨志田の攻撃の射程外に逃れる。
　ただ”硬い”だけじゃない。
　いくらパレスの主と言えど、無敵なはずがない。無敵であるなら攻撃など気にせず特攻を仕掛ければいいのだから、ある程度引き、攻撃を相殺する事の意味は無敵の否定。
　――――回復の類か？
　ある程度予想を建てた上で様子を鴨志田を伺えば、鴨志田の膝元にあった金色のトロフィーに自ら手を突っ込み、人型の何かを貪るように行動を移す。
「くぅぅぅ！　回復回復ぅぅぅぅぅ！」
「回復だと……!?　あの中のやつ食ったからか……!?」
「あれか……！」
「……こりゃ楽だな。鴨志田のエネルギー源が判明したんだ」
　力をセーブしていたとしても”何も効いていない”という線が消えた。
　大分楽になる。そう思い、観察に回っていたソルジャーは再び短剣を取り出し、不自然にペルソナをしまって指示を出す。

メイン火力となるペルソナをあえてしまう。その意味とは。
「一旦引け！　立て直しつつ鴨志田に仕掛けていくぞ！」
そう何個もハンドサインを作り、何種類も覚えるのは不都合で不効率。作戦は口で通すのが一番伝わりやすいというのは当たり前の話。
しかし、口で通せば相手にもその指示が通ってしまう。
そこに混ぜ合わせるのが、真と偽――――ペルソナの有無で判断する。たったそれだけの違いで、敵目線では通された情報の真偽が定かでなくなる。
何度も戦う訳ではないのだから、即席で情報を隠すことができさえすればいい。それを基準として考えるのなら、このハンドサイン変わりとなる”通し”は破格の使いやすさである。
ペルソナが出ていれば”真”。
ペルソナが出ていなければ”偽”。
――――立て直しはブラフ。構わずトロフィーを狙え。
嘘を混じえて指示を通し抜いた怪盗団の攻撃対象が、鴨志田に悟られないようにゆっくりと変わっていく。
鴨志田本体にも攻撃を散らしつつ、ペルソナが繰り出す大技をトロフィーにのみ命中させて、耐久値をじわりじわりと削っていく。
鴨志田の膝下にあるトロフィーは、死角とは言わずとも、鴨志田から見れば見えにくい位置にある。
人間の周辺視野は上下左右どの方向であろうと１８０度以上。しかし１８０度以上と言えど、正面を向いたまま上下左右の端に意識を向けることは難しい。
それが怪物にも通じるかどうかは不明だが、少なくとも”元”人間の鴨志田もそれは同じだろう。
トロフィーに注目をさせない――――つまりは、回復をしなくてもいい状況を生み出せさえすれば良い。攻撃を当てなければいい。
回復をしない分攻撃に余裕が生まれる。自然と顔が上がって行き、立て直しを行いつつ攻撃を繰り返す怪盗団に攻撃を命中させるために、トロフィーへの警戒心が疎かになる。
数十秒、数分、十数分。

そうして時間が経って行けば――――鴨志田も違和感を覚えるが、そうなればもう遅い。
「おい！　これの価値が分からねぇのに触ってくんな！　もうやめろよ？　教えたかんな!?」
攻撃対象が、自分ではなくトロフィーに移っている。
鴨志田からすれば妙だった。引いて立て直しをすると宣言したとはいえ、極端に攻撃の命中率が下がっていたのだから。
あまりにも外れすぎている。嫌な予感がして下を向いてみれば、既に権力の象徴は半壊状態。
鴨志田がそれに気づいた瞬間、パンサーとスカルがペルソナの力を解放する。
踊れ！　カルメン！
奪え！　キッド！
荒れ狂う雷と炎が鴨志田の顔面を襲い、ほんの一瞬視界を奪う。
ほんの一瞬。時間にして約２秒程度。
鴨志田はその２秒に驕った。力をセーブし、攻撃が緩んでいる中での２秒。この程度、ただの誤差でしかない、と。
「小賢しい奴め……再び回復を！」
「遅せぇよ！」
その一瞬の油断が、命取り。
ソルジャーの射程は、怪盗団の中の誰よりも短い。銃も持っていなければ、ペルソナのスキルも物理技ばかり。正に、それは接近戦上等の戦闘スタイルとも言えるだろう。
ただ、それにも関わらず射程は〝ほぼ〟同じ。ジョーカーやパンサーがペルソナの技を遠くから安全に発動できるように、彼も物理技を安全に発動することができる。
その理由を作り出す要因は、彼にのみ与えられた特権――――十数メートルの身長差を誰よりも速く埋める、最速のスピード。
ぎゅん、と。神速が如きスピードで、ソルジャーが短剣を引き抜きつつ、がら空きとなったトロフィーへと単身で突っ込む。
意図に気づいた鴨志田が攻撃を放とうとするが、それでも遅い。

世界がスローになったような感覚。目では追えているのに、攻撃を放とうとする右手が追いつかない。
単純なフィジカル差。向こうの世界でも、この世界でも、その優劣が大きな影響を与えるのには変わりない。
顔を覆い被さる仮面が溶けるように消えて、ソルジャーの背後に大男が現れる。
荒れ狂うペルソナの咆哮が、抑圧された鴨志田への怒りを顕にして。溜まりに溜まった怒りを返すかの如く、動きが咆哮と共鳴する。
「フィニッシュだ！」
怒りの一撃、とでも言うべきか。
火力に全てを注いだペルソナの一撃が、半壊状態のトロフィーに突き刺さる。
力強い斬撃が入ったトロフィーは、ミシミシと音を立てながら崩壊を始め――――遂には、見るも無惨な姿へと変貌した。
粉々になったトロフィーの破片を、汗を流しながら集める鴨志田を見て。
――――”チャンスだ”と。体の底から、本能のような物が湧き上がる。
「あぁっ!?　嘘だろ……全日本で……優勝した時の……」
「ジョーカー！」
「逃がすか！」
ジョーカーの指示を引き金に、モナを含めた全員で鴨志田を囲む。
ガチャリ、と。1人を除いた全員が銃口を向け、1人が剣先を突き立てる。
「今の気持ちはどうだ？　学校のはみ出し者、邪魔者に囲まれて……自分の権力の象徴まで壊された気分は」
「最悪だ！　こんな事して許されると思ってんのか？　いいか？　俺様はなぁ……カモシダなんだぞ!?」
「知ってる」
「知ってて言ってんのか!?　なおさら悪いわ！」
「人のこと見下してるクセによ……今のお前、ずっげぇダセぇ」

「わざわざオタカラ取りに来てやってんの！　さっさと渡してくれる!?」
「黙れ！　貴様らなんぞにこれは渡さん！」
ジョーカーが、スカルが、パンサーが、モナが。そして、ソルジャーが、抑圧された怒りを鴨志田にぶつける。
そして、最後に。そんなお前の姿を見れて俺はご機嫌だよ、と。色欲の王の情けない姿を前にしたソルジャーが、そう吐き捨てる。
「まだそんなこと言う元気があるのかよ！　ならこっちも、本気でやってやる！」
ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅだ！
全員で一気に飛び上がり、セーブを解除してフルパワーで鴨志田を襲う。
殴る、斬る、撃つなんでもありの乱舞が鴨志田を襲い、かなりのダメージは与えたと同時に全員で引く。
「俺様は……王なんだ！　俺様が王じゃなかったら、誰が王なんだ!?」
「王様なんかいねぇよ！」
ふぅ、と。ソルジャーは大きく呼吸をして、一旦後方に引いて作戦を立てる。
（……後、１回でいい。１回叩ければ勝てるはずだ）
隙を生み出し、全員で囲み、総攻撃を仕掛ける。
そこまでに積み重ねたダメージと合わせれば、後１回の総攻撃で鴨志田を仕留ることができるはずだ、と。額に滴る汗を拭って、ソルジャーはチラリと周囲を確認する。
トロフィーを利用した永久機関は途絶えた。となれば、もう鴨志田も好きなように回復はできない。
もう一度、鴨志田の意表を突くことさえできれば大きいダメージが入って勝てる。
それを確信しているからこそ、鴨志田の隙を付く方法を探る。膝下に置いてあったトロフィーと同じ位、鴨志田の権力の象徴であるものを。
マントでもない、グラスでもない、奴隷でもない。その姿を一目見

れば”王様”であるとわかるような、王が王である事をたらしめる存在。
「……王冠、だな」
頭の上に乗っかった、分不相応な王冠。
アレは鴨志田のオタカラでもあり、言わば欲望の象徴でもあり。それが示すのは、落とせば鴨志田の自尊心も纏めて粉々にできるだろうという推測。
もしかしたら、トロフィーよりも大切にしているかもしれない。
鴨志田が王であることをたらしめるアイテム。アレを一瞬でもいいから落とせば、トロフィーの時のように隙ができるはず。それを確信したソルジャーが、今度はメンバーの選別を始める。
――――ジョーカーはペルソナを複数扱うことができる。いざとなれば補助にも手を回せるのだから、いたほうが良い。
――――モナは回復が強い。この先鴨志田のパワーアップがないとも言えないのだから、いた方が確実に安定はする。
――――パンサーは……鴨志田に注目されてる可能性がある。ジョーカーやモナとは別の意味で選ぶべきじゃない。
「……スカル、だな」
ここ一番の大役を任せるにはやや不安かもしれないが、この場合は、誰よりも”やってやりたい”の反骨心が強いスカルが最も適役か。
「……スカル、横から昇って王冠奪いに行けないか？　さっきみたいに隙を作りたい」
即座にスカルの隣に寄って、小声で耳打ちをする。
落とすのは”アレ”だ。顎で目標物を伝えて、目線でルートを伝える。
鴨志田の絶対的アドバンテージも失われ、体力的な意味でのタイムリミットもじわじわと迫っている。平常心を失って、焦り始めているというのも目に見えている。
”やれるか”、と？　聞かなくても答えを知っているがな、と言わんばかりにニヤリと頬を上げて、確実に返ってくるであろう答えを待

つ。
「王冠……？　いいぜ、やってやんよ！」
「それでこそスカルだ。体張って食い止めっからさ、後は頼んだ」
バン、と。強く背中を叩いてスカルを送り出し、ソルジャーは前方へと繰り出して戦線へと復帰する。
スカルが減ったところで、鴨志田もそう簡単には気づかない。
文字通り彼らは”ゴミ”のような存在なのだから。アリが1匹消えたところで、人間はその存在を気にかけない。
追い詰められている。
その焦りがミスを産み、そのミスがまた新たな焦りを産み。攻撃にも粗が出てきた鴨志田が、右手をぐいっとあげて何かを呼び寄せる。
「アイツ、何するつもり……？」
「何考えてっか知らねぇけどよ！　これで終わりだ！」
”奴隷共、アレ持ってこい！”という鴨志田の言葉をトリガーに、鴨志田の近くにいたシャドウが何かを持ってくる。
砲弾のような大きな球体――――いや、王冠を打ち落とした時とは比にならない程巨大な、怪物サイズに仕立て上げられたバレーボール。
「現役時代にブイブイ言わせてた、必殺の――――”必”ず”殺”すスパイクだ！」
「ソルジャー！　危ない！」
――――まずい、前に出すぎた。
そう気づいて射程外に逃げようとするも、超人的なスピードを抱いているせいで急バックができない。
ならば直角に曲がるしかない、が。それも即座にやれ、と言われてもできる事ではない。
射程の差を埋めるために与えられたスピードが、ここに来て所持者に牙を剥く。
射程の弱点を殺すために生み出した、元から前線にいてクイック俊敏性ネスの差で距離を縮める作戦。これが裏目に出た。
「クソっ！」

一撃覚悟。
いや、一撃覚悟じゃ終わらない。このまま避けられなければ一撃で戦闘不能まで――――その予感を感じ取ってしまったとしても、逃れることを諦めずに体の向きを変えれば。
「ソルジャー！」
ソルジャーの背後から、ジョーカーのパンサーの呼ぶ声が聞こえる。
声が聞こえたと同時に、ソルジャーと鴨志田の身体に何かが与えられた感覚が伝わる。
「あぁ!? なんだぁ……これ!?」
「助かった！」
ジョーカーの防御力上昇（ラクカジャ）と、パンサーの攻撃力低下（タルンダ）。
その２つが即座に仕掛けられ、鴨志田の体に生じた違和感からスパイクの動作が一瞬遅れる。
避けられない事実は変わらない。それでも、このコンマ数秒があれば着弾点の中心から逃れることならできた。
「ぐあっ！」
着弾点から外れた、とは言えど。鴨志田にとっての大技をモロに受けてしまえば、そのダメージ量は相当の物になり。
衝撃で後ろに吹っ飛び、ごろごろと勢い良く数回転する。サポートがなければどうなっていたか。そう思いつつ、切り口から漏れた血を拭う。
「大丈夫か!? ソルジャー！」
「そりゃ痛いけどな……部員が今まで食らってきた痛みを考えたらまだ立てるさ。モナ、回復を頼む」
「無理だけはすんなよ……！」
モナから回復（ディア）を受け取って、軍服に付着した砂埃を叩き落とし、顔を強く両手で叩いて気合を入れ、ゆっくりと再び立ち上がる。
鴨志田の被害に遭ってきた部員の事を考えれば、スパイクの痛みなんて忘れられる。
”お前らはもっと苦しい思いをしたんだろう?”という思いが、不屈

の闘志を抱いたソルジャーを何度でも立ち上がらせる。
「チッ……仕留め損ねたか……」
「……これでいいんだよ、これで」
準備のできたスカルに対する注意は消え、ヘイトがソルジャーに向かったのもあり今の鴨志田は完全な無防備。
跳べる。そう判断したスカルが身体を張って止めたソルジャーに笑みを向け、ぐん、と低い体勢を取る。
「ん？　一匹、減ってる？」
「よく耐えたなソルジャー！　後は任せとけ！」
バッ、と横から王冠目掛けて飛びつき、スカルが鴨志田の頭にある王冠を落とす。
王冠が床に落ちてゴロゴロと転がり、〝何をした!?〟と鴨志田が上を見上げた瞬間に。
「ナイスだ！　スカル！」
――もう一度叩くぞ！
威勢よくそう指示を出して、ぐんと足を踏んで駆け出そうとした瞬間。
「……あ？」
ぐらり、と。急に、ソルジャーの視界が歪む。
あ、これ不味いやつだ。総攻撃に参加したいけど参加したら多分ぶっ倒れる、と。
思っていたより何倍も〝ヤバい〟状態であることを察して、後の全てを怪盗団に託しつつ。
「わり……ラストは、任せた……」
右手を前に出しながら、ふらりと後方に倒れ込んで。
総攻撃を仕掛ける姿を最後に、怪盗団の勝利の音を最後に。
神風の如き獅子奮迅の活躍を見せた軍人は、深い眠りについた。

1―9【Ｃａｐｔｉｖｅ　ｂｉｒｄ】

「……悪いな、締め悪くって」
「怪我はないか？」
「全然。頭も打ってないしな。触ってみるか？」
ジョーカーに肩を貸して貰い、気絶から覚めたソルジャーがゆっくり立ち上がる。
――――結論から言ってしまえば。彼が倒れた多くの原因を占めていたのがスパイクだった。
ただ、それでも不明な点がいくつか存在する。
モナの回復（ディーア）で体力を回復したというのなら、気絶なんてしないんじゃないのか。
気絶するにしても、鴨志田のスパイクを受け止めた直後でないのか。
パレスの主特有の攻撃なのか、という考えも浮かんだが。結局、これが一番丸いだろうという事で、ソルジャーはジョーカーと仮説を出してみた。
「どうやら、何でも治せるのとは違うみたいだな」
「多分だけど、内部でダメージが蓄積してたんだと思う。回復を貰った後は痛みが全くなかったんだけど、倒れたのはそれが原因だろうな」
「跡は消える。見た目の上では問題ないようには動ける。ただその後に全開を出せるかと言うと……」
「そういう事だな。知らぬ間に体力を消費してて、知らぬ間に限界を迎えてた。これだろ、正解は」
回復は万能じゃない。
モナの回復にしろ、ジョーカーが医者から貰ってくる回復アイテムにしろ、弱点の存在しない無制限回復ではなく、ソルジャーが食らったダメージを完治できないようであった。
――――いや、正確には”完治できていた”。実際、あの時のソルジャーは再び戦線復帰するつもりでいたのだから、肉体的に無傷だっ

たのは事実だった。
攻撃を受ければ受けるほど、ダメージは蓄積されていく。
しかし、一時離脱となる程のダメージを一撃で受けた分、回復したとしても回復ができない致命傷――――言うなれば、体力の上限を削る攻撃を受けた。
攻撃の指示出し、前線を張ることで生まれる回避意識、かつメインアタッカーとしての役目。これらを同時並行で行っていたのだから、無尽蔵のスタミナでも体力がどんどん削られていく。
回復を貰ったからといって、常にマックスパワーを発揮できはしない。無論動けることには変わりないが、オーバーヒートが来てダウンしたという事なのだろう。
「……鴨志田は？」
「パンサーが説得して消えたらしい」
「消えた、か……説得して消えたのなら帰ったんだろ、自分の所に。殺すのは御免だったからな」
ソルジャーが気絶していた間に鴨志田は消えた――――というよりかは、本人の元へ、現実へと帰った。
”罪を償え”。そう投げかけられた鴨志田は自責の念に襲われ、消滅するようにして光の粒子へと変貌した。
とりあえず、一件落着と言えよう。言い換えれば事が全て終わったとも取れたからか、タイミングを計ったようにしてジョーカーがある提案をする。
「戦術は俺が出そうか？」
「……いや、良いかな。俺が動きたいように動けたし、何より最後のは純粋なミスだし。ぶっつけ本番の割に上手く動けたろ、アレなら」
回避も攻撃も単独で行えるのだから、戦術も出して自分が動きやすいように動く。
理に適ってはいる。理に適ってはいるが、それでもあまりにも役目が多すぎる。それでも、これの方が楽ではないが、これの方がやりやすい。
「俺じゃ勝てない相手もいる。その時に大事になるのがジョーカーな

んだから、俺は何でもできるジョーカーを立てるように動く。後は俺が動きやすいように……かな」
「頼ってくれよ、俺を」
「そ、頼ってる。だから俺もお前も、出来る限り動きやすくするために動いてんだ」
　ドン、と右こぶしでジョーカーの胸を叩いて、ソルジャーは言う。
「よろしく頼むぜ。俺も頑張るからよ」
「ああ、任せろ」

我は汝…汝は我…
汝、ここに新たなる契りを得たり
契りは即ち、
囚われを破らんとする反逆の翼なり
我、「調整」のペルソナの生誕に祝福の風を得たり
自由へと至る、更なる力とならん…

「歩けるか？」
「横になって大分スッキリしたしな」
「オマエら、逃げるぞ！　パレスの主が消滅したから直にここも崩壊する！」
「……あ？」
　――今から走るのか？
　そう疑問を浮かべる前に、危険を感じた体が本能で走ることを決意していた。

―４／２１　放課後―校門前―

「聞いてねえぞ……パレスが崩壊するなんてよ……」
「死ぬ……もう少し遅かったら死ぬ……！」

「ワガハイは上に乗ってただけだからな。疲れてないぞ」
「自慢できないからな、それ」
あと一歩遅ければ、冗談抜きで死んでいた。
その上、冗談抜きで鴨志田戦よりもきつかった。体力の限界ギリギリまで削がれた上で全力ダッシュを行うのは、いくら超人的な身体能力があるとはいえ厳しいものがある。
悠長に蓮のバッグの中にいるモルガナ以外は全員膝に手を付いているが、その中でも一早く回復した竜司が、ある異変に気付く。
「ナビ見てみろ！」
竜司の言葉につられ、全員がスマートフォンを取り出す。
思えば、『現実世界に帰還しました』という機械音声も流れなかった。出入りする度に流れていたアナウンスがないというのに気付くことができなかったが、それでもいざ気づけば違和感でしかない。
「目的地が、消去されました……？」
「本当だ……行けなくなってる……」
目的地が消去されました。その言葉通り、ナビに鴨志田に関するキーワードを打ち込んで検索をかけてみたとしても、ナビの結果は消去の一点張り。
本当に帰れなくなった。あの世界に忘れ物をしていたとすれば、二度と取り返せない。そして肝心なオタカラを忘れてしまえば――――という考えに至ったのは、鴨志田を説得した杏だった。
「オタカラは!?」
「これだ。王冠じゃなく、ここに帰ってきたらメダルになってたけどな」
そう言って蓮がポケットから取り出したのは、1枚の金メダル。
見れば、オリンピック優勝の時のメダルだとわかる。それと同時に、プライドも捨て過去の栄光を追い求め続けた結果、ついにはそれに縋るようになったなんて皮肉だとも理解して”しまった”
――――仮にも、アスリートの1人だったと言うのに。同情ではない、諦めの感情。それを含めて顔を苦くし、伯は言う。
「……ヤツの、オタカラがこれって事はさ。パレスにあったトロ

フィー同様、これが欲望の源だったって訳だろ？」
「ああ……ハクの言う通りだ」
「あの変態野郎、過去の栄光にしがみついてただけかよ……」
「でも、これで鴨志田は改心できたかもしれないんだよね？」
「あんだけ頑張ったんだからさ……改心出来てなきゃ困るな」
疲労もあるが、それでも空気は重い。
おそらく改心はできた。ただその上で、成功した確証はない。現実に帰ったと言えば聞こえはいいが、鴨志田の改心が悪い方向に進む可能性もある。
更に積み重なるのが、鴨志田のどうしようもなさ。過去の栄光を捨てきれず、未来志向になれなかった男の成れの果ての味の悪さ。それらが組み合わされば、達成感も薄れてしまう。
「胸を張って帰ろう」
そのどんよりした空気を脱する言葉を言うのは、怪盗団（雨宮）のリーダー（蓮）格。
「正解だったかどうかは分からない。ただ、それでも救った人はいる。竜司も杏も伯も、それ以外の被害者もだ。やれる事はやった、後はその時が来るまで待つだけだ」
「……確かにな。首謀者の俺らが悩んでてどうすんだ、って話か」
そのカリスマ性のある一言が流れれば、場の空気は一変する。
伯も、竜司も、杏も、モルガナも。皆が悩みのない澄んだ顔を浮かべ、失いかけていた達成感が戻ってくる。
「……ん、通知か」
ポロン、という音と共に伯のスマホにバナー表示がされ、通知の内容がある人物からのメッセージだと判明する。
「……先輩から？」
――話したい事があるんだけど、ちょっといいかな？
――渋谷駅の地下にあるカフェでコーヒーも飲みながら、だけど。
伯のスマートフォンに届いたのは、つい最近連絡先を交換したばかりの奥村からのメッセージ。

同時に時間を確認してみれば、示す時刻は１７：０２。大方屋上での野菜栽培の準備が終わったから、とりあえず渋谷にいないか連絡をしてみた、という事だろうか。
ぽつぽつと感想を送り合う履歴欄に残る、違和感の残る１つの誘い文句。
”何か話したい事”。話すだけなら顔の見えないこれでも良いだろうに、わざわざ対面で会うことを重要視した。そしておそらく、そこに何か意味がある。
「すまん。急用ができた」
「急用……？」
「カノジョか？」
「じゃない。……とにかく、それが終わったら後で連絡する。また何か伝えることがあればここに集まろう」
気晴らしのためか、それとも――
一抹の不安を感じながら、伯は１人路地裏の奥へと消えて行った。

＊＊＊

ゆらゆら、ゆらゆらと。
鉄製のマドラーをかき回せば、凪のように静まった水面に波紋が生まれる。
平静を崩されるような、今の心のありようと似たようなモノ。無事に集合できたは良いが、それでも相手の心の奥底は捉えられない。
切り出すべきか、切り出さないべきか。たがいに迷い、そして先に言を決したのは向こう側だった。
「例の、怪盗団の予告状みたいな物が貼られた時に、鴨志田先生と言い合う宮本くんを見ちゃって」
「……あの時のですか？」
大立ち回りはした――――というか、アレは溜まっていた鬱憤を晴らすために行ったという理由だし、別にする必要があったかと聞かれればなかったのだが。

それでも、何と言うか。流石に常識はあるので、”言い返してやったぜ”！　という気持ちよりは湧かない。”見られて恥ずかしい”の気持ちの方が強い。ただし言い返した理由は言わなければならないので、弁明はする。
「あぁ……アレは鴨志田先生が自分の事を犯人だなんだ、って証拠もなく言ってきたんで」
「私は話を聞いてたし、あの怒り方はちょっと……ってなったからそこは大丈夫なの。問題はもっと別でね？」
「別？」
「……疑ってはいないよ。疑ってはいないけどね？」
「……予告状関連の首謀者だって聞きたくて呼んだ、って話ですか？」
ピクリ、と体が反応するのを伯は見逃さない。
あれだけ校内を荒らした上で、更に何か手があるような素振りを見せて。それでもまだ”疑っている”の範疇で留めておくというのは、随分優しいようにも見える。
ただし真実は口が裂けても言えないし、いくら信頼を貫き通してくれた先輩だとはいえ、自分に残された手は逃げるの一択しかない。そう考えて逃げ道を探し始めると同時に、奥村がその理由を言う。
「退学しちゃうかもしれないのに何か手があるみたいだし、その手があれだったのかなって。やっぱりどうしても勘ぐっちゃって、気になっちゃったから……」
「すみません、詰めるように聞いちゃって。……ただ、自分じゃないですよ。退学回避ももうちょっとまともな立ち回りをするつもりですし。ただ、アレは事実ばっかり書いてあったので助かりましたけどね」
――すまん。竜司。
平謝りを心の中で一発かまし、とにかく自分は違うの一点張り。否定の逃げに徹した伯を見て、奥村は更に質問を重ねる。
「……宮本くんは、さ。心の怪盗団の存在を信じる？」
「いたら楽ですよね。自分が動かなくとも何とかしてくれそうなんで」

「そっか。……そうだよね」
はぁ、と。何か覚悟を決めたような、重みのある溜息を奥村がついて。
「……怪盗団が本当にいたら、私の世界ももっと変わるのかな」
「……え？」
まるで――――自分も被害者の１人である、とでも言いたげな発言を口にする。
いつ、どこで、誰が、何を、どのように。Ｗｈｙ以外の５Ｗ１Ｈを何も聞いていないからこそ、”先輩も鴨志田の被害に”という不安が頭を過る。
そしてその不安が頭を微かに過れば、反射的に口から出る。
「まさか……先輩も鴨志田に何かやられたんですか？」
「あっ、違うの。鴨志田先生に何かされたんじゃなくて。……貴方の事を信頼してるから、話そうかなと思って。誰かに話さないと、悩みが心の底で溜まっちゃいそうだから」
１回、２回。既に混ざり切ったコーヒーをマドラーでかき混ぜ、乱数調整のように心を落ち着かせ、タイミングを計れば。もう一度深い溜息をつき、暗い顔で奥村が事を話す。
「……私のお父様は、オクムラフーズって会社を経営しててね」
「オクムラフーズって……あのオクムラフーズ？　ハンバーガー店の経営を行ってる？」
「そう。……それで、実を言うとね。お父様は経営者として評価はされてるけど、経営方針だったり、まだ関わってない私でもわかる疑問が色々あって」
スマートフォンを取り出し『オクムラフーズ』と検索してみれば、様々な情報が伯の目に入る。
オクムラフーズ公式サイトに始まり、次に確認できるのは、オクムラフーズが経営しているハンバーガーチェーン店――――ビッグ・バン・バーガーの広告。ある程度上の方であれば公式サイトが並ぶが、伯の目に入ったのは、少し下にスクロールして出てくる”ブラック”の文字。

知恵袋やゴシップの記事であるため、信憑性は薄い。大手であればそういう黒い噂は絶えないし、よくある一記事に過ぎない。そう一蹴することもできたが、経営方針で不安なのはこれだろう、という推測もできてしまう。
「でも、経営方針の疑問なんて分からないと思う。私でもどれが正解かなんて分からないし、その……オクムラフーズの真実を知ってるのも私だけだし。だから、こっちは深堀するつもりもなくて」
「……こっち？」
まるで、もう1つ不信を抱く理由があるかのような。
まるで、本命の悩みはこちらだと言いたげな。
憂いの帯びた顔。その重みが透けて理解できてしまう程の重大さを感じ取り、伯はぐっと息を飲んでその内容を待つ。
「お父様は、私の事を娘として見てくれないの」
「……え？」
――自分のことを、娘として見てくれない？
俗に言うネグレクト。信頼している先輩にその可能性がたった数パーセントでもあると判明すれば、伯の顔はみるみる青ざめるように、そして不安を募らせるように目を開いてく。
「あっ、そんなに心配しないで。ちゃんとご飯は食べてるし、至って健康だもの。……少し語弊を招く言い方しちゃったけどね。お父様は、私の事を奥村の娘として見るの」
「奥村の娘……？」
娘として見てくれないのではない。
ただ、娘の事は”奥村の娘”として認識する。
奥村という接頭語が付属することで意味が変わる。それが表すのは、奥村という言葉のあるなしで変わる価値。もしくは、奥村という言葉に含められたブランド性。
そこに加わるオクムラフーズの裏側。ブラックという噂が絶えないのであれば、そこで更に足される従業員の扱いの悪さ。
（……あり得る、か？）
言わなきゃ何も始まらない。そう踏んで、真実を確かめるために仮

説を提唱する。
「自分の娘すら、のし上がるための道具として見てるって事ですか……？」
その質問に対する返答は、ない。
ただ――――それでも、言いたくないだけで。父親との関係は良好でありたいが、現実はその理想と乖離している。言ってしまえばそれを認めてしまうから、口に出さない。
自分に価値があるとわかっているからこその”奥村の娘”。
それが示すのは、使える物はなんでも使う貪欲さ。たとえそれが血の繋がった娘であろうと、それが上昇の鍵になるのであれば問答無用で利用する。
（パレス、あるんじゃないのか……？）
本人の欲望が大きくなって、心の在り様として形成されるのがパレス。
その欲望が善悪関係ないかどうかはまだ不明だが、少なくとも伯には鴨志田にはあったという前例がある。
悪に振り切れていればいる程できている、という可能性。善の心があるかどうかは、自分の娘すら利用する野望が全てを示している。
「怪盗団の予告状に『お前の腐った心を頂く』って書いてあったでしょ？　……怪盗団が本当にいたら、お父様との良好な関係が手に入るんじゃないかな、って。そう考えちゃうの」
パレスの所在。救いの手。まだ残る廃人化の可能性。
決定権が自分の外側にあると理解しているからこそ生じる、揺れる考え。俺がこうしたいからこうするとはできない、自分以外の要因が発する深い霧。
廃人化の可能性は拭えない。だから、ここで”やる”とは言えない。
先輩がどう思っているかはわからない。だから、独断での決定はできない。
改心に成功したとしても、どのような処遇になるかもわからない。もしかすれば、先輩の望まない形になる可能性は充分にある。

それは理解できる。ただそれはそれとして、この問題を放っておく訳にもいかない。
「……先輩の、お父さんの名前」
「……え？」
「先輩のお父さんの名前です。それだけ教えてください」
急がば回れ、善は急げ。
どっちもどっちの選択肢。それでも、止まっていられない。その真実だけは追い求めたく、存在するかしないかだけの答えは知りたい、という選択を伯は取った。
疑われようが、どうなったって構わない。ただ鴨志田の改心の結果を見た上で、先輩がそうして欲しいと願うのであれば――――その”信頼”と”覚悟”には答えなければならない。
「えっと……”奥村邦和”って言うんだけど。お父様の名前が知りたいだなんて、急にどうしたの？」
「少し気になっただけです。……色々調べることで、何か役に立つかもしれませんから」
やるしかない。
与えられたそれに対応する覚悟を胸に、伯は1杯のコーヒーを楽しんだ。

―4／21　夜―オクムラフーズ本社ビル前―

――――結論から言ってしまえば。
『奥村邦和』でナビに検索をかけ、ナビが出した答えは『候補がありました』だった。
つまり、彼女の父親がパレスを所持しているのは確定し、尚且つ彼女が打ち明けた話も”ほぼ”真実となる。
伯としては、先輩には世話になっているのだから救いたい、という気持ちの方が圧倒的に強かった。
取り引きの関係を結んでいるのもそうだが。生徒のほとんどが鴨

志田を支持していた中、彼女だけが『違うと思う』と真実を見抜いたことが決め手となった。
先輩は、自分を信じた。
ならば、その想いに応えるしかない――――という、一種の恩返しのようなものが彼を突き動かしていた。
本社ビルに来た理由は、鴨志田と同じように”権力の象徴”として見ているのではないか、という思惑から来たものだが。
これがどうやら正解であったらしく、既に伯は『奥村邦和』『本社ビル』の2つのキーワードを手に入れていた、のだが。
「……まったく見つからないな」
後1つ――――『本名』『歪みの場所』『歪みの象徴』の内、歪みの象徴が思いつかず、パレス特定作業が難航していた。
無論、これは特定した経験が少ないからというのもあるが。権力の象徴は周りから見てもわかると言えど、どう見ているかは本人の思考の面が強いから、というものが難航している理由の大多数を占めていた。
この日までにやらなければならない、という制限時間が用意されている訳ではないが。パレスを所持しているのは確認できたのだから、1日でも早く実態を確認したい、という思いに駆られていた。
「落ち着け……本社ビルってのは出たんだ、本社ビルから順に辿れば出てくるかもしれない」
オクムラフーズの権力の象徴。
まぁ、それは。大まかに言えば本社ビルだが、もっと具体的に出すのならば”ビッグ・バン・バーガー”だろう。
日本最大のハンバーガーチェーン店。その名の通り、店内も宇宙船をモチーフとしているといった遊び心もある有名店なのだが。
連想ゲームの取っ掛かりとするのであれば、ビッグバン――――つまるところ、銀河系から広げた方が良いだろう。そう思い、伯は思いついた言葉を口に出していく。
「……ビッグバン……爆発……銀河系……宇宙」
――――候補が見つかりました。ナビゲートを開始します。

そう、イセカイナビが発したのを聞き逃さなかった。

「……は？」

候補が見つかりましただなんて、そんなはずはない。いや、だって

――

そんな思考を強引にシャットアウトするかのように、伯を頭痛と眩暈が襲う。

その痛みが、『そんなはずはない』と疑っていたキーワードが真実であることを理解させる。

（嘘だろ!?）

一瞬の苦しみに、一瞬の不快感。

〝それ〟が喉元を過ぎれば、彼を取り巻く世界は大きく変わる。

彼が見ていた、巨大なオクムラフーズの本社ビルは。

「……なんだよ、これ」

――強欲の『宇宙船』へと、姿を変えていた。

焦る。パレスの所在が確認できたとはいえ、鴨志田とは比にもならないスケールのこれが、奥村邦和の心の中であるとなれば、尚更。

予測は成功。結果も常識離れしてはいるが成功に近い。

しかし、しかしだ。ほとんど完璧に近かったその計画は、たった2つで借金を生んでしまう程の失敗によって崩される。

「えっ……!?　こ、これって……夢、なの……？」

――自身を尾行していた、奥村春に気づけなかったという〝失敗〟に。

そしてその侵入に、気がつけていないという〝失敗〟に。

1―10【Ａｄｉｅｕ】

最初は、ただの興味本位だった。
そこに一匙の違和感を覚えたから、こっそりバレないようについてきた。
お父様の名前を聞きたいだなんて、変だと思ったの。オクムラフーズの社長なのだから、検索すれば簡単に出てくるのに。宮本くんだって、きっと後でそれに気づいたはず。
これは推測の域を出ない、私の予想。
調べれば出てくることを聞いちゃうくらい焦っていて、いてもたってもいられなくなった。だからこうして、オクムラフーズの本社ビルの前に来ちゃったんだと思う。
ただの高校生がお父様に直談判しようとも、何も変わらない。
だって、実の娘の私ですら運命は変えられないのだから。いくら頑張ったって、宮本くんの手じゃ変えられない。
そうは分かっていても、聞いちゃったら止まってられない。何事にも妥協をしない、善意を向ければ何倍にもした善意を返すような人。
宮本君がそういう人だとは知っていたから、オクムラフーズの本社ビルに来ることはちょっとだけ想像してた、けど。
――何してるんだろう……？
巨大なビルの前に立った宮本くんは、ぶつぶつとスマホに単語を繰り返し呟いてるだけで、一向にその中には入ろうとしない。
だから、そんな疑問も浮かんだ。音声認識で単語を読み取ってるのかもしれないけど、その単語の内容は遠くて聞こえない。
だけど、どうしてだろう。
宮本くんなら、きっと。あり得ないはずの結末に夢を見て、けれどもそれに蓋をして。”もういいの”、と。そう言うために、彼の立つ場所へ歩もうとした瞬間。
「……え？」
私の世界は、ぐにゃりと歪んで――

―４／２１　夜―オクムラ・パレス―

――――開いた口が塞がらないという諺は、正に今の彼のような状況を指すのだろう。

ぽかん、と大きく口を開けて。ぐぐっと首を上に曲げ、視線の先にある物を見つめて息を漏らす。

「……地球、だよな」

薄々、察してはいた。

ビッグ・バン・バーガーから連想を始めた以上、初めの方に出てくる単語は必然的に宇宙関連になるのだから。

故に『候補が見つかりました』と案外早い段階で出た時点で、戸惑いや驚愕こそあれど、”受け入れ”さえしてしまえば何とかなるとは思っていた。

それでも、それでもだ。

目の前に映る星は、別世界とは言え先程まで――――というより、この１６年間生き続けてきた場所であるのだから。

理解はできこそ、納得はできない。奥村邦和という男の欲望の深さは、地球を飛び出してしまう程なのかと思ってしまう。

「……じゃあ」

――――そんな男に囚われている先輩はどうなる？

底の見えない欲望が露見したことで露になる、その欲望に支配された彼女の姿が、伯を焚きつける。

鴨志田とは比にならないスケールのでかさであろうと、相手が業界のトップであろうと。

たかが１人の教師と比較することが烏滸がましい。そう思うような人物であっても、やる事はハナから変わらない。”救う”と決めた時点で、同時に覚悟も決めたのだから。

進もう。そう強く思い、足を踏み出した時点で、伯は違和感に気がつく。

「ここ……パレスなんだよな？　だったら、なんで？」

何かが、おかしい。

手袋は装着されておらず、腰にあるはずの短剣を抜こうとしても掴むことができず。ならばもう1人の自分をと思うも、反応すら見せず。

まさか。一抹の不安を感じ、目に覆いかぶさっているはずの仮面に触れてみようとすれば。

「仮面がない……？」

その違和感が、本物である事に気が付くだろう。

覆いかぶさる仮面を取ろうとすれば、その手は滑稽なように空を切る。スカ、という擬音が似合うような動きを見せた直後に、伯は確信して服装を眺める。

――――秀尽学園の制服だ、と。そう理解するのに、さほど時間は必要としなかった。

つまり、これが意味するのは。

「このままだと危ないかも……な。シャドウに出会っても対処ができない」

この世界での主戦力となるもう1人の自分が使えない以上、シャドウと遭遇するというのは、死を意味することとなる。

故に、引くべきか、と。パレスに侵入できた時点で収穫なのだから、とりあえず対策を練るしかない。敵に遭遇しても対処ができないのを考えれば、それは至って普通の考えだった、のだが。

（……だったとしても、だ。俺だけ引くなんてのはできない）

宮本伯という男の中に、引くという選択肢は存在していなかった。

とはいえ、それでは若干語弊がある。いくら覚悟を見せられたからとはいえ、ペルソナを持っていなければどうなるのか――――それは痛いほど理解しているし、引くのがベストな事も重々承知している。

先輩の状態を聞いて、黙って逃げ出すなんて選択は取れない。

このパレスの事を何も知らずに退散する。そういう訳にも行かない。

何でもいい。少しだけでもいいから、何かしらの情報が欲しい。

「……下見だな。その程度ならまぁ、大丈夫だろ」

ある程度のリスクならいくらでも払ってやる。その代わり、危険だ

と判断した瞬間にこの場所に全速力で戻ってくる。
先輩が歩んでいる以上、俺も止まってられない。そう思い、自動ドアに手をかざして彼は下見を始めた。

＊＊＊

「経営方針に疑問があるって言ってたけど……疑問じゃ収まらないだろうな、あれを見たら」
下見程度で向かったとはいえ、得られた情報はかなりの物であった。
進んで1分もしない内に認知存在の確認ができ、シャドウとの鉢合わせもなく情報を得られたことはかなりの収穫と言っても良い。
たかが認知存在に出会っただけで。そう思うかもしれないが、たったそれだけで鴨志田と奥村の違いを知ることができた。そう聞けば、かなりの収穫だと納得するだろう。
鴨志田のパレスにいた認知存在は、良くも悪くも人間の形を留めていた。
まぁ、だからと言って。それで鴨志田が善人になる訳ではないのだし、強いて言うなら鴨志田が誰かをそう見ていた、という事しか分からないのだが。
奥村のパレスにいた人間は、全員ロボットの姿をしていた。
役職ごとに色で統一され、合言葉は『シフトは厳守』『嫌ならやめろ』――という事からわかるように、その認知先は嫌でも”従業員”になるだろう。
鴨志田の時の杏や、バレー部部員に当たる存在だとは理解出来たが。奥村から見た社員の姿があれなら、奥村は社員のことを替えが利いて、死ぬまで働かせることが出来るロボットだと認識しているという話になる。
そういう思考に行きつくのは順当であり、あの世界を見た誰しもがそう思うだろう。
「……先輩には悪いけど、ブラック企業って言葉がお似合いだな、あれ

だと」
世話になっている先輩の父親だとはいえ。流石に擁護はできない実態に目を背けることはできない。
――――パレスに潜入して、あの惨状を目の当たりにするまでは、そう思っていた。
強欲の宇宙船からの脱出というのは、奥村の改心を意味する。
となると、鴨志田に行った事と同じ事をすれば良く――――ルートを確保し、予告状を出し、オタカラを獲得する。この3ステップさえできれば、彼女の願いは成就する。
一見問題はなさそうに見えるが、大事なのは奥村の欲望が消えた後であり。伯は、そこを一番懸念していた。
「……改心を行ったら、先輩に”罪人の娘”ってレッテルが貼られるかもしれない」
改心で得られるのは、永遠の救済ではない。
当然、その救済には代償も付属品として付いてくる。特に言えば、改心先が肉親である彼女は、それがかなり顕著に現れるだろう。
奥村春は、オクムラフーズの社長の娘である。その情報を伯は知らなかったが、もしかしたら知っている人はいるかもしれない。いくら隠し通そうとしたとはいえ、隠し通すというのは流石に無理がある。
改心のレベルがどれ程かはわからないが、罪を自白するというのはまず間違いない。
それが『ごめんなさい』で済む程度の自白であるならまだしも、改心によって暴かれる実態はその程度では済まないだろう。
労働基準法の違反。この時点で法に背いている以上、まず無傷でした、なんて事はない。噂が広まっていれば、奥村春に”罪人の娘”というレッテルが付く可能性すらある。
改心前の仮初の姿を取るか、改心後の本物の姿を取るか。強い彼女であれば、まず後者を選ぶだろうが。
それは自分が選んで良い話ではない、と伯は理解していた。自由への旅立ちに対し払う対価は”一生拭えないレッテル”。それを他人が決めて良いはずがない。

「パレスだったり改心方法だったりを話そうにも……どこから話せば良いのか分からないからな」
何から手を付けるべきか。それを即興で考えるも、他人の人生が懸かっている以上、その答えが一朝一夕で出てくる訳がなく。
「……帰るか。帰り道にシャドウがいないって保証はないからな」
帰ろう。そう決意したのは、ただこれだけの理由ではない。
帰るか、という言葉が出るまでにかかった空白の時間。まるで、何か思い当たる節があるような空白。
帰り道にシャドウがいないという保証がないのは、そう。
ただそれでも、この先の曲がり角を直角に曲がればいいだけ。
スタミナはともかく、通常シャドウであればスピードはほぼ互角。マックススピードを出せるのは精々６秒だが、６秒もあれば５０ｍ、自動ドア２枚は開けられる。
認知存在を見る限り、厳重警戒の様子もない。となれば最悪のパターンは、巡回シャドウに見つかった場合のみ。
自分のみなら逃げられる。
そして自分のみでしかないはずであるのに。
なんだ、この妙な胸騒ぎは。
「……万が一、だ」
――その万が一、が起こらない保証は？
オクムラフーズの本社ビルに辿り着くまで、一度も後ろを振り向かなかった。つけられているという想像すらしなかったから、最悪のパターンが発生していることの否定すらできなかった。
９９で起こっていなく、１で起こっている。確率としては、その程度のもの。しかし、好奇心は猫をも殺す。それは、杏の時のアクシデントで重々理解していたはず。
否定。否定。時たまの不安。
「……じゃあ」
――先輩が俺の後ろをつけてないって証拠は？
「っ……！」
嫌な予感がする。

予感。心配事の９５％は起こらないと言うが、それでも起こる可能性は０ではない。しかも注意散漫で取り逃したというのなら、確率は更に跳ね上がる。

いるな。いるな。いるな。そう念じるようにして前傾姿勢を取って加速をして、目的地までの距離を一気に詰める。

ぐっ、と右に体を傾け、すぐさま自動ドアを開ければ――――

「あっ……宮本くん！」

「来た方向に走ってください！」

「えっ!?」

――――悪い予感というのは、当たりやすい。

オカルトのようではあるが、それはきっと、多分。神のイタズラのようなモノであるのかもしれない、と伯は思っていた。

だからこそ、発声の準備を。

自動ドアの向こうに迷い込んだ先輩がいるかもしれない、という限定的なシチュエーション――――最悪のパターンを想像をした。

発声。”ここにいるぞ”と伝えるシグナル。

即座に行動しなければ、居場所がバレる。しかし悠長に一からシステムを説明してという遅い行動をしなければ、理解もできずに混乱する。

２０秒を取るか、５分を取るか。パレスの主にとっての重要人物が紛れ込んだ場合、どうなるかというのは嫌という程知らされた。から、直ぐに逃げ出せる方を選んだ。

鬼気迫る怒号。それを聞いた奥村も、不可解な場所に連れ込まれた上で混乱した頭で理解する。

従わなければ、と。

「後で説明します！　まずは、ここを――――」

出てから、と。

２枚目の自動ドアを開けると同時にそう言おうとした瞬間、喉元にナイフを突きつけられたように発声ができなくなる。

「……最悪だ」

――――しかし無情にも、悪い予感は更に重なる。

あの怒号がトリガーとなったか、それとも〝全て見られていた上で、仕留めるのを待っていたか〟。どちらかは分からないが、どちらであろうと最悪なのには変わらない。

「その姿……お、お父様……なの、ですか？」

そして――――よりにもよって、出会ったのはパレス（奥村邦和）の主。

肌の色は薄橙とはかけ離れており、真っ青になっている。更には宇宙服のような服を着込むそれは、正しく宇宙映画の悪役といったようなモノ。

――――何故、そのような姿をしたお父様が、ここに。

現実の姿とかけ離れた父親の姿を見て、何も知らない奥村の顔に動揺が浮かぶ。混乱した頭が許容量をオーバーしてショートしたのか、同時にふらりとした眩暈が彼女を襲う。

「……アンタが先輩の父親か。見たよ、さっき。オクムラフーズのホームページに乗ってたさ」

「まさかネズミが入り込んでいるだなんてな。春が侵入したと聞いて構えていたが、その上賊まで釣れるとは」

「その割には随分と顔色が悪そうで。たかが1匹のネズミに怯えてるのか？」

幸いなのは、奥村邦和以外にシャドウがいない事か。しかし指を鳴らせば彼の指示でシャドウなんて何体でも出てくるだろう。1匹（宮本伯）のネズミの命も、彼の掌の上にある。

（考えろ……わざわざ護衛シャドウを送り付けてこなかったって事は、やり方次第じゃ先輩だけでも逃がせるって事だ）

例えば、そう。奥村の娘として見ているのであれば、自分の娘に価値があることも理解しているはず。

シャドウ奥村の考えは奥村の心に属しているのだから、何があろうと待ってさえいれば、奥村の娘だけは確実に逃がす。機を待てば、確実に。

「……自分の娘すらも道具として扱う。とてもじゃないが、人の心があるとは思えないね。大企業の社長になるための対価がそれだとしたら、俺はこうはなりたくないな」

「情だの仁義だのは敗者……お前のようなネズミが発するような言葉だ。蹴落とす冷徹さこそビジネスなのだよ」
「そうか。……で、どうなんだ。血の繋がった娘に愛情が注げないのは」
「そんなもの知るか……私が上へ上がるために払わなければならない必要な犠牲、春はただそれだけを遂行すれば良い事だ」
「人の心がないね。流石大物界の小物だ。格が違うよ、格が」
ヘイトが集まれば集まる程、戦闘が速まって逃げられる可能性は高くなる。
叛逆の心が目覚めてさえいれば、シャドウとの戦闘でも戦えるには戦える。それでもパレスの主と相対して服装が変化しないのは、本気で取るに足らない雑魚だと思われているからか。
（好都合だ。俺に反撃の手段がないと思い込んでる）
――――傲慢でいてくれてありがとう。
心の余裕が生んだ、決定的な隙。更にツキが巡ってくれれば、出されるシャドウも限りなく少ないかもしれない。
自分の娘に利用価値がある。とすれば、抹殺する上で万が一のフレンドリーファイアは起こしたくない。最大でも4、5体と見て、もしかすれば。
風向きは変わりつつある。
ただ、それでも。どうしても、理解ができない。ただ1人混乱して置いて行かれている奥村が、やっとの事で平静を取り戻す。
「……お父様、は。〝私〟を、どう……見ているのですか？」
「さっきも言っただろう。上へ上がるために払わなければならない必要な犠牲だと」
「そうではなく！」
「そうもこうもあるか。お前はお前の使命を果たせば良い。それ以外は何もない」
愛情の欠片もない、切り捨てる言葉。
聞きたい事はそれだけか。やれやれと言った目で、どうしようもない者だと吐き捨てれば、奥村邦和が指を一度鳴らす。

空間を切り裂くようにして産まれたのは、先程確認した社員ロボット――それもたった一体でかつ、階級で見れば下寄りであろうロボット。
「何もできん賊は殺し、春は殺さず外にでも出しておけ」
それだけ残してもう一度指を鳴らせば、異空間を通るようにし、シャドウ奥村の体が粒子状になって何処かへと消えた。
確実に逃がすことはできる。
ただ、限りなく安全な段階で逃げることはできなくなった。飛び火した攻撃が当たる可能性は否めない以上、”どうやって守るか”に思考はシフトする。
（どうやって守る……!?）
おそらく、自分には問答無用で攻撃が飛んでくる。
ただし、話の素振りから自分以外には飛んでこない。
不幸中の幸いなのは、本気で取るに足らない相手とも思われた上で、抵抗手段もないと思われているためか、配置されたシャドウも一体――それも、通常より少し強い程度の物だった事。
大型ではない。つまり、純粋な力比べで勝てる可能性すらあるという希望の芽が生まれた。
極論ではある、が。シャドウ奥村の口から『春には手を出すな』という命令が出た以上、このロボットのターゲットは限定される。
つまりは、思考の否定になるが守らなくてもいい。逃げ出すまでの隙を生んで時間を稼ぐという名目がある以上、こっちは逃げ出すまでわざわざ攻撃しなくても良い。
先輩を避難させて、とにかく自分は回避に徹する。後はＰＫの要領で、持ち前のスピードで横を突っ切って逃げる。それが己のやるべき事と理解した瞬間に――”ソルジャー”の服装が大きく変わる。
「えっ……変身した!?」
「離れて攻撃を振った瞬間に逃げてください！　絶対に元の世界に戻れますから！」
「宮本くんは!?」
「何とかしま――」

す、と言おうとした瞬間に。
鴨志田パレスの大型シャドウと同等――――もしくはそれ以上の猛スピードで、雑魚シャドウが距離を詰める。
目で追いついてはいる。ただし考えられない。
鴨志田に一方的に押し付けた、俊敏性の差。それをいざ押し付けられたとなれば、思考が停止する。ただし異常を察知した体から発する本能が、その事態を回避しようと働き始める。
訳も分からず短剣を抜いて、訳も分からず短剣を振るった。
びゅんと風を切る音と共に豪快に空振り、捨て身でしてきた突撃を受け止めずに躱す。そうしてまた相対すれば、額に滲む汗を握って既に荒くなった息を整えようとする。
（……いいや、違う）
――――俺が疲れてるんだ。
一度体力の限界に到達した上で、更に限界の先まで押しこんでいるようなモノ。
目では追いつけるが、体が追いつかない。万全であれば反応できていたのではないかと思わせるスピードが故に、運命の巡り合わせに後悔する。
――――こうなる事も予測できてただろ！
――――鴨志田との戦いで学んでなかったのか！
――――頭が回ってないじゃ言い訳にしかならねえよ！
どれだけ言い訳を並べようが、どれだけ自分を責め立てようが、結局は全て自分の判断が悪いに直結する。
捨て身特攻から立ち上がったロボットが泥のように溶け始め、認知存在からシャドウへの変形を始める。
「……勝って2人で逃げる。その約束は守りますから」
だから、先に逃げてください。
強がりの約束。その善意に、ただ1人の傍観者は何も答えることができなかった。

＊＊＊

覚悟が、足りない。
心を燃やすような覚悟。全てを投げ出し、無から始めても構わない覚悟。
関係は修復できるという甘い考えを捨て、お父様と向き合う覚悟。
その覚悟を、目の前で自分を守る貴方は持っている。
目の前で起きる全ての事柄が、何が何だか分からない。けど、あの奇妙な服を着たお父様が喋った事が、全て本心だという事はわかる。
貴方が示す”手”がこれなのも。
貴方が示した”予告状”がこれなのも。
全てが一本の線で繋がり――――貴方が”心の怪盗団”だという事も。
その全てが判明した。判明したからこそ、襲われる。
自分では何もできない無力感に。
自分だけでは出られない。現実をひっくり返すには、貴方を頼らなければならない。貴方を頼った上で、ここまで危険な目に遭わせなければならない。
「……下の、下ね」
1つ。ただ静観することしかできない、弱い自分に対して。
2つ。そんな事はあってほしくないと現実逃避していた、覚悟の足りない自分に対して。
3つ。それを乗り越えた上で止めるべき――――お父様の、考えに対して。
全てを、捨て去る覚悟。
鳥籠の扉を壊す最後の鍵になるのは、後戻りのできない決意のみ。
「私は……」
誰かに行方を決められるような、弱い旅路は捨て。
「私は……！」
誰かに価値を決められるような、醜いレッテルも置き去り。
全てを捨てて残ったのは――――父親に対する”叛逆の魂”のみ。
「私は、道を切り開く奥村春です！」

ようやく腹を決めたようね……宿命の家のお姫様。
貴女には、裏切り無しでは自由も無い。
それでも求めるというのなら、間違ってもダメ。
さあ……貴女は誰を裏切るの？

――――心はとうに、決まっています。

いいわ、その眼……これで本当の力が振るえる。
我は汝、汝は我……
美しい裏切りで、自由の門出を飾りましょう。

――――さようなら、お父様。
Adieu（ごきげんよう）

私はもう、貴方には従わない！

1―11【Ｃｏｄｅｎａｍｅ：Ｎｏｉｒ】

「……マジか!?」

隙を伺い、逃走を狙おうとする。

狙おうとして行動に移せば、初速の差で潰される。

延々と繰り返したイタチごっこで芽生えた、打開の芽。まさかペルソナに覚醒するなんて――――なんて考えすら浮かばなくなってしまう、救いの手。

これなら勝てる、じゃない。

これなら逃げられるの一貫した考えは、たとえどんなイレギュラーがあろうと変わらない。

後は一瞬の隙。１人だけでは不可能だったそれさえ生み出すことができれば、瞬く間にシャドウの横をすり抜けて脱出することができる。

逃げますと明確に伝えられたのだから、自分がすべき事は――――ペルソナを覚醒させた後は、肉体と精神のバランスが整い思考の回りが速くなる。それは春も同様の事であり、その一瞬の隙を生むために即座に銃を抜いた。

「撃ちます！」

「任せました！」

今までだったら、初速の差で潰され立ち塞がれていた。

しかし今なら、遠距離攻撃すら持たないソルジャーでは生めなかった”隙”が生まれる。信頼の共鳴とも呼べる最短の行動は、互いの考えがシンクロしたことから生まれた。

構えた銃――――グレネードランチャーをシャドウに向けて春が一発撃ち、そこに合わせるようにしてソルジャーが懐に入る。

懐に入って来た所をキャッチ、もしくは反撃での返り討ち。それを狙ったシャドウが砲弾直撃後に迎え撃とうとするも、ソルジャーを止められない。

正確に言えば、動きを捉えられない。グレネードの爆発が生んだスモークが視界を邪魔し、視認するのに一瞬遅れた。後は左右にフェイ

ントを振れば、確実にその奥に抜け出すことができる。
――風が吹く。
左脇を抜けると決め撃ったシャドウが捉えようとするも、ソルジャーがすり抜けたのは右側。そして抜けたと同時に急ブレーキをかければ、攻撃が常に遮断されている春も自動ドアへと向かう。
そして滑り込むようにして、２人はパレスの外へと脱出した。

―４／２１　夜―オクムラフーズ本社ビル前―

「な……なんとか、帰ってこれた……じゃなくて！」
何故、どうして、Ｗｈｙ。
言い方は多岐に渡れど、伯が聞きたかったこととしては大量にあり――やれどうしてついてきたのだとか、やれどうやって入れたのだとか。
想像はできるが、それは別として理由も聞きたい。何せペルソナを覚醒させてしまったのだから、それに応じてナビを持っている可能性も高い。説明をせずに放置するか、説明をしてちゃんと個人で行かないように忠告しておくべきかは、やはり当たり前だが後者の方が安全性が高い。
――でも貴方、単独で乗り込んで死にそうな目に遭ってましたよね。
それを言われてしまえば何も言い返せないが、それはそれでこれはこれである。だがしかし、だからと言って自ら死地に突っ込んだ身では何も言えない。
それが故に起こる沈黙。先に言いたいが、言える立場にいない。
そしてその沈黙を破ったのは、先程ペルソナを覚醒させた春だった。
「……その、宮本くん」
「……はい」
「宮本くん……嘘、ついてたよね？」

やっぱりか。
適当な誤魔化しだったのもそうだが、今の一連のパレス侵入でもう察してしまった。更に言えば、この上なく危険な作戦を、しかも単独で、他人のためを思って行っていた。
――――話してくれるよね？
圧。声質は怒っていないが、声質の圧が凄い。嘘をついたら殺されるだろうなという圧力で追い込まれ、伯は手を両手を上げて全てを話す。
「……はい、すんません。自分が怪盗団です。怪盗団なんて、名乗るのも恥ずかしいんですけどね」
「やっぱり……それじゃあ、あの世界は夢じゃなかったんだね」
「鴨志田を改心させようとした……んじゃなくて、したのもそう。鴨志田に対する仕返しの手はあの世界を使ったモノ。シラフで喋れるわけないでしょう、こんなの」
素直に全てを喋ったところで、結局は異常者だと思われるか。もしくは”そういう人”だと思われて、恣意的でなく距離を離されるか。
どちらに転んでも地獄。好きな地獄を選んでねではないのだから、話さないではなく”話せない”。こうして認知世界を知ってしまえば話すしかないから、今こうして話しているだけであって。
そしてその起こりえないイレギュラーのせいで知ってしまった、父親の本性。
知っていたかどうかで言われれば、薄々は知っていた。ただそれでも、血が繋がっている親族の醜悪な姿を見てしまった。
もっと正確に言えば、他人に見られてしまった。幸いだったのは信頼を置いている人に見られたことだが、それでも”見てしまった”当人としては、顔を苦くするしかない。
「……残念ながら、アレが先輩のお父さんの本性です。認めたくないかもしれませんが――――」
「いいの。……私もそこまで馬鹿じゃないし。現実は知ってたけど、認めたくなかっただけ。だからあそこまでストレートに言われたら、流石に認めるしかないよ」

そこまでハッキリと言われたからこそ、訣別の意思――――ペルソナを得ることができた。
迷いの断ち切り。自由の翼を手に入れるのであれば受け入れなければならない、伯だけでは得られなかった最重要の要素。
「先輩」
準備は揃った。
最後のピースになるのは、それを本当にしたいかという決意表明。そして2人でパレス攻略というのはどう考えても無謀であるから、内実の話を自分以外の他人に話せるかという覚悟。
富・名声・力。その全てを捨てて得た、たった1つの叛逆の心。それが決意表明となっているからこそ、伯は何も聞かない。聞かなくとも、事を進めることができる。
「明日、いつも通り屋上に来てください。自分も協力者……怪盗団のメンバーを連れて行くんで。もう遅いですし、話はまたそこでしましょう」
「うん、わかった」
そうして別れて、不安な事が1つ。
(……怒られるだろうな)
心配なのは、無茶をするなの言葉だけ。

―4／22　昼―屋上―

「俺は言ったな？」
「はい」
「頼れと言ったよな？」
「そうです」
「頼ってると言ったよな？」
「言いました」
「だったら頼れ、仲間を。1人で行こうとするな」
「……ごもっともであります」

前科者、野球部廃部の原因、陸上部廃部の原因、セクハラ教師と付き合っていると噂の女生徒。
それら4人が屋上で昼食を食べるという一般的な青春を行えているのは、そこに加わった先輩かつ社長令嬢のおかげでもあり。野菜栽培をするからという名目で屋上に乗り込み、誰にも聞かれていない所で認知世界の話に花を咲かす。
怪盗団の主将は説教をし、副将は説教を受ける。
残った竜司は”マジか”といった反応を見せながらパンにかぶりついて、女性陣は先輩後輩の関係を守りつつ女子トークに花を咲かせる。
「しっかしよー……大企業の社長がパレス持ちだなんてな」
「その……奥村先輩は大丈夫だったんですか？　入ったってことは、本音まで知っちゃったって事ですし……」
「春でいいよ。私だけ敬語を使われると堅苦しくなっちゃうから」
「んじゃよ、春はさ……本当に親父を改心させる気があるって事でいいんだよな？　鴨志田が謹慎を行ってっけど、あんな感じになっちまうんだぞ」
「いいの。その気がなかったらここに来てないから。宮本く……伯にも色々話したし、思えばその時から覚悟はもう決まってたのかも」
改心を施された鴨志田が取った行動は、まさかの自宅謹慎だった。
自宅謹慎という形ではあるが、少なくとも自己の判断で謹慎という形を取ったのだから廃人化はしていない。自責の念に駆られて謹慎を取ったという事であれば、ほぼ間違いなく改心は成功している。
ルート確保。予告状提出。オタカラ奪取。パレスの主の説得。まだまだ不明な事は多いが、とりあえずの一連の流れは明確になってきたとも言える。
「鴨志田と戦った次の日でも良かっただろう」
「それはそうです」
「頼ってるの言葉は嘘だったのか？」
「嘘じゃないです」
「ま、とにかく鴨志田の時と同じのをやりゃいいんだろ？　キーワー

ドも分かってんだし、明日にでも行ってみっか？」
「まだダメ。改心は成功したけど、鴨志田がちゃんと罪を自白してからじゃないとでしょ。どうなるか分かんないんだから」
「そんなに急がなくてもいいよ。お父様の心の中に入っちゃったからって、こっちの世界のお父様の様子は変わらないんでしょう？」
「変わらないぜ。影響があるのはこっちからあっちだけだ。カモシダだってそうだったし、心を弄られてもオマエら気づかないだろ？」
モルガナが蓮の鞄からひょっこりと顔を出し、それを見た春がモルガナを抱えて膝の上に座らせる。
どうやら春はモルガナを物凄く気に入っているようで――――しかし”モルガナは喋ることができる”という認知のステップを踏んでいないため、厳密に言えば春に届いているのは鳴き声だけなのだが。
『本当に喋れるんだ……』『モナちゃん、今なんて言ってた？』など、猫が人語を喋ることをあっさり受け入れ、割とどころか怪盗団の中でも一番順応性が高かったのが意外だった。
「春から悩みの内容を聞いたが、話せないのは理解できる」
「それは良かったです」
「そこ、ストップ。蓮も伯もそれ以上夫婦喧嘩をしない」
「そうだぜ。春はともかく、経験者組で潜ってんのは伯だけなんだからよ。聞きたい事は山ほどあんだぜ、違いとかよ」
「違い、な……」
あるにはある。が、パレス自体の構造は変わらない。
やる事は同じ。ただだからと言って、鴨志田の時と同じようなノリで行けばおそらく簡単にやられる。
結局は小物と大物の違いか。所詮学校の中の王様になれれば良かった鴨志田と、大企業の社長になるも未だ上を目指す奥村の向上心の違い。それが心の中にも表れているのなら、この違いも納得できる。
欲望の大きさとシャドウの大きさは比例する。
それがわかったのも収穫だし、その収穫もあったからこそ”今は無

理”という考えに至る。
今は善は急げではなく、急がば回れの時間。こういう考えは臨機応変にした方が良いというのは自明の理。
「……シャドウが強い。俺が疲れてたのもそうだけど、万全でも速さは同等で力はあっちの方が上。鴨志田と同じだと思ってるとまず勝てないな」
「伯で劣勢か……ペルソナを多く使える俺ならともかく、皆だと厳しいだろうな」
「鴨志田先生の……シャドウ？　と比べても強かったんだ。お父様の考えが見えるようで、ちょっと嫌だな……」
「じゃあどうすんだ？　鴨志田より強かったとしても、春のためにいつかは行かなきゃなんねーんだろ」
「私たちも強くならなくちゃ、って事だね。でもどこで強くなれば……」
「それはワガハイにアテがあるから安心しろ。ちゃーんと力試しができる場所は用意されてるからな」
「ならそこはＯＫ。社員ロボに対応できるまで潜るとして、後は攻める時期か……」
１０日もすればゴールデンウィークが来て、２０日ももすれば中間テストが来る。
モルガナが言う力試しができる場所で力を高めるとして、目安として大体１ヶ月後。５月２２日にパレスの攻略を始め、６月に入るまでにはオタカラを奪う。
奥村と接点がある春が言うには『まだ急がなくても大丈夫』らしく、鴨志田の時ほど急ぐ必要もない。とすれば、これができれば理想ではあるが。
「時期って言っても……正直、ゴールデンウィークは遊びたいだろ」
「打ち上げにも行こう。あのメダルは良い値段になる」
「ワガハイ、寿司が良いぞ！」
「んなもん、テスト期間に遊べばいいだろ。寿司は金足んねえから却下な」

「竜司だけだからね、それ」
「杏も成績わりーだろ！」
「竜司と違って英語だけは良いから！」
遊ぶ。テストを受けて爆死する。そしてまた遊ぶ。
鴨志田の支配下から外れたとはいえ、過去の行いやレッテル全てが許容された訳ではない。しかしそれでも、腫れ物扱い同然だったあの時と比べれば、確かに人並みの青春を受けるだけの権利はある。
はぐれ者のピカレスク集団。春を含めた全員が生きづらさに悩まされていたが故に、馬は合う。その心地よさを感じ取った春は、くすりと笑って楽しそうな笑顔を見せる。
「ふふ、ごめんね。こうやって同年代の友達と仲良くおしゃべりするの、したことがなかったから。屋上でみんなでご飯を食べるだなんて、憧れだったから嬉しかったの」
「確かに、社長令嬢ってなったら大変そうだしな……価値観もちげえだろうしよ」
「それもそうなんだけどね。……会社関連の方々との関りだと、もしかしたら何か思惑があるんじゃないかって思っちゃうし、そのせいかよく人を見るようになっちゃって」
「職業病と似たようなものか……」
「分からなくもないかも。モデルやってると、この人はこう考えてるんじゃないのかなって考えちゃうこともあるし……」
「だからね？　みんなと話してると、心が温かくなるの。本音で語り合える友人なんていなかったし」
居心地の良さ。
同法の絆と言うべきそれが、怪盗団の空気を良化させる。似た境遇を持った似た者同士が集まり、人並みの青春を謳歌する。
願わくば、この先もずっと――――そう思った伯が、話の結論をつける。
「んじゃまぁ、鴨志田が正式に退学を取り下げるまではとりあえず待機だな。飯は気楽だしここで食べよう」
「……ねえ、伯？　改心してもまだ退学の話は終わってないんだから、

もっと心配した方が良いと思うな～？」
「すみませんでした」
圧。圧が凄い。
お転婆お嬢様で血気盛んな性格ではないが、怒らせれば人一倍怖い。良くも悪くも怪盗団にはいなかった人物像をしていて、それが良いスパイスになっている。
――――怯えてばっかだな。
怯えさせた元凶でもある蓮がそう思い、持参のコーヒー（ジャマイカ産　ブルーマウンテン）を一口飲む。
「とりあえず、今度のゴールデンウィークに打ち上げをやろう。折角だし、春も来てくれると助かるんだが……」
「大丈夫。お金は気にしないで！」
「……流石だ。大企業の社長令嬢は違うな」
こうしてまた、怪盗団に新たな仲間が増えたのだった。

1―12【Ｐｕｂｌｉｃ　ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ】

―５／２　朝―秀尽学園―

「死んでお詫びします……！」

改心は、突然に訪れた。

蓮、竜司、伯の３人が退学する予定だった予定日の僅か１日前。朝にあった全校朝礼の場に、自宅謹慎を行っていた鴨志田が現れた。

現れたと言っても、その様子はかなりおかしい。

悲壮感漂う雰囲気を身に纏った鴨志田は壇上に登るや否や、自らが行ってきた全ての罪の自白を始めた。

女子生徒に対する性的な嫌がらせ。

部員に対する愛の鞭と称した体罰。

一部の生徒（退学組）に対する暴言。

それよりも過去の行い――――陸上部や野球部に対する廃部の要因となった事は何も話さなかったが、それでも大方。蓮が転校をしてからも継続していた事案に関しては、鴨志田の口から全て話された。

――私は……生まれ変わったんです。

――だから、全てを告白しようと思っています。

――私はこの学校を、自分の城のように思っていた。

――退学を言い渡した生徒もいますが、それは撤回します。

このつらつらと並べられた謝罪の後に、死んでお詫びしますの一言。

善人で慕われている”鴨志田先生”しか知らない一般生徒は当然として、裏の鴨志田を知っている蓮や竜司、伯や杏ですら困惑する。

退学を取り消し、今までの全ての悪行を自白し、鈴井の飛び降りに対する謝罪までさせ、土下座までさせた。

改心としては、これ以上のない出来だと言える。廃人化すらしていない、限りなく正しい形での改心。

（……春が心配だな）

ただそれでも、懸念となるのが２つ。

1つは同じ仲間でもある、春に頼まれた改心の心配。
奥村を改心すれば、これよりも大きな規模で謝罪会見が行われる。その結果降り注ぐのは、全ての悪名、レッテルを引き継いだ上で春が社長になるという事。
茨の道――――いや、もしかすれば道すら存在しない。その方向へと進ませるのは、他でもない自分ら。この鴨志田の現状を見て、揺らいだりはしていないかという心配。
そしてもう1つは、伯のみが抱いた心配。
(この”改心”の力……あまりにも大きすぎる)
人を改心させると言えば聞こえはいいが、これでは”人の心を捻じ曲げる”と何ら大差はない。
質が悪いのは、改心される側は何も干渉ができない点。その上その気になれば、廃人化――――精神の死を引き起こすことすら可能かもしれない、という点。
無論、死に繋がる廃人化は絶対に起こさない。改心に関しても、死亡を引き起こさないように確実な方法を取る。あの方法で改心が成功したというのは、鴨志田には悪いがある意味一番の収穫だったと言っていい。
ただそれでも、この”力”を別人が握った場合。仲間を救うなんて理由ではなく、ただ振る舞いたいというだけで力を利用する場合。
それらが起こる可能性は、決してゼロではない。
(とにかく、話し合いか――――)
むにゅ、と。
顎に手を当てて考えていた伯の頬に、後ろに立っていた生徒の指が突き刺さる。
意図的に行われたモノ。可能性として挙げられるのは同学年の3人だが、おそらく――――と思い、ゆっくりと後ろを振り向けば、立っているのは蓮だった。
「心配か？」
「どうしてだ？」
「顎に手を当てる。考える時の癖が出てたからな」

「そりゃな。世話になってる分心配だ」
覚悟は見た。その先に眠る本音も目の前で見た。
それらがあろうと、結局はこの惨状を受け入れられるかどうか。覚悟の重さは、自身の天秤にある”自由”の重りと釣りあうか否か。
心配性の伯とは対照的に、蓮は即座に話す。
「大丈夫だろう。ああ見えて春は強いからな」
「……ま、確かにそうか」
「帰るぞ。教師陣に難癖を付けられたくないからな」
「これで少しは生きやすくなればな。なんで野球部と陸上部の件まで話してくれなかったんだか……」
そこまで言って、我に帰ったように思う。
――それでも、廃部の原因となった事実は変わらないか、と。

―5／5　昼―有名ホテル―

「……なあ。パレスってよ、鴨志田や奥村だけじゃなくて、悪い奴なら誰でも持ってるモンなのか？」
「歪んだヤツなら誰でも持ってると思うぜ。探そうと思えばカモシダとオクムラ以外にもいるだろうな」
「どうしたの？　急に」
打ち上げ――もとい、鴨志田改心と退学回避記念パーティーが始まって早４０分。
程々に食事を楽しんでいた蓮、伯、春は未だゆっくりであるが料理に口をつけ、早々に肉料理とスイーツを制覇しようと目論んだ竜司と杏はノックアウト。
その他怪盗お願いチャンネル――おそらくバレー部の三島という人物が作ったであろう、改心を頼みたいという意を込めて投稿される掲示板のようなものがあるとも伝えられ、打ち上げも順調に終わるかと思われていた。
「さっきよ……蓮とトイレ行った帰りに会ったんだ。身勝手で、人を

見下してくるクソな大人によ」
「ハゲか」
「そのハゲっつーか……俺らなら、そんなヤツらを改心させちまえるんじゃねえか思ったんだ。鴨志田や奥村、あのハゲみてえなクソな大人をよ」
「……とにかく改心を行えば、それが誰かを救うことに繋がるかもしれないって話か」
「伯が言うみてーに、俺らの脚で見つけて改心させる。報酬なんてのはいらねえ。分かんねえけどよ……それがやれたらヒーローみたいじゃねえか、俺ら」
一度目の改心は自己防衛のために。
能動的に行った改心というのは、実質的に二度目のみ。ただそれでも、その能動的な改心は春に対する救いの手と化している。
悪事をもみ消す権力者や、警察では手の届かない大悪党。それら悪者もナビとペルソナの力さえあれば、改心による自白という方法で世に晒すことができる。
警察が介入できない、言わば〝どうにもならない〟悪党のみに対する無差別な改心というのは、確実に誰かを救うと言ってもいい。
怪盗団の存在が、その存在の悪行に対する抑止力になる。間接的に誰かを救い、それはまるでヒーローのようで。その竜司の意見に対し、春がまず賛成する。
「私はね。テレビに出てくる変身ヒロインに憧れてたんだ。いつでも誰かのために無償で戦って、自分も笑うような……その憧れに私がなれるのなら、私は竜司に賛成かな」
「私も……シャドウと戦うのは怖いけど、怪盗団のおかげで誰かが勇気付けられるのなら賛成」
「他でもない友の頼みだからな。……それに、いつかは訴えた男を見つけられるかもしれない。やるしかないだろう」
「ワガハイはオマエらについてくぜ。一蓮托生ってヤツだからな」
「後は伯だけだけどよ……どうすんだ？」
一歩間違えれば人を殺めかねない力。ただし正しく使用すれば、そ

の力は社会に対する絶大な希望となる。
　成功サンプルとして残るのは鴨志田。しっかりルートを確保し、しっかり説得して現実世界に帰るまで見送り、しっかりオタカラを奪って戻る。それさえできれば、まず失敗は起こりえない。
　ただし――――それでも尚、失敗した場合のリターンは計り知れない。手順さえ間違えなければ１００の確率で成功するが、有頂天になった場合には取り返しのつかないミスを犯す可能性すらある。しかし、それは注意散漫にならなければ起こらないのも事実。
　全員の視線が残り１人に集まる中、伯は口を開く。
「賛成だ。……ただし、絶対に個人行動はしない事。ヒーローになれるのはそうだが、一歩間違えれば殺人鬼になりかねない力だからな」
「伯が言うな」
「それは俺も思った。だからちゃんとルールは守るし、もしこの血の掟を破ったとすれば……」
「破ったとすれば……？」
「……思いつかない。そんなの作らなくたって、俺みたいに約束を破ろうとはしないだろ？　これでも信頼してるからな」
――――だから伯が言うな。
　若干。ほんの若干訝しむような目で、蓮が伯を見つめる。信頼してると言われたのに、協力の要請をされなかった。
　どれだけ謝られようが、納得はできない。許してはいるが、納得だけは――――という意が込められた目。
「よっしゃ、これで決まりだな！　……で、こういうのってリーダーが必要じゃねぇ？」
「怪盗団としての名前も必要だな」
「ワガハイか？」
「却下。モルガナはなんか違う」
「私は鴨志田先生のパレスを知らなかったんだけど、誰が活躍してたの？」
「ま、そうなったら蓮と伯の二択だろうな」
「俺にリーダーは似合わない。やるなら蓮の右腕、副将としての働き

だな」
「リーダーにすると暴走しそうだからな、無鉄砲な伯は」
「それもある。そしてそれは否めない。……ま、よろしく頼むぜ。リーダー」
「よっしゃ、それじゃあ次は怪盗団の名前だな！」
結局、怪盗団としての名前は〝ザ・ファントム〟になり、本格的に怪盗団としての活動が始まったのだった。

―5／5　昼―
?????―

「さあ、乗っていいぞ」
「おい」
「安心しろ。乗り心地は一級品だぜ」
「おい」
「どうした？　ソルジャー」
「おい」
「だからどうしたんだって！　ワガハイ、なんか変な事でもしてるか!?」
「しとるわ！　その見た目で無実みたいな反応をするな！」
ビシッ、とソルジャーがモナ――――ではなく、モナの声であろうものが内側から流れるバスに対し、指をさす。
そもそも、何故呼び名がコードネームとなっているのか。
これはごく普通の理由で、現在怪盗団がいるのが誰かの心の中であるから。と言っても、その誰かの心は奥村の心ではない。
彼らがいるのは、通称メメントス。
モナが現実で紹介していた、〝レベルアップができる場所〟。それが今いる世界であり、入る方法も他者の心に入る方法と同様で、ナビのキーワード入力欄にメメントスに入るための鍵を入れるだけ。
ただしパレスと違う点が２つ。
１つは、メメントスに入るための鍵自体がこの世界の名称――――

つまりは、メメントスだという事。
”本名”に”歪みの場所”に”歪みの象徴”。これら3つのキーワードが揃って初めて繋がるパレスとは違って、必要なキーワードはメメントスのみ。
怪盗団がメメントスに来た理由は、先程挙げられた怪盗お願いチャンネルにいた中野原という人物を改心させるため。
必要なキーワードがメメントスのみである理由は、至って単純。
なぜなら、この世界自体が”大衆の心の世界”であり”大衆のいる世界”であり、”そもそも歪みがあやふやで存在しないから”だからしい。
このメメントスから外れる程に強くなってしまった欲望の持ち主は、メメントスという枠を外れてパレスを形成する。
逆に言えば、中途半端な欲望の持ち主はこのメメントスに留まる。大衆の認知に埋もれ、欲望が爆発する寸前のままでいる。その欲望が爆発する前に、怪盗団が息の根を止めに来たという話である。
らしいと言うのは、モナも全てを理解していないからだとの事。
とにかく、ここには鴨志田や奥村のパレスのように、大衆にとっての認知存在であるシャドウが出現する。それを倒せばレベルも上がって対抗できるようになる。
――――じゃあなんだよこれは。
全員から向けられた疑いの目をいなし、モナはエンジン音を鳴らしながら質問に答える。
「どうやら、大衆の認知じゃ”ネコはバスになる”と思われてるみたいだぜ」
「納得できねー……」
「……モナちゃん、本当に喋れたんだ」
「じゃあ城から逃げる時に出しなさいよ！」
「無事に脱出できたからいいけどな……」
乗り心地が悪そう。なんか不思議。だったら早くに出せ。
そんな負の感情をうっすらと抱いていたメンバーとは対照的に無言だったジョーカーが、ドアを開けて運転席に座る。

「大衆の認知で左ハンドルなのか？」
「外車に対する憧れじゃねえか？」
「だったらここも自動ドアにするべきだっただろう」
「そりゃ嫌だな。ワガハイだって誰かにドアを開けられたいぜ」
――――何やってんだ、お前。
車になったモナとジョーカーのやり取りを見ていれば、ドアを閉め、ハンドルをグッと握って窓を開けたジョーカーが一言。
「行くぞ。中野原とやらをを倒しにな」
「……お前がリーダーで良かったよ、ジョーカー」

――――
――――
――――
――――

「すまなかった……もう、このような事はしない」
瞬殺。
その言葉が似合うような速度で、メメントスにいた中野原は怪盗団の手によって無力化された。
奥村パレスに乗り込み心身両方の面で成長したソルジャーや”ノワール”にとって、中野原は小物以下でしかない。
更に、何故かは分からないがアタッカー気質のペルソナ使いが集まっている。ガル系統を使いこなすソルジャーに、ジオ系統を使いこなすスカル。それだけでもパンクし過ている気がするが、重ねて銃撃系統とサイ系統を使いこなすノワールまで現れた。圧倒的な火力で粉砕するその姿は、何とも粗暴な怪盗団らしいとも言える。
「これで終わりです！」
「すっご……春……じゃないや、ノワールもノリノリじゃん」
「こういう変身ヒーローに憧れてたものだから、つい」
「どんどん社長令嬢っぽくなくなってくじゃねーか……」

一息ついたところで、膝をついた中野原にジョーカーとソルジャーが歩み寄る。
パレスと同じであるのであれば、この後に必要とされるのは現実世界へ帰るための説得。初仕事で廃人化だなんて笑えないのだから、尚更慎重にもなる。
まずは怒らせない。その上でストレスを抑え、締めは”もうそんな事するな”で締める。それを意識して、まずはジョーカーから話しかける。
「どうしてこんな事を？」
「執着心が止められなくなってたんだ……悪い先生に使い捨てにされてさ」
「いや、だからと言ってストーカーは……それはまあいいか。とにかく、大変だったんだな」
「許さない……俺は斑目を絶対に……」
「ストップ。何をされたかは分からないが、それ以上は熱くなるな」
悪い先生――――斑目。
名字だけでは誰だか特定することは難しいが、その”斑目”とやらに人生を狂わされ、濁った執着心が膨れあがり悪い方面に進んだ。
しかしだからと言って、中野原は赦せる存在ではない。罪状で見れば、中野原の罪はストーカーであり、自己で完結しない他人を巻き込んだ悪事だとも言える。
いくら”斑目”とやらの存在が大きかろうが、赦すことはできない。
ただし――――その大本を止めなければ、中野原と同じ道を歩んだ人物がパレスを形成する可能性がある、というのも否めはしない。
「斑目は……改心が必要だと思えるか？　自分の胸に聞いてみてくれ」
「……必要だ。俺のような人が出る前に、君たちの手で改心させて欲しい」
「約束はする。だったらその恋も止めるんだな」
「ああ……もう、この恋も終わりにするよ。沢山の人が犠牲になる前

に、どうか……頼む」
その顔は、憑き物が落ちたように澄んでいて。
自分と向き合い、暴走した欲望を取り除かれた斑目が、鴨志田の時と同様に粒子となって消え始める。
まだ斑目に対する怒りがあったかもしれない。本来は改心すべき人物でないかもしれないが、消える直前の中野原のあの顔を見れば――少なくとも、斑目が悪人だという事は伝わる。
「斑目、か……」
「でも、斑目なんて、どこの斑目だかわからなくない？」
「よくいる名字じゃないよね。斑目さんって、探せば案外すぐ出てきそうだし」
「ただまぁ、ナカノハラみてえな小物じゃねぇだろうな。パレスだって持ってるかもしんねぇぞ？」
「そっちの方が都合が良いんじゃねーの。だってほら、奥村の所に行かなきゃなんねえんだし」
「調べてみる価値はあるかもな……」
できれば、改心した後の中野原に会うことさえできれば最高なのだが。
ただし会おうと会えまいと、被害者に改心を頼まれたのだからやるしかない。判明している鍵は、斑目という名字のみ。
ただそれでも、次のターゲット（標目）は見えた。

Museum of Fiction
2—1【Counselor and Painter】

——丸喜拓人です。よろしくお願いします。
低音ボイスを披露した後に、名を名乗った男は勢いよく頭にマイクをぶつけた。

—5／13　昼—屋上—

「お前ら、結局行くのか？」
「”カウンセリング”か？」
——カウンセリング。
鴨志田の事件以来、生徒から不安の声が増えているらしい。そしてその不安の声を解消するために、カウンセラーを呼んだだとか。
表向きはそうだが、真実はまあ、ニュースにもなってしまったからその対応策を出さなければ、と考えて出した苦肉の策なのだろうが。それでもやらないよりやれを意識するあたり、まだまともなのだろう。
「でも、良い人そうだったよね、丸喜先生。親しみやすそうで良いかもって思っちゃった」
「ツッコミどころ満載すぎじゃね？」
名前は丸喜拓人。声の渋さとは真逆に抜けている点が多く、その点からも親しみやすさを感じる。
少なくとも、他人の心に寄り添うという意味では”善人”に当たるだろう。マイクに頭をぶつけるのは如何なものではあるが。
カウンセリングを受けるのも自由、受けないのも自由。
ただ例外として、鴨志田事件の被害者——春を除いた怪盗団メンバーは、更生の役割を込めて強制で受けさせられることになっている。

要は、そのカウンセリングに行く行かないかという話であり。行けと強制されているのだから行くのが当たり前だが、腐っても不良集団。行くか行くまいか、という相談をして結論付けようとしていた。
「俺はパス。テストも明日まで残ってるからな」
「優等生かよ！」
「優等生だが？」
「そうだった……伯はちゃんと成績も良かったんだ……」
死ぬ……死ぬ……とオアシスを求める遭難者のようになっている竜司や杏はともかく、成績優秀組に当たる伯はパスだと宣言。
こういった日頃の行動が面子に関わり、評価アップ――――とならないのが世知辛いが。それでもアスリートらしい生真面目な精神は変わらず、行くことを表明した。
「レンはどうするんだ？」
「行くつもりだ。行って損はしないだろうからな」
「私は……今の所は行く意味はないかな。お父様の改心に成功すれば時機に呼ばれるだろうけど」
「とにかく、竜司と杏はサボらずに行くこと。俺もテストが終われば行くからさ」
丸喜拓人。
この人物が怪盗団に与える影響は、如何なものか。

―５／１４　朝―青山一丁目―

「……つけられてるかも」
「つけられてるって？」
「ストーカーか？」
「わかんないけど……」
青山一丁目駅にて、杏が一言。
後ろをつけられている、それもかなりの距離を。それがストーカーかどうかはまだ不明だが、その可能性はまだ切ることはできない。
「どうする？」

「どうするって、止めるしかないだろ！　アン殿のためだ！」
「しゃーねえ……俺に案がある。蓮と伯はついてこい」
　案を考えたのが竜司だというのが若干心配だが、成功すると思っていなければ提案なんてしなく、それを考慮すれば乗る価値はある。そう踏んで、伯と蓮もエスカレーターを無視して上って行った。
　地上に出た後、竜司からその案を聞いたが、杏を1人にしてストーカーをおびき寄せるという作戦を考えていたとの事。そして接近する直前に捕まえ、後は警察にという流れ。
　古典的ではあるが成功率は高そうだと思い竜司の案に賛成し、杏をつけているかもしれない輩を待っていれば
「……来たぞ！」
　杏に1人の男が近寄っていく。それを見て3人も動き出し、もう少しで手が届く、となる前に男の前に立つ、が。
「……なぁ、本当にこいつがストーカーなわけ？　お前の自意識過剰じゃね？」
　ジロジロと舐めまわすような視線でストーカーの姿を一目見た後に、竜司が疑問を唱える。
　それもそのはず。身長はこの中の誰よりも高く、髪型は青髪ストレート。顔も世間一般的に見ればイケメンと呼ばれるもので、着ているワイシャツにはどこかの高校の校章らしき刺繍が入っていることからおそらく同年代。
　後をつける理由はいくらでもある。落とし物があったけど距離が離れてしまったからとか、何か気になるところがありましたとか。
　少なくとも、印象としては”ストーカーではなさそうだな”。自意識過剰でそう感じていただけかという竜司の発言も若干、ほんの若干であるが否めない。
「君たち、何なんだ？」
「それはこっちのセリフ！　つきまとってたくせに！」
「つきまとった……？　心外だな」
「ずっとつけてたでしょ!?　電車ん中から！」
「それは……」

まあ、話を聞く限りだとなんか事情があったと言うか、意識して後を尾けてるわけじゃなかったというか。
薄っすらと感じていた”ストーカじゃなさそう”がほぼ確信の域まで来たところで、ひと悶着起こしている彼らの隣に黒い車が止まり、その車の後部座席の窓が開いた。
「いきなり車を降りたと思えば、呆れるほどの情熱だな。結構、結構……」
開いた後部座席の窓からは、和服を着た白髪の老人が顔を出した。
老人と高校生。純粋に考えるであれば、孫と祖父の関係だろうか――と考えるも、2人の血が繋がっているようには思えない。
そもそも登校時間に祖父と共に車に乗るのかとか、にしては車から降りさせるのも自由度は高いなとか。とにかく疑問が山ほどある中で、男がその理由を語り始めた。
「車から見かけて……追いかけずにはいられなかった。けどよかった。やっと追いついた」
「はぁ……」
蓮も伯も竜司も、ぽかんと口を開けたまま静止している。
それも仕方ない。そのストーカー男が話す内容は底が見えず、何より老人と男の会話を顧みれば、行おうとしているのは――――まあ、愛の告白か。
呆れるほどの情熱に、追いかけずにはいられなかった。極めつけに追いかけたのは美人な杏。ここまで揃って告白でなかったら何なのか。そう思えば、遂にその男が口を開いた。
ごくり、と固唾を飲んで待ち構えれば
「君こそ、ずっと探してた女性だ！　ぜひ、俺の……」
――――絵のモデルになってくれ！
と。意気込んだ男はそう言った。
「……あん？」
「……ほう」
「……告白じゃないのか？」
竜司、蓮、伯の順に反応する。

三者三様――――奇しくも鴨志田の城に初めて乗り込んだ際のような反応だが、それも仕方ない。愛の告白だと思えば、実際に行われたのはもっと別のものだったのだから。
「え……モデル？」
告白と勘違いしたのは仕方なくはないが、まあ仕方ないとして。
これが告白の話ではなく、モデルの話となればまた話は別だ。何のモデルかはわからないが、いかがわしいモデルを頼み込んでるんじゃないだろうか、という心配は切り離せない。
事情を聞いてみると、至って普通の内容で。
高校生で画家をやっていて、最近は少しスランプ気味。そのスランプから脱却するため、何かを変えるために模索していたら、理想のモデル――――つまりは杏を見つけて、話さずにはいられなくなったと。
至極真っ当。至極真っ当であるが、まだこの男の名前も高校も知らない。もしかすれば――――という万が一の懸念を消すため、蓮は名前を尋ねた。
「名前と高校は？」
「ああ、失礼……俺は洸星高校美術科２年の喜多川祐介だ」
「洸星高校……？」
「俺の進学先候補だったな」
「マジかよ!?」
洸星高校を一言で表すのであれば、一芸特化を集めましたを体現した高校。
普通科、体育科、美術科とコースは多岐にわたっているが、その言葉通り、運動や芸術のレベルはかなり高い水準で纏まっている。
事実、”フィジカルエリート”と呼ばれる伯も体育科の進学を考えていた。ただし進学実績や環境も考慮した結果、秀尽学園になったという話であって。
とにかく、これで絵の実力は本物という証明にもなった。
こういった情熱は、良くも悪くも信頼できる。あまりにも愚直で真っ直ぐな喜多川の情熱には、隠されるべき裏のような物は一切感じ

ない。
杏には悪いが、別に構わないんじゃないか。伯がそう思いつつ、喜多川の話に耳を傾けていれば。
「俺は斑目先生の門下生で、住み込みさせてもらってるんだ」
――――斑目？
メメントスで決定した、次の改心の候補となり得る人物と一致する名字。
「あの人が……？」
和服を着た老人か、と。そう喜多川に確認を取れば、喜多川は強く頷いた。
中野原が言っていた”斑目”とは一致し合い可能性がある。そもそも見た目が２０代の中野原と、高齢者の枠組みに入る斑目との関係性が思い浮かばない。
たられば の話ではあるが、中野原も門下生だった。しかし、斑目に一方的に切られ怒り狂ったという理由があるとして。それでも、この喜多川が斑目と良好な関係を築けているのが違和感に残る。
――――遠回しに探るか。
事件到達の鍵になるかもしれないのだから、ここは引かない。そう決断した伯は、喜多川に質問をする。
「なぁ、喜多川」
「どうした？」
「斑目先生って、そんなに凄い人なのか？」
「凄い人だ、言葉では説明しきれないくらいにな」
「その証明になるのは？」
「明日から駅前のデパートで、斑目先生の個展が始まる。……絵画に興味無い奴もいるだろうが、チケットは人数分渡しといてやるよ」
モデルを頼み込んでる杏以外は興味ナシ。ただそれでもチケットを人数分渡す辺り、割と真っ直ぐな優しさを持ってはいるのだろう。
喜多川から差し出された1枚のチケットを受け取れば、喜多川が斑目に呼び掛けられる。
「祐介！」

「すみません！　先生！　じゃあ明日、是非会場で！」
そう言って喜多川は、斑目の乗る車に乗って去って行った。
「斑目一流齋か……どう思う？　蓮」
「……別に、怪しい所はなかったな。鴨志田のような雰囲気も感じない」
喜多川から貰ったチケットをじっと見つめ、並行してスマートフォンで”斑目一流齋”について検索する。
”世界で評価される日本画家”。人当たりも良く、絵画に対する情熱は人一倍。それも遅咲きの画家であるのが所以だから、と色々な情報が目に入る。
数分間のやり取りを見て思ったのが、とてもパレスを持っているようには思えないという事。ただし、中野原の口から斑目の名字が出て、それが斑目一流齋を示すかもしれないのも事実。
「とりあえず、春にも伝えとくか」
「個展はどうするの？」
「行くしかねーだろ。っっても、俺は興味ねえしな……」
「調査だと思えば良いさ。情報は脚で稼ぐとしよう」
まずは個展に向かい、喜多川から情報を探る。
次のタスクが決まった怪盗団は、学校に向かって歩み始めた。

―５／１５　昼―渋谷駅前デパート―

「本当に来たのか……」
「券を渡されたらそりゃな」
貰ったチケットを渡した本人の目の前でヒラヒラと揺らし、ポケットに仕舞う。
”世界で評価される日本画家”、という言葉に見合った実力を持っているのかの確認が７割で、後の３割は興味本位。不足していた春の分のチケットも、杏がもう１枚欲しいと頼むことで獲得に成功。
純粋な興味を持つのが２人、調査という名目がなければ来なかった

のが2人。明確な役割分担ができるのは随分と楽である。
「なぁ……来たのは良いけどよ、伯は絵画の価値とかわかんのか？」
「格付けチェック、あるだろ？」
「あるな」
「当てたことがない」
「逆にすげーわ！　つーかダメダメじゃねーか！」
「雰囲気さえ理解すれば楽しめるだろ。……と言うか楽しめると信じてる」
――――まあ、絵に集中してる感じを出せば様になるだろ。
というとんでも思考にまでは至っていないが、まあ根幹は大体同じようなものである。そこに楽しむか楽しまないかどうかが加わっているだけであって。
「俺は春と作品を楽しみつつ回るから、蓮と竜司は情報収集を頼む」
「任せろ」
「あいよ。何か掴めればいいんだけどな……」
「それじゃ、行こっか」
絵画鑑賞デートと言えば響きは良いが、実際はその気はない――――春の思考はわからないが、伯は少なくともその気持ちでいて。
斑目を探る。その上で楽しむ。その中でいくつか作品を見て、目を引く作品の前では立ち止まって。そうして軽く半周程すれば、感想を言う。
「……凄いな」
「全部、斑目さんが1人で書いたってことだよね……」
いくら芸術センスに疎いとは言え、作風が人によって違うことは理解できる。
ゴッホもダヴィンチもピカソも、同じ画家という括りはあれど全員絵の特徴は違う。
野球の変化球だって、人によって特徴が出る。握り方の特徴、腕の振り方、球の抜き方。投げ方の違いで変化は変わり、それが自分だけのウイニングショットになる事もある。スポーツ面の神髄にいたものだから、分野が違えど、作風だってそれと同じような物だと簡単に

理解できる。
斑目の描く作品は、作風が絞られていない。
もっとわかりやすく言えば、斑目が描く作品は、良くも悪くも作風を”絞らない”。
作風を絞らず、一本の木から複数の枝に分離するかのように、日本画というカテゴリの全てを支配している。
全ての分野で高い水準を誇り、かつ芸術を知らないような人の心にさえ訴えかけられる力を持った作品を生み出すことができる。
――――成程。確かにこれは”世界で評価される日本画家”だな。
そんな事を考え、純粋に尊敬をしていれば、その斑目から話しかけられる。
「おや、君は……昨日の子と一緒にいた子か。楽しんでいるかい？」
「ええ。喜多川君がチケットを渡してくれたので興味本位で来てみましたが、芸術に疎い自分でも素晴らしいと理解できるような作品でして……」
「凄いですね。なんだか、」
能力もある、権力もある。
このまま”表”だけを見ていれば、芸術界に名を遺す人物の1人になれるだろうとすら思える。間違いなく、芸術分野に関しては非の打ち所のない人物である。喜多川とのやり取りを考えれば、それこそ1人の大人としても。
「何かを感じてもらえる。芸術家としては、それだけで充分だ。ゆっくりして行くといい」
生じない違和感。その違和感が生じないことで生まれる違和感。
別の場所へと向かった斑目を見て、接した2人が得る感じ得ないはずの違和感。鴨志田に奥村と触れた回数が多いからか、その奥底に含まれている欲望が見えないことに対して疑問が生じる。
芸術家は特徴的な性格をしている人が多いが、斑目はとっつきやすい。癖のない性格で、それはまるでどこにでもいる近所のおじいちゃんのような柔らかさ。
喜多川との師弟関係にも支障は感じない。ただそれでも、裏はあ

る。
「どう思った？」
「不思議な感じ。話は聞いてはいたけど、それでも人の裏って見ようとしても見えないんだなって」
「だな。……もうちょっと見てから帰るか」
結局、2人はぐるりと個展を一周してから怪盗団メンバーと合流したのだった。

＊＊＊

「どうだった？」
「昨日も言ったけど……斑目は人当たりもいいし、別に異常は感じなかったな」
「近所のおじさまと話してるみたい。正直、あんまり悪い人には見えなかったかな」
「鴨志田もそうだったろ。知らねぇ奴は良い奴だと思っちまうし、知ってる奴はやべぇと思う」
鴨志田の時には知っている側だったのが、斑目の時には知らない側に切り替わっただけだ。
そう言いたげに、尚且つ確信を得たとでも言いたげな言葉を竜司が言い、そのまま怪盗お願いチャンネルを開く。
「怪チャンに書いてあんだ。”あばら家に住み込みさせている弟子の扱いは酷く、こき使うだけで絵も教えて貰えない”だとかよ」
「竜司と一緒に斑目に接近したが、斑目はあばら家に住んでいるらしい。”斑目”で”あばら家”となれば一致するんじゃないか、とな」
あばら家に住む斑目、弟子の扱いが酷く絵は教えて貰えない。
住み込みの弟子の存在は喜多川で確認できていて、中野原のシャドウが言っていた事とも一致する部分はある。
これで斑目に関する情報は二件目。改心された中野原が同様に打ち込んでいる可能性は高いが、比較的信憑性が高い情報ではあろう。
後はパレスが確認できれば黒だと断定できる。なんなら現段階で

もほぼ黒だと言えるだけの証拠が揃っているが、それでも未だ引っかかる部分はある。
「……喜多川が気になる。そこが引っかかるんだ」
「確かに、中野原さんとは違ったよね。斑目さんと喜多川くんの仲も悪くなさそうだったし……」
「たとえば……ほら、中野原は斑目先生の悪さに気づいてたけど、喜多川くんは気づいてないから信頼してる風に見せてるとかは？」
「いや、そうじゃない。……鴨志田の支配とは違うんだ、あれは」
鴨志田の支配と同様に、斑目の支配から逃れることを諦めている可能性もある。
ただ、違う。本物の信頼を目の前で受けたからこそ、伯にはわかる。あの話し言葉やあの目から読み取れる信頼は本当のもので、斑目のことを本気で師として尊敬しているのだろうという事が。
「中野原が追い出されたって事は、喜多川はそのやり取りを見てる可能性が高い。それを見た上であの信頼、って事は……」
「マジのモンだってか……」
「確証はないけどな」
喜多川、中野原、斑目。その三者を結ぶ関係は、どこかで必ず違和感が生じてしまう。
斑目に追いやられた中野原と、斑目に追いやられなかった喜多川の違い。ここさえハッキリすれば良い、というのは至極単純で分かりやすくもあるが、如何せんまずは接近しなければ話は始まらない。
「カモシダとは一味違うぜ。今回は全員部外者だからな」
「結局は全て推測でしかないな……どうする？　リーダー」
「まずは話を聞こう。ナビに認識させようにも、場所が不明だとどうにもならないからな」
「そう言うと思ってた。とにかく頑張ろう」
とにかく、まずは懐を探るところから。
”斑目一流斎”の噂探しは、まだまだ続く。

2―2【The Truth of The Suspicion】

―5／16　放課後―斑目宅前―

「なぁ……マジでここに住んでんの？」
「そうじゃないの？　ほら、表札も斑目ってなってるし、住所もここで合ってるし」
「にしては……」
「本当にあばら家だったんだね……」
〝世界で評価される日本画家〟の住む家は、随分と年季が入っていた。
推測でも築１００年はありそうなあばら家。金も名誉も権力もありそうな画家の住む家がこれだと言われても、まず誰も信じないだろう。事実怪盗団も、杏がリサーチした結果を聞いてから実物を見るまでは半信半疑だった。
見る者に質素なイメージを抱かせる。有名になった今でもそのイメージを崩さぬようしているのか、それとも素でこの考えなのか。
どちらとも取れる。どちらとも取れるが、どちらであっても悪人とはかけ離れた印象。面と向かって対峙した悪人が鴨志田だったからか、尚更。
「蓮、今日のミッションは？」
「地雷を踏むのは怖いが、それはそれとして本人の口から聞かなきゃならない。とすれば……」
「最初は小出しのジャブ。良いタイミングで疑惑を聞いて反応を窺う、だな」
「理解が速くて助かる。インターホンを押すぞ」
今回の接触はあくまで〝調査〟。
怪盗お願いチャンネルに書かれていた斑目が、ここに住んでいる斑目であるのかそれとも別人なのか。できる限り喜多川を怒らせず、波

風立たせないようにするのがベストであるのは事実だが、できる事であれば反応を窺って一発で仕留めるのが良い。
取引材料となるモデルの件がある以上、喜多川は怪盗団を蔑ろにはできない。
つまりは、ある程度なら攻めた質問もできる。無論煽る・更にズカズカと入り込むのは御法度として、真実の追求自体は確実に。
『どちら様でしょうか。先生なら、今は……』
「任せた」
「うん、わかった。……あの、高巻ですけど」
『すぐ行くよ!』
ドタドタと騒がしい足音が聞えた後に、建付けの悪そうだった引き戸がガラリと開く。
「高巻さ……なんだ、お前らもか」
「ごめんなさい。どうしても喜多川くんに聴きたいことがあって」
「俺にか……?」
「手間は取らせない。それさえ聞ければ良いからな」
「”中野原夏彦”を知ってるか?」
出来る限り、地雷を踏まないように遠回しに。
”斑目は盗作してるのか?”や”斑目の虐待は真実なのか?”と聞けば、地雷を踏まれた喜多川にすぐさま帰れと言われるだろうという推測ができる。
どんな聞き方であれ、斑目関連の話であれば否定するというのも織り込み済み。此処で聞きたいのは、中野原という”元”弟子と関係があったかどうかという過去について。
中野原関連の話は、何かあると勘ぐっていても止められない。どうしても優先度の話になってしまえば、中野原よりも斑目の方が重要になる。
推量はする。ただそれはそれとして、黙っていなければならないという内容でもない。
「それがどうした」
「個展の時に会ったんだ。斑目先生の弟子だ、と言っていたのを聞い

てさ」
「……知らないわけではない、彼も先生の弟子の1人だったからな」
それが故に、自然と話してしまう。
しかし尚更気になるのは、喜多川の返答について。
知っている。
それが意味するのは、斑目と中野原の一連のやり取りを全て見ていたという事。そしてその上で、斑目を師として尊敬し続けているという事。
（喜多川はそれでも隠すのか……？）
虐待や盗作を行っていたという背景があるのにも関わらず、喜多川は斑目の行いに対して訴えるようなことをしない。
喜多川だけ特別扱いされている。その可能性も否めないが、画家としてのプライド・ポリシーが本物であれば、いくら尊敬する師とは言え、その行いを見逃すはずがない。
盗作の対象に喜多川だけが外れていた、という線もあるにはる。
ただしそう仮定するのであれば、何故喜多川だけという疑問が浮かぶ。そして次に、何故中野原という前例がありながら見逃すのかという疑問が生まれる。
「何故、そんな事を聞いた？」
「それは……」
「お前の師匠に盗作や虐待の疑いがあんだよ」
――――でかした、竜司。
一見、喜多川の地雷を踏むという意味では適切ではないカバー。しかしそれでも、中野原との関係を聞くことができた後では、意図的ではないにしろ”適切”だと言える。
中野原と喜多川の関係はある。それを知ることができたのであれば、次は問題を口に出すことで”反応を確認すること”がマストの行いになる。
直情的で無鉄砲だからこその行動。伯が竜司に心の中で感謝をすると同時に、喜多川は怒りを顕わにする。
「盗作もありえないが虐待だと!?　虐待する程子供が嫌いなら、住み

込みの弟子など取るものか！　身寄りのない俺を引き取ってここまで育ててくれたのは先生だ！」
「俺はその話を中野原から聞いてる。そしてそれが本当であれば、喜多川も……と考えたんだ。すまないな」
「友人が世話になろうとしてる人の師匠だ。いくら本人が協力的だとは言え、その噂の真実が定かでなければ協力させることもできん」
伯と蓮が更に距離を詰めるも、喜多川の否定は変わらない。
庇う、庇う、庇う。擁護自体は〝そりゃそうだな〟と予想していたとしても、その根幹にある信仰心――――師としての尊敬が、更に強度な物となっていく。
バレたら困るから、という擁護ではない。
そんな事あるか、という本当の擁護。そしてそのやり取りを聞きつけたのか、斑目が喜多川の後ろに姿を見せ、何があったのかと喜多川に訊ねる。
「コイツらが、根も葉もない先生の噂を！」
「……許してやってくれ。こんな偏屈な老人が、万人に好かれるわけがないだろう」
斑目の取った選択は、引くこと。
大罪に関わる――――漏れるはずもなかった噂が、名もなき高校生集団に漏れている。しかもその真実を追求されようとしている。
それを見た上で、強い否定はおろか弟子に〝謝罪〟を求めた。
強まる違和感。ともあれ師にそうしろと言われたのであれば、弟子の喜多川もそうする他ない。口論をしていた怪盗団も、それに従うしかない。
「……非礼だったな、すまん」
「それを言うならこっちがだ。……師を侮辱されて良い気になる人はいないだろ」
「そうだ。先生のあの絵を見れば……君たちにも信じて貰えるかもしれない」
喜多川はポケットにあるスマホを取り出し、何かを開いて彼らに見せた。

そこに映っていたのは一枚の絵で、その名前は〝サユリ〟。話を聞けば、喜多川が画家を目指すきっかけになった作品でもあり、彼自身、この作品のような美を求めて描いている。杏をモデルにして描くことも、その美を追求するための一環だと考えているらしい。
「どうか、モデルの話をよろしく頼む。せっかく訪ねてもらったんだが、今日はこれから先生の手伝いなんだ。また、日を改めて……それじゃ」
そう言い残し、喜多川はあばら家の中へと入って行った。
その背中を見送る怪盗団に漂うのは、何かがおかしい――――良好であるのに、聞いていた話とまるきり違うちぐはぐさ。
「どうなってやがんだ……？」
「メメントスで聞いた斑目は、斑目さんじゃなくて別人なのかもしれないね……」
「けど、喜多川は中野原を知ってる。まずは情報を整理しよう」
伯は胸ポケットからメモ帳とペンを取り出し、そこに〝ナカノハラ〟、〝キタガワ〟、〝マダラメ〟と名前を横並びになるよう綴り、その上に〝怪盗お願いチャンネル〟とサイト名を書く。
「俺たちが得た情報源は２つ。中野原のシャドウと、怪盗お願いチャンネルの書き込みだな」
「それで、喜多川くんも中野原さんを知ってるんだよね。同じ弟子だとも言ってたし」
「そこは間違いない。悪事に手を染めてない、と考えられる喜多川の口から出たのならな」
「いいのか？　喜多川が隠してる可能性だってあんだろ」
「……そこはまあ、信じるしかないだろ。感触的に切らなきゃってだけだな」
ビッ、と〝少なくともキタガワは悪人ではない〟という意味のバツ印を名前の上に書けば、残ったのはとナカノハラとマダラメの名前。
「マダラメとナカノハラ、どっちが嘘をついてんだって話だな」
「言ってしまえば、斑目の話をする中野原は改心〝前〟だった。だから中野原の話がゴシップである可能性も否めない。ただまあ、斑目が

悪人でない可能性も切ることはできない……」
チラリ、と尻目に伯は蓮の方を見る。
事実上の怪盗団のリーダーであるのだし、何より本人の口から頼れと言われたのであれば、頼る他ない。それを察した蓮も、己が持つ意見を語る。
「……どちらとも言えないな。改心後の本人の口から聞ければどうにかなりそう、だが」
「まぁ、だよな」
「でも、中野原に会うのって難しくない？　連絡先も知らないんだよ？」
「ヤマ張って待ちゃ良いんじゃねぇの？　鴨志田と違って期限もないしよ。地道に行こうぜ」
「渋谷全体を見張るのは流石にな……」
「”美術館”で待つのはどう？　そしたらほら、改心で絵に未練の無くなった中野原さんが――――」
――――美術館。
春が何の気なしに、そして1つの案として挙げた言葉。
幸か不幸か、そのたった1つの言葉をきっかけに。

――――ぐにゃり、と空間が歪む。
伯は四度、春を除いた怪盗団メンバーは三度、春は二度味わった”異世界への突入”を示すシグナル。もう既に慣れたとは言え、意図しないタイミングでの突入では反応も大きくなる。
「何だ!?」
「これって……!?」
「嘘でしょ……!?」
疑心から確信への移行。
中野原か、斑目か。そのどちらかは不明だが、少なくともキーワードの1つが”美術館”である事。そしてもう1つは、この目の前にある”あばら家”を対象にしている事。
瞬きを一度すれば、先程までとは打って変わって日が沈んだ世界と

化している。
心の世界――――どちらの物かは不明だが、そのどちらかが所有しているパレスへの侵入。怪盗団の目の前に広がるのは金色の美術館で、デカデカとした幟に書いてあるのは
「斑目大画伯美術館……！」
「あの野郎……腹の中じゃこんなの考えてたってワケか！」
”斑目大画伯美術館”――――つまりは、この世界が斑目一流齋の物であることを示す言葉。
宇宙ステーションに侵入した後の美術館では見劣りはするが、それでも常軌を逸しているのには変わりない。この世界も変わらず心の世界であると証明するのが、制服から切り替わった怪盗団の衣服だった。
「ってか、服装！」
「オマエらが斑目の噂を聞きたてて接近した。それがキッカケになったんだと思うぜ、これ」
「驚いたな。偶然当たりを引くとは」
「お手柄だな、ノワール。にしては、謎の深まるパレスだけどな」
質素が1のイメージだった表と比べ、裏は金色――――金しか考えていなさそうなイメージを抱かせる、金色の美術館。
現実でも個展を開くほどの実力があるのに、歪んだ欲望が象徴するのは美術館。自己顕示欲の塊のような空間は既にあるというのに、だ。
何はともあれ、中に入らねば何があるかは見えてこない。
真実の確認のために、怪盗団は裏口から美術館へと侵入した。

＊＊＊

「んだよ、これ……！」
「これが斑目の本性か……！」
虚飾の美術館に飾られた、1つの巨大なモニュメント。
作品のタイトルは”無限の泉”。金色に輝く人柱によって構成さ

れた像は天を貫くように伸び、その像の実情として書かれている説明は――――

「無限に作品を生み出す泉……か。これが盗作を示すんだろう」

「〝生み出せなければ生きる価値なし〟ときてるぜ、これ。弟子に対する虐待のことじゃねぇの？」

「まるで奴隷や道具じゃない！」

「弟子はお金を生み出す道具、最悪どうなってもいい。……お父様と同じ考え」

「弟子のインスピレーションはまるで湧き出る泉のよう。ただ最低限の生活ができるのと引き換えに、その着想は奪わせてもらう。……鴨志田よりも質が悪いな」

――――彼らは、班目館長様が私費を投じて作り上げた作品群である。彼らは自身の着想とイマジネーションを生涯、館長様に捧げなければならない。それが叶わぬ者に生きる価値無し!!

怪盗お願いチャンネルに書き込まれた内容や、中野原の証言。それら全ての裏が取れた形となり、これによって班目は完全な〝黒〟となった。

鴨志田とは別ベクトル。矢印の向きで言えば、奥村の方に近い悪行か。そして悪人像の近い奥村を改心させるつもりでいるのだから、班目も同様に改心されるべきではある。

「作風が違う。そりゃそうか……描いた人はどれも違うんだからな」

「住み込みで弟子をさせてもらってるんだもん。確かに、否定したくなる気持ちもわかるかも……」

「どうするよ？　コレもう班目がターゲットでいいだろ!?」

「……いや、まだだ」

――――ただ、それはそれとして。

無限の泉の説明を読み切り、喜多川の姿を脳裏にうっすらと思い浮かべたジョーカーが、スカルの案を取り下げる。

「一度、現実に帰って喜多川に話を聞こう」

「ジョーカーの言う通りだな。カモシダと違ってマダラメに関しては一から集めるべきだ。ワガハイ達、マダラメについて知らなすぎるか

らな」
「それに……喜多川にとって、斑目の改心は良い事なのかってのもある。これも俺たちで決めて良い話じゃない」
「関係は良さそうだったもんね、見た感じだと。犠牲になってる人を目の前で見てないからかな……」
パレスもある。悪事を働いたという証拠こそなけれど、働いているだろうという予想はほぼ確定。
赦されざる悪人。しかし鴨志田や奥村と違うのは、怪盗団の中か外か関係なく、その悪事の被害者を見て北かという点であり。
中野原（被害者）はいた。しかし中野原が、いつ、どのように、どんな内容のモノを行ったかという話自体は聞いていない。そういう意味では、斑目の悪人としてのスケールは計り知れない。
やはり探りは必要か。それも斑目本人ではなく、現行で被害を受けている喜多川に対しての探りが。そう判断したところで、その探りを唯一安全にできるパンサーが口を開く。
「……私、喜多川くんに連絡してみるね。モデルの話受ければ、真相聞けるかもしれないし」
「受けんの!?」
「もちろん、みんなも来てよ？　1人だとコワイし」
「あまり背負い過ぎないでね、パンサー。万が一があれば、私が薪割りの要領で……」
「……それより先は聞かない事にしておく」
怪盗団のルールは”全会一致”。
そのルールに従うためにも、内部調査を続けることを決意した。

2―3【Ｕｎｄｅｒｇｏ　Ｉｎｔｅｒｒｏｇａｔｉｏｎ】

―５／１７　放課後―教室―

「行くぞ」
「了解。春は会社の方で来れないらしい」
「春も忙しいしな……聞き込みだけだから今日はどうにかなるだろ、きっと」
ガラリ、とドアを開けようとすれば、取っ手に手をかける前にドアが開けられる。
開けたのは、彼らよりも一回り身長の低い少女。そして一方的に面識がある、春ではない歳上の先輩。
何があった。そう聞く前に、少女が伯に目を合わせるために見上げる。〝お目当てだ〟と言いたげに。
「鴨志田先生に関する事件の主な被害者の１人。……話を聞かせて貰うわよ。宮本伯君」
「……俺に、ですか？」
一連の鴨志田先生に関する事件の主な被害者の１人。ここから読み取ることができるのは、鴨志田事件に関する事情聴取が目的か。
にしてはおかしい。聞くにしても、〝良くも悪くも目立つ〟竜司や、〝直近で一番大きな被害を被った〟杏がいる。そういう意味では、伯はその２人と比べても目立たない。
ともかく、事件に関する話を聞きたいことは推測できる。
その先にあるのは――――怪盗団絡みの調査だということも。
「貴方が一番話が通じそうだもの」
「協力しなかったら？」
「他の人に聞くだけよ」
「……だ、そうだ。どうするんだ？」
相手は優等生。そして生徒の中でも権力のある側の生徒。

ガタつきが起こり続けるのは学校として誠に遺憾な話である。だからその異分子候補――――怪盗団騒動に絡んでいそうな生徒に聞き込みをいれた、か。

断れば調査に向かえる。ただしその代償として、矛先は竜司や杏に向かう。それを聞いた上で取る選択は、複数あって1つしかないようなモノ。

「面倒臭い事にはしたくない。……から、行くしかないな。手短に終わらせてくる」

「そう言ってくれると思ったわ。それじゃあ、移動しましょう」

「すまん、蓮。後の事は任せた」

ただの調査の可能性もある。そうでなければ、見ざる聞かざる言わざるを貫くだけ。

勘ぐる必要もない。丸喜のカウンセリングと同じように受ければどうにかなると言い聞かせて、伯は背中を追うようにして後ろを歩いて生徒会室に入る。

パイプ椅子の前に用意された紅茶のカップ。

ある程度もてなす気はあるようで、尋問まがいの事をすることはなさそうだ。その事実に少しほっとして座り、用意された紅茶を飲む。

――――生徒会長、新島真。

文武両道を体現した、生徒内で一番の権力者。喋ったことのない伯でも厳格だというイメージは抱いていて、そこから物々しい雰囲気を感じ取る。

「聞きたい事があればどうぞ。困っているでしょうしね」

「それじゃあ、遠慮なく聞かせて貰うわ。……例の怪盗団騒ぎについてよ」

やはり予想通りの問い。それを踏まえた上で、何が聞かれるかという推測も重ねる。

「予告状が貼られた当日、鴨志田先生と何か言い合ってたわよね？」

「文句を付けられたので。言い合いと言うよりかはクレームみたいなものですよ」

春に聞かれた際にも用いた逃げ道。あまりにも露骨だとは言え、流

石に擁護はしてくれるだろう。結果論ではあるが、鴨志田が行ったことと予告状に書かれた事は一致していたのだから。
”言いがかりだ!”と言われ、目を付けられた。それでたまたま目立ってしまったというだけ。監視カメラも目撃情報もないのだから、自分が行ったという証拠は残っていない。
「とすると、会長も見てましたか」
「心当たりがあるみたいね」
「否定はしませんよ」
白だと断定できないが、黒だとは断定できない。
裁判で無罪を得るには白だとハッキリさせるのではなく、”黒ではないかもしれない”という可能性を提示するのだとか。
ここで言える”黒”は傍聴やパレスの発見。どちらも気をつけていればまず漏れることはない。そう考えれば、まだ気楽に行ける。
「問題はそこじゃないの」
「ならどこに?」
「全校朝会にあった事、覚えてるかしら?」
――覚えてないなんて言わせないわよ。
そう言いたげに、新島が伯を見る。
「単刀直入に言うわ。私は、一連の怪盗騒ぎに貴方が絡んでいると思っている」
「理由は?」
「訳ありの転校生に、問題児君に、噂の彼女、そして鴨志田先生に反抗し続けた貴方。全員に共通しているのは、鴨志田先生と一悶着あったという事。そして鴨志田先生はあの有様……誰かが手を加えなければ、あんな姿にはならないはずよ」
「それで、俺がその”誰か”に当たる人だと。そう言いたいんですね?」
「そうね」
おそらく”答え”を知りたいんじゃない。
知りたいのは、この質問を吹っかけられた自分の”反応”。面と向かって聞いても”そうです”なんて言わないのだから、求めるのは

もっと別の物。
目の動き、手の動き、発汗から見られる信号。新島真が誘導尋問にどれだけ長けているかは不明だが、その反応を狙おうとしている可能性は捨てきれない。
「……まぁ、否定しますよ。そりゃ」
できる限り自然に。そして情報を漏らさぬように。
伯が否定の意を見せれば、新島は追撃もせず、まるで案の定と言いたげに無言を貫く。
（パレスさえ見つからなければどうにかなる。……どう見てるか聞いてみるか）
黒でしかないという証拠を残すのは不可能。なら”何を目的に探るのか”という攻めた質問をしてもなんとかなる。
事情聴取をされただけで、この後竜司や杏に矛先が向いても何らおかしくはない。切れるカードを切って情報を得るべきだと割り切って、伯は逆に新島に質問を返す。
「新島会長はどう見てるんです？」
「怪盗団について、かしら？」
「裏であれだけの事をやってたんです。急に自責の念に襲われた、だなんてテンプレはまずあり得ないでしょう。……そんな奴じゃないってのは、自分が一番知ってますから」
「……大変だったわね」
「アレがイタズラだったとしても、自分は怪盗団に救われた口です。……だからまぁ、存在自体は否定もしませんし、感謝もしてます」
――ただ、それは別で。
切り替わりの合図。その言葉を口にすれば、新島も反応する。
「だからと言って怪盗団の正体に興味はありませんし、そこにわざわざ会長が首を突っ込む必要もないと考えてもします。……犯人探しなら教師に任せれば良いですし」
見つけたとしてもほとんど見返りもなく、まず存在するかも不明な怪盗。
まあ”鴨志田に自白させた”のに感謝をしたくて探し回る狂信者

はいるかもしれないが。いるかどうかも不明な怪盗を探して何になるのか。特に、レッテルもない生徒会長であれば尚更。

第一、受験もあってピリピリとしている中、率先して犯人探しに興じることがおかしな話でもあり。それを文武両道で生真面目な新島が行っているという違和感に、探りを入れる価値は充分にある。

探られるなら探り返せ。攻め気の伯は、持論を立てて反応を疑う。

「これはあくまで仮説ですが。……新島会長、誰かに指示されてたりしません？」

「……！」

「教師陣に”とりあえずやっといて”と放り投げられて、その後処理を行っている。……皮肉な話ですよね。最初から体罰を知っていた教師もいたかもしれないのに、何も知らない生徒に後始末をさせるなんて」

――――当たりか。

そう踏めたのであれば、次に取るのは揺さぶり。

教師陣が黙ってた理由は”鴨志田がいた方が得になるから”しかないだろう。秀尽学園の評判を上げるためなら多少の犠牲には目を瞑る、というのは竜司や部員の証言で裏を取れている。

体罰に気づいていた教師も少なからずいただろう。それでも生徒に寄り添わなかったのは、裏でそういう理由があったからだと想定して。

「自分が聞きたいのはそういう事。……見逃してた教師陣と、方法はどうあれ悪人の闇を暴いた怪盗団のどちらが正しいのかという話です」

「……貴方は？」

「結果だけ見れば怪盗団ですよ、当たり前ですけど」

結果だけ見れば。

闇を暴いた。それだけ聞けば聞こえはいいが、実際の方法は宿主の否応なしに人格を捻じ曲げ、最悪死ぬかもしれないが何とか自白に持ち込むという物。

自白はできる、ただその黄金比が崩れれば死ぬかもしれない。黒寄

りのグレーとも言えるその方法で改心を行う怪盗団は、白いインクに一滴の黒を混ぜるように”完全な善”とは言えない。モルガナに鴨志田は死ぬかもしれないと言われてから抱き続ける、伯自身のポリシーのようなものである。
「正しいのに従えとか、そういう話じゃないですけどね。……なんでも”はい”と答えるイエスマンじゃ、自分を見失っちゃうと思いますよ」
迷うこと自体は良い。ただしなんでもかんでも偉ければ肯定するお偉いさんの犬にはなるな、と。
これが響いて調査も表向きのになれば――――という意味が籠っているか籠っていないかだったら、それはまあ確かに籠ってはいるが。
新島が正しい考えを持っているのであれば、変にこじらせて調査がもっと激しくなることはないだろう、と。その心を信じる形で誘惑する。
「……確かに、そうかもしれないわね」
「そう思えたのなら幸いです」
「今日はもういいわ。貴方のおかげで考えさせられたもの」
「であれば、その問いの答えは？」
「秘密よ」
「……そうですか」
――――調査取りやめは期待できないか。
まあ、仕方ない。そう思って生徒会室を後にすれば、今後張られるかもしれない竜司や杏に注意をするため、斑目邸にいるであろう蓮に電話をする。
一度、二度。そうして三度目のコールで繋がれば、
「もしもし。……会長に探られてるかも。竜司や杏に注意するよう言って貰えると助かる」
”そっちは何かあったか?”と。そう聞いて、何か収穫はなかったかと期待に胸を寄せていれば。
「あ……!?」

――――杏が脱ぐ!?
何言ってんだと言いたげに、伯は二度聞きをした。

―５／１８　放課後―マダラメ・パレス―

「どうする？」
「どうするか」
「どうしたもんかな」
バリバリと大量の電撃を発する赤外線サーの壁にぶつかり、怪盗団は足踏みをしていた。
オタカラが潜んでいそうな場所はセンサーで守られた襖の先で、センサーを止めるには何かしらの操作が必要。しかしその操作盤はどこにもない。
傍にあった葉を捩ぎ取ってジョーカーが投げてみるも、バチン！と発光した後に燃えカスとなるだけ。投げてみなくてもわかるが、人間ならまず間違いなく即死。可能性があるとすれば――――
「……スカル、電撃耐性あったよな？」
「殺す気か!?」
「冗談だ」
「”宝物殿への扉は、院内の警備室でのみ開閉が管理される”。外から開ける方法もなさそうだね……」
「待つとかどうよ。外から中に入るシャドウの後ろを追ってみるとかなら行けんじゃねぇの？」
「警備員は赤外線に引っかからない可能性がある。スカルのソレも望み薄だろうな」
赤外線を解除できるのはあの襖の向こう側のみ。あの襖の向こう側へと行くには赤外線を解除しなければならない。
卵が先か鵜が先か。長時間待機して開くことに期待するのも現実的でなく、鴨志田のパレスで見られなかった本当の”手詰まり”状態。

「……いや、案ならあるぜ」
「モナ？」
「あのフスマの柄、マダラメの家の中にあるのと同じ形だ。現実でアレをこじ開けりゃ行けるかもしれねぇ」
モナが注視したのは襖の柄。現実同様に存在するあの襖を、班目の目の前でこじ開けることで”開かれた”という認知に――――重要な部分（欲望の道）が明かされたという考えに変えさせる案。
「上手く行くのか？」
「予告状の原理と同じだぜ。本人の認知を変えてやれば開く……かもしれねぇ。昨日見たらゴツイ鍵がかかってたからな」
「俺が会長に捕まってた間にか。流石だな」
「でも、モナちゃんが言うには鍵がかかってるんでしょう？　喜多川くんに開けてもらうとかは……できないよね」
「ワガハイならヘアピン1本で楽勝だぜ。つっても、ある程度は時間はかかっちまうけどな」
不確定要素はあるが、前進の芽が生えてきた。
斑目を扉の目の前におびき寄せ、モナがその瞬間に扉を開く。その隙にパレスに忍び込んだメンバーで赤外線センサーを解除し、通行可能にする。
上手く行くかは半々。それでも試す価値はある、が。
「ある程度、は何分かかる？」
「15分だな。それ以上はかからないと思うぜ」
「喜多川と斑目をごまかすのに15分、とも取れるな」
「見つかりゃ終わりなんだろ？　俺らじゃ屋敷に入んのも……な？」
「ソルジャーはともかく、俺とスカルは無理に入れば今度こそ通報だからな……気軽に侵入できる奴がいれば良いん、だがな」
――――任せたぞ。
その半々の可能性を、もっと”成功”の側に寄せなければならない。かと言って喜多川や斑目に接近するには良い口実が無ければならなく、少なくとも厄介払いされている組では不可能。
そしているじゃないか、その条件に当てはまる人物が。ニヤニヤと

した視線に気づけば、その意図を察してパンサーが大きく反応する。
「ま……まさか脱げっての!?」
「……お前ら、通報って何したんだよ」
「んな事どうでもいいしマジで脱ぎはしねーよ。でもパンサーなら入れんだろ？」
「本当に大丈夫？　いくら演技だったとしても、女の子1人だと何が起こるか分からないし……」
ノワールの言う事ももっともであり、いくら演技だとは言え女性1人では何が起こるか分からない。
立案、そして万が一の事がないように最適の準備。”ある程度パンサーが頑張れば行ける”と前提して話を進めていく。
「こういうのはどうだ？　”ヌードの件で相談がしたい、だから少し話してその後にやれるならやりたい”という体でモナと共に侵入する、とかな」
「相談で何分か、その後はまあ……お腹が痛いからとか言ってトイレに籠るとかか。ジョーカーの案なら行けなくはなさそうだな」
「結局1人じゃん……」
「パレス攻略の頭数も揃ってるだろうし、1人は護衛に回してやろうぜ。安心させるために玄関前で待機してるだけだけどな。スカルじゃ心配だし、ジョーカーかソルジャーだな」
「誰が心配だオラ！　……ま、ジョーカーで良いんじゃねぇの。モナを連れてくんだったらそっちの方が手間もかからないだろ」
さて、後はその本人に行う勇気があるかどうかだが。
別に脱ぐ必要はなく、会話を少しだけしてその後はトイレで待機するというだけのもの。更には女性1人だけだと心配だからと護衛まで付いた好待遇。
ここまで条件が揃えば、失敗の可能性はあるもののやってやろうという気にはなる。パンサーが覚悟を決めて頷けば、やるべき事が明確になる。
「頼んだ、パンサー。……一肌脱いでくれ」
「脱がないから！」

2―4【IT WAS FUN WHILE IT LASTED, GOODBYE.】

―5／19　放課後―マダラメ・パレス―

「……なぁ」
「どうした？」
「いざ冷静になるとよ、この作戦ってかなり無謀じゃねぇか？」
「ドアが開いたのを知らせて、斑目先生をそこに向かわせないといけないんだもんね。向こうで頑張ってるみんなを信じよう？」
　一方、こちらはパレス待機組。
「ぶっちゃけこの作戦、上手く行ったら奇跡じゃね……？」
「上手くいくだろ、きっとな」
「俺だって、そう思いてえけどよ……」
　仮にこれが失敗すれば、おそらく杏を含めた全員が喜多川に接近できなくなる。それが意味するのは、斑目のオタカラも盗めず、悪事をただ指を咥えて眺めることしかできなくなるという事。
　それだけは絶対にさせちゃいけない。あの無限の泉から察するに、斑目によって道を絶たれた画家は自分たちの想像の何倍もいて、喜多川もその毒牙にかかるかもしれないのだから。
「……そろそろ、だな」
　パレスに潜入してから２０分が経過。杏の話によれば斑目が帰ってくるのは２０分前後。そこから逆算すれば、認知が変われってそろそろ開くだろうと推測もできる。
　一向に様子の変わらない赤外線センサーに、もしかしたらモルガナが見つかって失敗したのかという焦りも生まれる。そうして１分、また１分とタイムリミットを数分越したところで――――
「開いた！」
「マジかよ……やりやがった！」
「後はこっちで仕上げをするだけ。すぐにセンサーを止めるぞ！」

ブレーカーが落ちたような音と共に、目の前に張り巡らされていた赤外線センサーの電源が全て落ちる。
それと同時に起こったのは、その奥にあった物々しい襖が開いたこと。斑目が鍵をかける程に厳重にしていた事から、本人にとっての闇が隠されているだろうというのも考えられる。
ともかく、それは現実世界にいる組に任せれば良い。
向こうは向こうで体を張ってしっかり仕事をしたのだから、こっちもそれに応えなければならない。パレスで待機していたソルジャー、スカル、ノワールの3人は即刻襖の向こう側へと潜り込み、赤外線センサーを止めるべく操作室を探す。
「シャドウがいるな」
「あの位置……倒さなくちゃかも。私たち3人で行けるかな」
「心配すんな。殺られる前に殺りゃいい」
目の前に立ち塞がるのは、一体の大型警備シャドウ。いかにも”ここは通させない”という風貌から、間違いなくこの先に求めている操作室がある。
襖の奥へと入り、物陰に隠れ機を待つ。幸いこちら側に揃ったのはアタッカー気質の3人。奇襲さえ成功すれば勝ちはほぼ確実だと分かっているから、気は楽である。
「……シャドウの仮面をぶん取って隙を作る。俺のスピードなら反応できないだろうしな」
「任せたよ、ソルジャー。やっちゃって！」
先に操作室に入って止めなければ、いずれ赤外線センサーと襖が元通りになるかもしれない。ならば取るべき戦い方は、攻めて攻めて攻めまくる速攻の奇襲。
知らぬ間に仮面を剥がされ、知らぬ間に圧倒的高火力で消し炭にされる。それを味合わせるために、まずは先陣を切る。
「貴様っ……！」
「悪いが眠ってて貰うぞ！」
――――一度やってみたかったんだよな、これ。
張り付いた仮面を強引に剥がし現れたシャドウは、大型の

夜鳴きする合成獣。仮面を剥がすと同時に一断ちすれば、ヌエからうめき声が漏れる。
「物理は効く！　火力で焼き尽くすぞ！」
「攻めるぞノワール！」
「任せてスカル！」
そこからはもう、虐殺のようなものだった。
視界が奪われたと思えば侵入者の声が聞こえ、気づいた頃には斬り刻まれていた。火力、火力、火力で木端微塵となったヌエを後にし、3人は制御室を探す。
「おい、あったぞ！」
「んじゃ止めて、と……これで大丈夫だろ。赤外線は粗方止まったはず」
「一応確認した方がいいかもね。そろそろジョーカーやパンサーも戻ってくるだろうし……」
そうして、元居た場所に戻ろうとすれば
「きゃぁぁぁぁぁぁ！」
――腕を組み、直立不動で垂直落下してくるジョーカー。
――叫びながらじたばた腕を振り、怪盗服を纏ったパンサー
――何故か共に落ちてきた喜多川祐介。
――そして遅れてきたモルガナ。
”4人”の姿が、彼らの目に映るのだった。

＊＊＊

「なんだ、お前ら!?」
「落ち着いて、喜多川くん！　私だよ私！」
「ジョー……いや、蓮も巻き込まれたのか」
「逆だ。杏が鬼気迫る顔で走って来たからな。意図を察してナビを起動し、2人を巻き込んだのは俺だ」
「……まぁ、仕方ないな。巻き込まなきゃならないくらい急いでたんだろうし」

さて、どうするか。
扉は開いた。制御室の操作で赤外線も完全に締め切り、後は探索を続けるか切り上げて帰るだけかの相談をするだけだった。
斑目にとっての深淵――――――悪事に直接関わる扉が開かれた。となれば、向こうで一大事となったのは否が応でも想像できる。
逃げ場所もない。であれば誰にも見つからないパレスに行けば何とかなる。大方そのような理由で逃げ込んできたのだろうが、よりにもよって無関係の喜多川まで巻き込んでしまった。
――――君は何も見なかった、良いね？
そう強く念押ししようとも、迷い込んだこの世界の事を忘れることはないと断言できる。かと言って一から説明しようにも、何から説明すれば良いのか。
「それより、何なんだ、ここは……？」
「……心の中よ、斑目の」
「先生の……〝心の中〟？」
そして向こうから聞いたのであれば、真実を話すしかあるまい。
師匠の心の中。そう言われた喜多川は、立ち上がって周囲を見渡した。
金、金、金。虚飾の金が空に舞い、美的センスがなくとも下品だと漏らしてしまうような光景。まるで日本画など〝金の成る木〟でしかないとでも言いたげな世界。
「これがヤツの本音なんだよ。欲望まみれの……金の忘者ってこった」
「デタラメを言うな！」
「中野原と掲示板の書き込みで調査。この世界を確認した後に喜多川からの証言を得て接近……多かったろ、内情を探られるの」
「喜多川くんだって思ったでしょ!?　斑目のこと、なんかおかしいって！」
「それは……」
うっすらと見え隠れする狂気。身寄りのない自分を引き取ってくれたという大義があっても覚えてしまう、班目一流齋の裏の顔。

いくら師として尊敬しているとは言え、画家の1人であれば見逃すことはできない。何より、中野原が筆を折るに至るまでの過程を目の前で見ているのだからそれは尚更。

”着想を譲っているだけ”。伯が新島に捕まっていた間に行われた調査で、喜多川は盗作についてそう証言した。

実際は盗作を聞こえの良い表現で言い換えただけで、実際はまともなやり取りすら行われていないかもしれないし、頭では悪人だと理解しているかもしれない。

「確かに、お前らの言うことが本当なら、俺の知る先生など、何処にも……だが、それでも十年置いてもらった恩義だけは……消えない」

「許すってのかよ!?」

「……喜多川くんにとって、斑目先生は師匠でもあってお父様みたい方だったんでしょう？　それなら受け入れられないのもわかるよ」

「すまない……頭の理解に、気持ちがついていかない」

ぐらり、と精神状況が体を蝕んだ喜多川がその場に倒れ込む。

身寄りのなかった喜多川にとって、班目一流齋は確かな”父親”だった。

いや、それは少し過大評価かもしれない。身寄りのない自分を引き取ってくれたとはいえ、裏で盗作の被害に遭っていたとすれば”父親”ではないだろう。しかし、最低でも”恩人”に当たるのは事実。

疑える要素はある。ただ、本能が疑わせてくれない。

善人でなければ、心が壊れてしまうから――――

「オマエら、とっととズラかるぞ！　パレスの警戒度が上がってる！」

「肩を貸そう」

「……いや、大丈夫だ」

収穫は得た。またか、と言いたくなるようなイレギュラーと共に。

警戒度が上がるのを肌で感じつつ、彼らは美術館の出口を目指して急ぐのだった。

＊＊＊

「先生……なのですか、その姿」
「王様の次は殿様かよ！」
弟子の着想を頂く”無限の泉”のあるメインホールで出会うとは、何と皮肉な話か。
パレスを形成する主――――班目一流齋のシャドウ。
歌舞伎役者のように白塗りにした顔もそうだが、何より目を引くのは服装の悪趣味さ。現実世界ではただの和服だったのが、こちらの世界では全身金色仕様のまた下品な姿。
「嘘ですよね……？」
清廉、質素。１０年間で築き上げられた”班目一流齋”の姿が、心を知ることで崩れていく。
「あんなみすぼらしい格好は演出だ。有名になっても、あばら家暮らし？　別宅があるのだよ……オンナ名義だがな」
「なぜ、盗まれたはずのサユリが保管庫に？　本物があるのに、なぜたくさんの模写を!?」
「サユリが盗まれてない……？」
「しかも保管庫大量の模写……向こうで何があったの？」
”盗まれた”など、私が流したデマだ！　全部、計算し尽くされた”演出”なのだよ！　特別感があれさえすれば俗人どもは大枚はたいて食いついてくれる！」
「そんな……！」
「……喜多川、大丈夫か？」
斑目の思考は、春を殺さず生かして残せと直接シャドウに命令をした奥村とは根本から違う。
最悪――――まあ、日本画の頂点となった今なら”いらない”。喜多川をここで殺したとすれば、インスピレーションが浮かばなくなったとでも言って隠居生活を始めれば良いだけの話。
シャドウが無防備な喜多川に突っ込んでくる可能性。ペルソナに覚醒していない喜多川では、受け止めた瞬間に大怪我をする事間違いなし。
あまりのショックからその場に崩れ落ちてしまった喜多川の前に、

蓮と伯が立ち塞がる。
斑目を護衛するシャドウは2体、対しこちらは6人。パレスの中のシャドウの強さからして、奇襲さえ警戒すれば喜多川は守れる。
どうして。意気消沈した喜多川とは対照的に、真実を顕わにした班目は追撃を行い続ける。
「絵の価値など所詮は”思い込み”……ならばこれも正当な”経済行為”だ！」
「さっきから金、金、金……どうりでこんな気持ちワリぃ美術館ができるわけだぜ！」
「盗作とか恥ずかしくないわけ!?」
「芸術など、カネと名声のため道具に過ぎぬわ！」
「なら、あなたの才能を信じている人は……天才画家と信じてきた人々は……！」
「……これだけは言っておいてやる、祐介。この世界でやっていきたいのならば、私には歯向かわんことだな。私に異を挟まれて出世できると思うか？」
画家として大成した理由は盗作。
画家としてのプライドもなく、金を稼げれば問題なし。
弟子？　金になるならどうでもいい。そのくせ我が物顔で権力を振る舞うだけの傲慢さは持ち合わせているときた。
――――許せない。
斑目が許されざる悪人だからではなく、個人的な”怒り”を。鴨志田とは意味の違う、ただし燃える炎の強度は同等の”怒り”を。
歯を食いしばって聞いていた伯は一歩、二歩と踏み出して斑目に反論する。
「演出、演出……じゃあ何だ？　自分の作品で誇れる物は”演出”だけ。演出と盗作が無ければド底辺の三流が限界の画家ですと。自己紹介をしてくれてありがとう。そう言い返せばいいのか？」
「そこのくそガキ……私に何が言いたい？」
「……なぁ、喜多川。”サユリ”が有名になったのって何年前かわかるか？」

「俺の記憶にある頃には有名になっていたから、ハッキリとはわからないが……確か15年前くらいだ」
15年前。
思ったよりも新しいサユリのデビューに、伯は怒りを顕わにしながら考える。
もし、名画”サユリ”が斑目の芸術家人生のスタートだったとしたら？
喜多川が言うには、サユリが評価を得たのは15年前だと。これはつまり、現在60歳前後に見える斑目の芸術家人生は、凡そ40代中盤から始まったと言えるだろうという事。
「日本画の頂点？　……笑わせるな。自分の力で頂点に立っていないのに何が誇れる。どう澄ました顔でいられる！」
もっとも、今の斑目にしてみれば、”絵が好き”と言うよりかは”金が好き”だろうが。
だとしても、最初から”金が好き”という思考ではなかっただろう。決してなかったとは言い切れないが、斑目だって斑目なりに有名な男になりたい、という考えはあったはずなのだから。
金が欲しければ稼げる職に就けば良いし、欲しかったとしても、一発はあるものの不安定な画家なんて職として選ぶ必要は無い。
今とは違った姿――――それこそ、有名画家になるために必死に努力した姿があったはずだ。一握りの、若き斑目が目を光らせて語る”夢”を叶えるために。
――――なら、斑目はどこから歪んだのだろうか？
それは、斑目に聞かなければわからない。自分の才能に限界を感じたからなのか、自分と同い歳の他人が優れていることがとてつもなく憎かったからなのか。それとも、金欠が故に悪事に手を出してしまったのか。
そんな過程はどうでもいい。過程はどうあれ、焦点を当てるのは”堕落した”という事実。
「……置かれた環境のせいもあって、俺の周りじゃ常に争いが繰り広げられていた。限られた席を争う椅子取りゲームに、年齢の近い選手

が揃って毎年参加をして、俺はその中で毎年結果を残し続けた。そこに年上も年下も関係ない。一番を譲りたくがない故に、背番号1という形で俺が頂点である事を証明し続けた」

理由はどうあれ、外道としての道を歩むようになった時点で許しがたいのは確かだが、何よりも伯が許せなかったのは。

――――自分の実力でもないのに、一番を語り、一番であることを騙り、一番であることで甘い蜜を吸い続けてきたことだった。

「その腐った審美眼からすれば、界隈こそ違えど結果を残し続けてきた俺が天才のように見えるのかもしれないが。生憎、俺には〝ギフテッド〟と呼ばれるような才能は無かった」

――――そこには、血の滲むような努力があった。

先輩、同輩、後輩関係なく。同じ野球人である以上、そこに垣根は存在しない。上手いプレイヤーが評価され、下手なプレイヤーはベンチ外に追いやられ。勝利を追求する以上、そこに情と呼ばれるような物は存在しない。

彼にあった才能と言えば、精々片手で握れる砂程度。両手で掬っても零れ落ちてしまうような〝神様の贈り物〟はありもしない。

それを誰よりも、誰よりも。自分が選ばれた人間じゃない事を強く理解し。

〝負けたくない〟。その一心で、誰よりも深い努力を積み重ねた。

「研鑽を積むのを怠り、実力外の演出というドラマ性でしか勝負できないお前を見てるとな……！　努力で全てを乗り越えてきたからこそ、俺はお前の言葉を聞いてると苛立ちが止まらなくなるんだよ！」

「黙れ！　何も分からないガキが私に口を出すな！　着想を奪って何が悪い!?　着想をいただくなら、大人よりも言い返せん子供の将来を奪った方が楽に決まってるだろう！　家畜は毛皮も肉もはぎ取って殺すだろうが。同じだ、馬鹿者め！」

――――来るか。

場の雰囲気が変わった。対話から戦闘へと切り替わったことから、全員の意識が力を持たない喜多川に向く。

守らねばならない。その考えとは対照的に、喜多川は〝心配するな

”と言いたげに不敵な笑みを浮かべる。
「事実は小説より奇なり……か」
喜多川の意識は、絶望のその先へ。
「そんなはずはないと、長い間目を曇らせてきた……人の真贋さえも見抜けないとは……節穴は、俺の眼だったか……！」
絶望を越えた先に待つのは、力を得るための”叛逆”の心。
「許すものか…お前が、誰だろうと！」
さあ、師との決別を。
”叛逆の眼”で、全てを見極める。

ようやっと目が覚めたかい？
真実から目を背けるキサマこそが、何より無様なまがい者。
たった今、決別するのだな……！
いざや契約、ここに結ばん。
我は汝、汝は我。
人世の美醜の誠のいろは
今度はキサマが教えてやるがいい！

――――――ああ、よかろう
IT楽 WAS し FUN かっ WHILE た IT よ、 LASTED じゃ， GOODBYE あ・な
来たれよ、ゴエモン！

「……すげ」
喜多川の背後に立つ、歌舞伎役者のようなペルソナ。喜多川がゴエモンと呼ぶペルソナを、怪盗団はそれをただ眺めることしかできな

かった。
「絶景かな……」
晴れ切った”審判の眼”でシャドウを一瞥。
喜多川は手を前に突き出し、歌舞伎役者のような語りを始める。
「まがい物とて、こうも並べば壮観至極……悪の華は栄えども……醜悪、俗悪は滅びる定め！」
刹那、猛吹雪が吹き荒れる。
師との訣別、そして冷徹になった心を表すかのように、力任せに振るった攻撃はシャドウを一瞬で凍結させ、一時的にだが班目の盾を剥がすことに成功する。
「ふん……いきがりおって……何も知らずに死んでいくがいいわ！」
「こりゃあ凄いぞ……！」
「貴様を親と慕った子供達……将来を預けた弟子達……いったい何人踏みにじってきた……？　幾つの命をカネで売った!?」
逃げるな、迷うな、そして戦え。
何もかもを断ち切る刀。それを手にした喜多川は、戦う覚悟を決める。
「俺は貴様を……絶対に許さない！」
「お手並み拝見といこうじゃねぇの！」
「ついてこれるか？」
竜司と蓮の問いかけに対し、喜多川は悪人のような不敵な笑みで答え返す。
「当たり前だ！」
喜多川のその言葉が、シャドウとの戦闘が始まる引き金となった。

2―5【Ｃｏｄｅｎａｍｅ：Ｆｏｘ】

―５／１９　渋谷―ファミレス―

「お前たちから聞きたいことは色々あるが……あの世界が斑目先生――――いや、斑目の心の中だというのは本当なんだな？」

「信じられないか？」

「何を今更。あんな醜い世界を見て、不思議な力に目覚めた後なんだ。疑いたくとも〝ソレが真実だ〟と認めるしかあるまい」

危機を乗り越え現実世界に戻り、立ち寄った手頃なファミレスで全てを話した後。

斑目の心に形成されたパレスの説明に、喜多川が得たペルソナの力。訊ねなければならない事は山ほどあれ、目で見た物全てを認めるだけの審眼を取り戻した後からか、想像していたよりも何倍も素直に聞き入れていた。

力を貸すか貸さないかで言えば、まず間違いなく貸すに決まっている。

ただ貸すとなれば、企業秘密の内容――――言わば〝心の怪盗団〟の部分まで説明しなければならない。説明すると言っても、怪盗団サイドが許可するかどうかではなく喜多川がどうするかであるが。

怪盗団のリーダーである蓮が喜多川に訊ねる。

「〝心の怪盗団〟は知ってるか？」

「〝心の怪盗団〟……？」

〝心の怪盗団〟という単語に聞き覚えがあったのか、喜多川ははっと驚いた。

鴨志田が自白したことは全国報道になったが、その自白の裏にあった怪盗団の存在。誰が流したかも分からない噂程度の扱いかもしれないが、それでも秀尽学園以外でも認識はされているようだった。

「秀尽の体罰教師の件、お前も知ってんだろ？」

「まさか、お前達が……!?」

「鴨志田が罪を自白した理由は自責の念。ただし、鴨志田卓は到底そ

んな事をするようには思えない極悪人。……斑目に対してやるのはその再現だ」
一応、最終確認として。
改心は心を破壊することと同義。一度破壊すれば元には戻らない――少なくとも”悪”が壊され”善”にはなるが、ある意味で二度と元の姿に戻らないと言える。
水よりも濃い血は繋がっていないが、それでも喜多川にとっての父親である事には変わらない。もっとも、ペルソナに覚醒した時点でその確認は無用の長物であろうが。
「戦力は多い方が良い。それに後出しのようにはなるけど、今の戦力じゃ少し厳しいかもしれないパレスもこの後に控えてる。だから俺としては何としてでも引き込みたい」
「控えたパレスが？」
「……改心させるのは、私のお父様なんだけどね。パレスの中にいる敵が強いから、少し先延ばしにしてるの」
「実の父親か……何も知らない俺が言うのもなんだが、大変だな」
「いいの。いずれ喜多川くんにも話そうと思ってたから」
ふむ、と一息ついた後に、決まり切っていたかのような答えを喜多川が出す。
「俺も入れてくれ、怪盗団に」
「……止める気はないけど、そこそこ危険だぞ」
「画家としての未来を奪われた多くの門下生の為にも、俺が終わらせなければ。それがまがりなりにも親だった男への礼儀だと思っている」
「防ぐ方法はわかっちゃいるが、もしかしたら廃人化しちまうかもしれない。そうなるかもしれないが覚悟はできてるか？」
「今更そんな事で怯えないさ。……俺がやらなければ、また誰かが犠牲になるのだからな。それに斑目は権力者だと認めざるを得ない。俺1人が反発してももみ消させるだけだ」
「これで7人目か。……よろしくな、祐介」
祐介の怪盗団加入確認もあっさり終わり、後は雑談と作戦会議に花

を咲かせるだけとなった中。何か懸念点があるのかと考え黙っていた杏が、口を開いた。
「そう言えば……告訴って言ってたけど、どうなるのかな。私と祐介、かなりやばい状況だったけど」
「斑目なりのもみ消し方がそれって訳か……祐介、どうなったかわかるか？」
「それなら、ここに来る前に連絡を取っておいた。俺はあの後、杏を追いかけていたことになっている」
「斑目さんの様子は？」
「高校生1人を捕まえられないのかと愚痴を言っていたよ。それでも怒りが収まらないようで、全員訴えてやると言っていたがな」
「俺は頭数に数えられてなかったか……」
「いや、触れるトコそこかよ……」
――”また”退学の危機か。
余裕綽々の怪盗団のリーダーはそう思っているが、転校してから1ヶ月と少しで2回も退学の機会が訪れるというのは如何な物か。
ともあれ今回は問題児組だけでなく、怪盗団に正式加入した杏や春も危うい。特にここで止まれば奥村の改心計画も途絶え、水の泡となってしまう。
個展期間中に動かないと仮定すれば、期限日は6月5日。パレス攻略も後半に差し掛かっていると考えれば、まず杏が危惧する告訴の可能性はないと言える。
しかし万が一、万が一があれば。これらも全て仮定の話でしかなく、確実に告訴が6月5日に行われる保証もなければ、確実にパレス攻略ができるとは限らない。
まあどう考えても成功するだろという余裕の中に潜む、しばしの緊張。
じゃあそれを確実なものにするにはどうするか、と。それを考えようとすれば
「お待たせしました。グランドマザーバーグです！」
芳ばしい香りのデミグラスハンバーグの上に目玉焼きを乗せ、おま

けにライスとサラダまでセットでついてきた”ビックリぼーい”の看板メニューが運ばれてきた。
グランドマザーの名を受けたそのハンバーグの特徴は、名前負けもしない程の巨大サイズである事。どこにでもファミリーレストランで食べられるクオリティをはるかに超えた味は、食べる者全てを虜にする。
――――いや、誰が頼んだんだよ。
そのハンバーグを頼んだのは、待ってましたと言わんばかりに嬉々として受け取る宮本伯。
「よし」
「よしじゃねーよ！」
「竜司、ナイフとフォーク」
「いや自分で取れ！　つかいつ頼んだんだよ！」
「……皆がドリンクバーに行ってる間？」
「確かに、伯だけ来てなかったかも……」
「腹が減ったら戦はできないだろ。夜飯もまだ食べてないしな」
それじゃあ、いただきますと言ってナイフを立て切り込みを入れれば、柔らかくジューシーに仕上がった肉の隙間から大量の肉汁が漏れ出す。
とろりとした半熟の目玉焼きの黄身部分を崩し、切り崩したハンバーグに付けて口に運ぶ。
「うまっ……！」
午後１９時、パレス攻略で疲弊した身に染み渡るグランドマザー級の優しさと幸せの味。そして座席を包む肉の香り。
特に我慢しなければならない状況でもない中の至高のハンバーグ。それを眺めているだけなんて――――と、するすると魅入られるように蓮がメニュー表に手を伸ばす。
「俺も頼むか。伯と同じのをな」
「お前もかよ！　……ま、俺も頼むけどよ。とりあえず俺はチーズバーグ３００グラムで」
「今日は頑張ったから……ハンバーグにストロベリーソフト頼んで

も、怒られないよね？」
「パイナップルバーグ……ハンバーグにパイナップルを乗せる斬新さ、ちょっと見習いたいし食べてみたいかも」
「いやそれ食う奴いたんだな……」
「俺は黒あんみつを頼むとしよう」
「絶対ワガハイから連想しただろ、それ……」
「はっ……！」
「オマエまた何か連想したのかよ!?」
「……財布がない」
「ユースケ……！」
――――まあ、とりあえずパレスに潜入してから考えよう。
そう考えた彼らは、祐介加入の歓迎会と共に雑談に花を咲かせた。

＊＊＊

「伯、ちょっといいか？」
「おう、どうした」
ファミレスで1時間程続いた歓迎会も解散となり、それぞれがそれぞれの帰路についた後。
帰る方向が渋谷（同じ）だった伯と祐介が歩いて帰る中、祐介が質問を投げかけた。
「斑目に色々言っただろう？　”苛立ちが止まらなくなる”や”何が誇れる”とな」
「……もしかして、怒ってるか？」
「逆だ。……何も言い返せなかった俺の代弁者となった事に感謝をしたくてな」
「なら良かった。……斑目が許せなかったのは事実だからな」
”努力を捨てる”や”諦める”は、伯が最も嫌う言葉だった。
間違った努力をしていれば実らないのは当然として、正しい努力さえしていればいずれその努力は実る。未だ実らないのであれば、その努力量が足りないだけであって。

一歩一歩踏みしめて登る努力の階段は成長を予感させ、登り続けることで頂点に辿り着けることも理解していた。その成長が楽しみだった。だから闘い続けたと称する男の前で、この世は才能が全ての世界――――とでも言ってしまえば、怒るのは当然とも言える。

「怪盗団に入る前には何を？」

「野球だ。辞めさせられたと言うか、もうできないと言うか……まあ、同じような物か。とにかく今はやってないな」

「実績を聞いても？」

「東京の選手で俺の名前を知らない奴はいなかった」

「なっ……!?」

「……とまでは行かないな。レールの上を走れていれば2年後にはそうなってただろうな、ってだけだ」

そうなってただろうな、と伯は言った。

そう言ったが、そうなればいいなとは言わなかった。願望ではなく推測を用いたのは、あのまま進んでいれば――――という想像の域であれ、自分ならそうなれていただろうと思えたから。

傲慢のように思える発言は、実際には傲慢の対極に存在するモノだった。

「未練はあるか？」

「未練？」

「お前は斑目と違って、環境さえ揃えば努力で頂点になれたのだろう。だがその背後に鴨志田という教師がうっすらと見えるのは、秀尽ではない外部の俺でもそうだ」

不当に辞めさせられた。誰も悪くないのに。

今までの話の内容からして、生きがいを断ち切ったのは改心された鴨志田だろうというのは祐介でも推察できた。

順風満帆に壁を乗り越えていった先に潜んでいたのは、不当な権力による廃部と選手生命に繋がりかねない怪我。それも誰も悪くない――――強いて言うなら言いなりになった生徒も悪いが、指示を出した諸悪の根源は鴨志田なため、全ての原因が鴨志田だという結論になる。

鴨志田の改心で生きづらさが消えたのは事実だ。それを事実として、鴨志田がいなければ存続していた物に未練はないのか、という質問に対して伯は答える。
「引っ張ってたってどうしようもないとは考えてる……けど、ないとは言い切れないな」
「それは……そうだな。斑目に従い、自分の意思を捻じ曲げられていた俺が言える言葉でもないのもそうだが、過去に未練があるというのは当たり前の話だ」
「どこまで通用するか確認したかったのは認める。ただ、もしあの時鴨志田が来なければ……というたらればの話はもう捨てた」
「捨てた、か……ハッキリと割り切ってしまえるのもまた1つの強みだ」
「仕方ないで割り切れないのは置いておいて、何も選手生命が終わった訳じゃない。この先進めば大学、社会人、果てにはプロもあるかもしれない。どこまで進めるかは分からないが、高校で逃した物はその先で回収すれば良い。そういう意味では……高校野球は既に諦めているな」
高校球児にとっての憧れの甲子園は、伯にとってはそこまでの物だったのかもしれない。
阪神甲子園球場で試合をするのではなく、高校野球という世界で勝って勝って勝ち続けたかっただけ。そこが地方の球場であろうがアメリカの球場であろうが聖地であろうが関係ない。
そして上に上がるにつれて、自然と生半可な敵は淘汰されていく。残るのは世代の上澄みのみで、そう考えれば結局は、甲子園のない高校野球は”次へ進むステップ”でしかないとなる。
追いつこうと思えば大学野球で追いつける。甲子園自体は特段夢でもない。
だから、高校野球の復帰は諦めている――――と、ドライになった
「甲子園は誰もが目指す目標じゃないのか？」
「……いや、やっぱり諦めきれてないな。祐介の言う通りだ。人生で一度きりなんだから、甲子園に出てみたかったってのはそうに決まっ

てる」

――――フリをしただけ。

割り切ろうとしたとて、割り切れるはずもない。３６５日共に戦ったあのメンバーで甲子園に出て、どこまで通用するのか見て見たかった。

苦楽を共にした仲間と戦える最初で最後のチャンス。そのチャンスを奪われて、仕方なかったで済ませられるはずもない。

「ただもし、もしその高校野球の世界に戻れる代わりに、今の仲間を捨てなければならないとすれば」

その”たらればの話”は、間接的にどちらが大事かというモノ。

今の怪盗団か、それとも野球部か。どちらかを得たらどちらかを捨てなければならない究極の選択の鍵となるのは、ただ１つ。

「捨てないだろう。伯は」

「その通り。居心地がいいんだよ、ここはな」

水よりも濃く、そして血よりも濃い絆。

そしてその絆の中に、喜多川祐介が含まれているのは言うまでもない。

2―6【COOPERATION：Adjustment】

―5／21　放課後―教室―

――――ここ数日は毎日のように動いていたから、明日は休みにしよう。

先日の祐介歓迎会で決まった急遽の休み。元々土曜日は学校休みだろと言いたい気持ちを抑えつつ、抑えつつ。

「どうするかな」

いくら余裕があるとは言え、早く危険が取り除かれるに越したことはない。半日で授業が終わる土曜授業が終われば即集合をし、数時間かけて一気にルート確保まで行く予定でいた。

あれからそれなりに成長した感触もある。疲労状態で不利だった奥村パレスのシャドウも、今なら単独であれ互角以上に戦える自信もある。しかし休めと言われているのだし、何より単独で乗り込めば何を言われるか分からないから、現時点ではパレス潜入の行動自体封じられていることになる。

――――何も誘いがなければトレーニングでもするか。

だが、”話しかけてもいいですよ”と、誘いを待つかのようにして長時間椅子に座っているのは何とも格好悪い。そうして立ち上がろうとしたところで、スマートフォンに通知が届く。

取り出して確認してみれば、差出人の名は雨宮蓮。

『連れて行きたい場所がある』

『この後予定はあるか？』

「……行くか」

『今から向かう』と。

校門で待つ蓮に返信をして、鞄を持ち伯は教室を出た。

＊＊＊

「バッティングセンターか」
「ここなら見れると思ってな。”頂点”の宮本伯が」
「レンに教えてやれ。前に来た時にはダメダメだったからな」
「……んま、俺はピッチャーだったけどさ。バッティングを捨てたつもりもないぜ」
カーン、カーンと心地よい快音が不規則に響くバッティングセンター。
ビルの屋上を貸し切りネットで囲んだだけに近いソレは、知る人ぞ知る秘境そのもの。四軒茶屋――――怪盗団のリーダーの居候先だと聞いている土地に、伯は呼び出された。
呼び出しの理由を聞けば、頂点を見てみたいからだと。
班目一流齋に強気に食って掛かったあの時から周囲に漏れ出した、”頂点”と自称していた頃の宮本伯の過去。それを知らない蓮はそれを見てみたかった。呼び出した理由はそれだけだった。
その姿を見てみたいと言われたのであれば、その期待を超えた姿を見せるしかあるまい。過去の己との勝負に燃えた伯は、ケージに入り店員から貰ったメダルを投入する。
「球速は？」
「１３０だ。遅すぎてもスイングが崩れるだけだからな」
”１３０ｋｍ”と書かれたテープの下にあるボタンを押せば、バットを握って左バッターボックスに立つ。
くるり、とバットを回してコンコンとホームベースを二度叩けば、高く構えたバットのみをゆらゆらと揺らし、体だけはピタリと静止させてボールを待ち――――
「ふっ！」
若干外角寄りに来たボールを、強引に扱わず逆らわないようにしてレフト側に流し打つ。
鋭いヒット性の打球。内野の頭を越すか越さないかの弾道で飛んだボールはそのままネットに突き刺さり、たったそれだけで経験者と非経験者の違いがわかることになった。

「おぉ……流石元野球部だぜ、レンとはまるでスイングが違うな」
「初心者に求めるな」
「なら何で武器もバットじゃねえんだ？　ハクもそっちの方が扱いやすいだろ」
「バットは人を殴る物じゃなくて……こう扱うん……だよっ！」
ギャイン、と鋭い高音が鳴り響くと共に、スピンの効いたライナー性の打球がライト側へと飛んで行く。
バットは危害を与える道具ではない――――と潜在的にそう思っていたからか、伯の叛逆の意思は別の形で答えることになった。
無論、扱いやすさの話で言ってしまえば勝るのはバットであるのは事実だが。
「……許せなくなるな」
「ハクは〝終わった事だ〟ってよく言うけどよ……」
――――終わった事、なぁ。
背後で聞こえる会話に対しそう思えば、心の乱れからか力弱く甲高い音で後方へと打球が飛び、ファウルチップとなる。
野球部の廃部がなければ、昼は高校、夜は怪盗の活動もこの出会いもなかった。出会いがあったとしても、これ程深い関係ではなく、たかが知人ＡとＢのような薄い関係だったに違いない。
身を捨ててでも守りたい仲間。それに出会えたことには感謝しているし、それを捨てて高校野球に戻る気もない。祐介に話した通り、未練はどこにもない。
ただ、まぁ。
――――その未練がないのは俺だけだろ？
ふと過る考え。ぼんやりと脳裏に浮かぶその考えを晴らすようにして、豪快なフルスイングでセンター方向に最後のボールを飛ばし、ピッチングマシーンが止まったのを確認してからケージを出る。
「やるな」
「だろ？」
手に擦りついたグリップテープのカスを払えば、手の平に現れたのは硬くなりすぎたタコとマメ。

投手は手にタコやマメを作らない。強靭なバックスピンをボールにかけるのに重要な箇所は指の爪であるし、仮にそのマメが試合中にできれば交代せざるを得ないし、そうならないためにも試合のあった現役時には細心の注意を払っていた。

残り続ける努力の証。もう試合のためにケアをしなくとも良い――――それはつまり、もう高校野球は捨てたと言っているようなもの。

「……なぁ」

「どうした？」

「思った事がある。それを聞いて欲しい」

手に未だ残り続ける強靭な努力の証とは裏腹に、ふと悩むその心は揺れ動く。

―５／２１　放課後―純喫茶ルブラン―

レトロな喫茶店の屋根裏部屋――――と言うよりかは物置部屋が、地元を追われた高校生の居候先だった。

純喫茶ルブラン。ニヒルな笑みを浮かべる渋いマスターが淹れるコーヒーと、絶妙なスパイスで作り上げられたカレーライスが人気の老舗店。今度個人的に訪れ、蓮が帰って来たら店内に見知った顔があるというのも面白そうだな、と思ったりしたというのは別にして。

「どこから話すか」

「洸星高校と迷っていた、という話は聞いたが」

「それじゃそこからにするか。……実を言えば、俺は元々横浜の生まれなんだ。中学までは横浜育ちだったし、こっちに来たのは高校から。だから今は一人暮らしだ」

「横浜……中華の美味いトコだな？」

「モルガナも今度連れてくよ、猫舌じゃ難しいかもだけどな」

「こっちに来た理由は？」

「一人暮らしを始めれば野球に集中できる環境が手に入る。寮生でもマンションでもどっちにしろ、とにかく”自分で考えて成長する”感

覚は覚えられるし、そうして貰えるだけの財力もあった。それが理由だ」
　大学から野球を再開することは既に両親には告げてあるし、そこに向けてトレーニングを積むことも決して欠かしていない。そしてそれらは許可されている。
　過去は切り離した。今出来るのは、まだ訪れていない未来に向けて遅れた分の積み重ねをするだけ。良く言えばストイック、悪く言えばドライな伯を両親は良く理解していた。
「洸星と迷ったのは大学まで考えたからだな。進学校の秀尽の方が良い所に進めるかもしれないだろ？」
「進学先って……普通は強いトコを選ぶんじゃねぇのか？　野球をやりたいんだったらよ」
「まぁ、モナの言う通りだ。……正直に言えば、洸星も秀尽も強いには強いが目立つ程じゃない。都内ベスト１６の、何か歯車が合えば優勝に手が届くかもしれない程度の強さだな」
「優勝が狙えそうな所を選ばない、か……伯らしくもあるが、らしくないようにも思えるな。優勝できる高校を選んだ上でトップになりそうだからな」
「それも考えた。考えたけど……頂点に立つまでは、常に挑戦者の側でありたかったからな。上に立つプレイヤーから考えとか技能を盗んで、自分の物にするのが楽しかったってのもそうだ」
　力負けしている相手に打ち勝つために試行錯誤をして、打ち勝てばまた上の力負けしている相手を焦点にして試行錯誤をして。
　思考と研鑽を繰り返す日々は、どれだけ小さな前進であろうが幸福を与えるものだ、と。秀尽学園に進んだ理由を語れば、伯は左手をパーにして人差し指を見つける。
「ありのままの事を言えば、都内ベスト１６の秀尽でも行けてたかもしれない。精々ベスト１６が限界だった秀尽に現れた”粗削りなダイヤモンド”の影響もあってな」
「粗削りなダイヤモンド……ハクの事だろ」
「チーム全体の意識を変えるんだったら、まずは結果を残さなくちゃ

ならない。”これなら行ける”を口だけの言葉にしないために。
……1年の夏で精一杯だったベンチ入りから成長して、1年秋でエースナンバーを奪った」
「……どこまでもストイックだな」
「それを言ったら竜司や祐介だって同じだ。……ともあれ、トーナメントの運も良かったから、秋大で都内ベスト8まで上がることができた。負けた相手は都内準優勝チームで、延長まで縺れ込んだ末に負け。負けは負けだったにしろ、俺も部のメンバーも大きな成長をハッキリと感じた試合だった」
口だけの”これなら行ける”から、心からの”行けるかもしれない”へ。
ただ偶然噛み合っているだけに過ぎない中堅チームが、粗削りなダイヤモンドによる意識改革の末に変革を起こした。手ごたえも成長も感じると同時に得られた自信は、夏の飛躍を確信させた。
「毎日が楽しかったよ。馬鹿みたいな努力を積む俺の背中を追う仲間が増えて、夢を語り合ってさ。やれるや行けるの精神論に理論が噛み合って、短い時間でも成長できるようになって。……本当に、楽しかったんだ」
楽しかったよ。
そう語る顔に浮かぶのは多くの後悔と、多くの懐古。本当に楽しく、充実した、リアリストに近い性質を持った伯でも”どこまでも”を夢見る日々を送れたのだろうと推察できる顔。
――その先は、語るまでもない地獄だった。
秋大が終わった後、”臨時コーチ”という名目で鴨志田が来た。特に野球に関する知識もない鴨志田は、基礎トレーニングと称した体罰紛いの練習でとことん扱き上げた。
根を上げた部員には躾を覚えさせるように痛みを植え付け、痛みを植え付けても尚反抗しようとする部員には精神的な痛みを用いて支配しようとした。
”鴨志田卓様”に歯向かうのは自殺行為だと分かっていながらも、就任1週間もせずに秀尽学園野球部の監督は鴨志田に歯向かった。

歯向かえば当たり前のように、野球部の監督を辞めさせられた。その後、監督の椅子に座ったのは鴨志田だった。
実質的に全権を握った鴨志田に、半数の部員は肉体的な痛みで心を折られ、もう半数の部員は精神的な痛みで心を折られた。それもたった1人を除いて、だが。
「俺は俺のやりたい事をやる。お前の事には従わない。……実際従う気もなかったから、鴨志田のトレーニングが意味のない物と発覚してから部活にも出なかった。脅されようがお構いなしにだ」
肉体的にも精神的にも折られず反抗し続けた伯を見て、他の部員の意識も再び変わった。
――――監督が辞めさせられようが、俺らが従うのは監督だけだ。鴨志田には金輪際従わない、と。精神的に折られた部員が伯の行動に救われたのもまた事実で、1人、また1人と部に顔を出す者はぽつぽつと消え、野球部は異例のストライキを起こすことに成功しかけた。
このまま職員会議で取り上げられるなりなんなりすれば、鴨志田が失脚する可能性もゼロではない。そうすれば監督も戻り、また元通りの生活を送ることができる。その気になれば選手兼監督も可能なのだから、毎年キャプテンの他に監督役を決めることだって良い。
鴨志田に従うなら――――部員にその考えが浸透してきた頃に、鴨志田は動き始めた。
「そんな事が起これば鴨志田も黙ってられない。……俺が狙われた理由は、ストライキ首謀者だったからもあるだろうな」
「左手の指の骨折……と言っていたな。鴨志田のシャドウは」
「まぁ、指先の感覚が大事なんだよな、野球って。特にピッチャーをやってた俺だと尚更重要になってくる。錆び付いた感覚を戻すのは難しいんだ」
実力把握を理由とした紅白戦を行うつもりだ、と。
鴨志田就任から2週間後。半ストライキ状態だった野球部であれ、その指示が鴨志田の鶴の一声であろうが、練習内容が紅白戦であれば出る気にはなれた。
チーム内で監督代行を立て、サインプレーの指示は選手兼監督に任

せる。そもそも鴨志田に意思表示をさせなければ良いだけで、紅白戦であればトレーニングに手を加えられることもない。
普通の試合ができる。
その時だけは、鴨志田の事も忘れられるだろうと。首謀者の伯でさえそう思った――――それが鴨志田の用意した罠とも知らずに、であるが。
――――動くよな。
グー、パーと。〝地獄のような日々が確かに存在していた〟という象徴でもあった人差し指を動かせば、転機となったあの日を思い出す。
「脅しの内容はおそらく〝このままスタンド生活をしたくなければ、宮本伯を潰せ〟だろうな。……それに従ったのを咎めるつもりはない。練習が足りなければ俺もそういう手に縋っていたかもしれないし、躱せなかったのも技術が足らなかったからだな」
別に選手生命が絶たれた訳でもない。
痛いのは痛かったし、あの時はどこまでも鴨志田の手によって折られていたというのに絶望しただけ。
ただ野球をやっていれば、こういった事故は快々にして起こり得る。そもそも投げているのが皮で包まれた岩のような物なのだから、いくら安全にしたとてモロに直撃いて怪我をする可能性はゼロではない。
「俺が怪我をしてからはあっという間だった。野球部の内部事情を知っているのは鴨志田だけだったのも相まって、ストライキを逆手に取られてそれが廃部の原因になった。〝ストライキ首謀者の宮本伯による廃部〟。周囲にそう伝われば、竜司みたいに俺も周囲から浮く。……これが、蓮に出会うまでの話だ」
何か思う事もあるにはある。
ただしかし、悪いのは鴨志田で、更にその原因を追い詰めれば――――
「……秀尽の野球部が目を付けられたのは、俺の意識改革が間接的な原因だったかもしれない。極端な話をすれば、俺が――――『それ以

上はよせ』」
悩みの意図を察したのか、蓮が”それ以上は言うな”と止めるように促した。
遮られた言葉の続き――――俺がいなければ。悪いのは鴨志田だと理解していながら、廃部に至るまでのレールは自分が敷いたのではないかという考え。
粗削りなダイヤモンドが完全に仕上がる前に、最低でも退部という形でプレイヤーの息の根を止める。バレー部一強を生み出したかった鴨志田は、それを目的として野球部に臨時コーチという名目で参入してきた。
たった1人の息の根を止めるためにチーム全体が不利益を被り、個人では脅しによりトラウマを植え付けられ、その結果全員が夢を諦めざるを得なくなった。それも最悪の”廃部”という形で。
鴨志田の狙いは自分だった。そして鴨志田をおびき寄せた要因になったのも自分だった。
――――俺が”あそこ”にいなければ。
――――俺が夢を奪い取った。
――――悪事を働かせたのは俺のせいもあるだろ。
干渉までして妨害をした鴨志田が一番の悪だ。それはそうだ。
――――しかし俺にも責任があるんじゃないのか？
責任の一部でもある選手はのうのうと高校野球を捨て、本気で甲子園を目指していた大多数は未だ復帰を願っている。
廃部の花を咲かせたのは鴨志田であり、ただ元を辿れば種を植えたのは自分。しかもその植えた本人は知らんぷりで他のことに熱中してると来た。
――――そんなの、許される訳もないよな。
それが伯の悩みでもあり、未だ心に張り付く呪いでもあった。
「気に病む必要は無いさ。伯が全部悪いなんてことは絶対にない、悪いのは鴨志田だ」
「俺はもう次のステージを見据えている。”俺自身”は高校野球に未練がある訳でもない。……ただ、鴨志田に目を付けられなかった世界

線の野球部を考えることもある」
「あくまでハク自身の事じゃなく、他人の夢を奪っちまったが故の悩みか……そりゃ忘れられねぇよな」
「いずれ腹を割って話すつもりではいるさ。野球部としての最後を鴨志田の支配で終わらせたくない。それに甲子園をもう一度望む仲間がいれば、居場所の復興もしてやりたい。復活しても俺はそこにいることはできないが、それが”元”仲間としてやれる事だとも思っている」
　そこまで全て話し切れば、伯は座ったままぐっと足を伸ばし、緊張を解すようにして同時に手も伸ばす。
「スッキリしたか？」
「まあな。このまま誰にも話さずに抱えたままってのも。話せるのは蓮しかいないし」
「ワガハイもいるだろ！　いつでも協力してやるぜ」
「モルガナもいたな。……本当に助かるよ、本当に」
　蓮との関係が深まるのを感じる。
　そんな事を感じた一日は、ルブラン一押しのカレーとコーヒーで締められた。

2―7【Farewell to the Master】

―5／23　放課後―マダラメ・パレス―

「お～い、怪しいヤツがいたぞ～！　ちょっと来てくれ～！」

「……気の抜ける声だな」

斑目パレスも大詰め。しかし鴨志田とは異なる厳重なセキュリティを前にして、オタカラを正面突破でぶん取りに行くのは不可能だと判断。

襖の前に存在した赤外線センサーがオタカラを囲い、その前にはパレスの主である斑目が立ち直に監視。更に複数の警備シャドウが宝物殿を巡回し、複数の監視カメラを用いて侵入者を捕らえる仕組みも完成している。

――――要は”カメラを止め”、”班目を欺けくだけの隙があれば”成功する。

厳重に敷かれた罠であれ、この2つさえ処理してしまえばオタカラは奪うことができる。幸いオタカラを囲うセンサーを無視できる上空に、直接オタカラの真上に降ろせるワイヤーがあったため、止めるべき罠は残り2つ。

その作戦自体は何とかなりそうだったからこそ、こうして”予告状”を出した後の警戒度マックスの状態にいるのである。

スカルとソルジャーの近接特攻組が行っているのは、その”カメラを止める”に至るまでの誘導。スカルが制御室にいるシャドウを誘き寄せ、物陰で待ち構えたソルジャーがシャドウを仕留める。そしてその隙に忍び込んだパンサーが、制御室の操作で”班目を欺く”に繋げる。

走り込んできたスカルからタッチを受け取れば、そのままタックルを――――ペルソナが成長することで得られた”タッチアンドゴー”のスキルを活かし、シャドウを壁に押し付ける。

「貴様ッ！」
「こっちは急いでんだ！」
シャドウとの体格差はあれ、先手を取ったソルジャーは胴を捉えた。
不意打ち。それにシャドウが反応せども、状況を理解した頃には相手は次の行動へと移っている。シャドウが起き上がった頃には、既にソルジャーは仮面に手を添えていた。
ぼやり、と背後に浮かぶ大男の影。
そろそろか、と。そう判断したソルジャーは、おもむろにシャドウの右腕をぐっと掴んだ。
腕を固定すれば自慢のスピードが死ぬ。しかしこの先に起こることを考えれば、こうした方がよっぽどメリットになる。
そうして空の右手でシャドウ目掛けナイフを振るえば――――刹那、舞台は暗転した。
バン！　と。落とされた電源は〝宝物殿全体〟の電源。
制御室も、別グループが待機している場所も、そしてオタカラとパレスの主もいるホールさえも暗闇に包まれる。暗視スコープがなければまず目先すら見えない世界が来るのを悟り、ソルジャーはある程度の距離を把握するために手を握った。
移動したのは自分。であれば、目先が暗闇に包まれようが大まかな距離は把握できている。しかし手を離されたシャドウは、手を掴んでいたソルジャーがどれだけの距離を離したのかが把握できない。
奇襲、攻撃、そしてその後に訪れた暗転。もはや正常な思考も残されていないシャドウに、正確無比の斬撃が降りかかる。
仕留めた。そう肌で感じ取れば、一目散に集合場所――――ワイヤーを降ろし、モナがオタカラを回収している部屋へと走り出す。
警備シャドウを撒きつつ目的の部屋へと辿り着き扉を開けば、オタカラを抱えたモナや、自分の仕事を終えたメンバーが既に待っていた。
「俺が最後か」
「おかえり！　無事だった？」

「オタカラも回収できたぞ！　ワガハイの手にかかれば余裕だぜ！」
「ワイヤーを降ろしたのは俺だがな」
「……いや、不味いかもな。下に逃げれば大量のシャドウが待ち構えてる。このままオタカラを抱えながら戻るのは危険だ」
「じゃあどーすんだよ!?　捕まっちまうぞ!?」
「吊り天井の所に窓があったはずだ！　足場も確認してるしそこからなら外に出られる！」
「そうするしかないか……！」
　下には大量のシャドウ。であれば戦わずして逃げるのみ。
　何もシャドウと戦うのは必須ではない。そう考え、怪盗団は風吹く屋上へと足を踏み入れた。

＊＊＊

「賢しい鼠め……」
　――しかし、逃げられない。
　吊り天井の窓の外に逃げ込み、足場を探しつつ降りて到達したのは巨大な襖のあった中庭だった。だった、が。ここに出てくるのを知っていたのか、斑目は1体の何かを持った警備シャドウを連れて先回りをしていた。
「シャドウが持ってるのって……」
「じゃあ、今モナちゃんが持ってるのは偽物!?」
「わざわざニセモノ用意してたってことかよ……！」
「いいや、別にいいだろ。どうせ説得しなくちゃならそっちの方が好都合だ」
「シャドウが持っている絵画。おそらくあれが斑目のオタカラなのだろう」
　おそらくここを逃せば、班目が歪んでしまった理由を探ることは不可能になると。そう判断した祐介――〝フォックス〟が斑目に詰め、怒りを顕わにする。
「なぜ変わってしまった!?　有名になったからか!?　育ての父に罪を

問わなきゃならないこの痛みが……お前にわかるか!?」
「……思い返せば、お前を預かったのはお前の母を世話した縁だったな。あの女は、夫が死んだ後も絵画への情熱は失わなかった。その技術と才覚には目を見張るものがあった。だから世話をしてやることにした。お前の母も、生み出した作品も……全て、この私の”作品”だ！」
「狂ってる……」
「冥土の土産に見せてやろう、本物の”サユリ”をな！」
「本物……？」
斑目がそう言えば、本物のオタカラを持ったシャドウが布を外し、絵画を掲げた。
「あれが、本物の”サユリ”……！」
「ってか、サユリがオタカラだったのかよ……！」
構図、表情。何もかもが大衆の知る”サユリ”とほとんど変わらぬ中、変わっていたのはただ1つのみ。
額縁の中の物惜し気な表情を受かべる人物――――サユリと名付けられた女性が抱いている、1つの小さな命。もっと正確に言えば、赤子に当たるモノ。
「……母さん？」
――――母さん、と。
何か、驚いたような顔で。しかし実際には見たこともないどころか覚えてすらいないのフォックスが、その絵から何かを感じ取って呟いた。
「そりゃそうだ。それはお前の母親が描いた自画像だからな。死期を悟った女が、残していくわが子への願いを描いたもの……」
「……それが、謎に包まれてたあの表情の答えか」
赤子を塗り潰せば、本能から湧き出る”何かを愛する”表情の理由が不明になる。
不明になれば、評論家・批評家・専門家とありとあらゆる呼ばれ方をする立場の人間が評価する。評価して、考察を重ねる。
人が集まれば集まるほどに人は集まる。最初は専門家のみだった

”サユリ”は、いつしか価値も理解できない俗人すらも巻き込んでしまう。誰かの手によって作られた希望の作品が、誰かの手によって知らぬ名、知らぬ名声を受け、恩恵すらも与える。
「ずっと感じてた違和感……なんか、いま分かった。盗まれてスランプになるほど大事な絵なら、複製して売ろうなんて……考えるわけない！」
「貴方は芸術なんか愛してません！」
「本物のオタカラはそっちでも、本人の実力はさっきの落書きの方ってことだな」
「笑えるぜ、クソが！」
斑目に対し罵声を浴びせる一同とは対称的に――――フォックスは、言葉を静かに口にした。
「作品は、一つの例外もなく潰したと……”母さん”も、なのか？」
”作品”。
斑目が称する作品というのは、無限の泉からも察することができるように、作品を生み出し着想を思い浮かべる人間そのもの。
その作品は全て潰した。そして残るのは、斑目の弟子を名乗っていたフォックスのみ。
潰すの方法は多岐に渡る。筆を折るであれ、何であれ、画家で亡くなることが”潰す”に当たるのであれば――――
「たまたま私の目の前で、発作を起こした……そのとき思ったよ。ここで助けを呼ばず見過ごせば、絵をしがらみなく手に入れられるとな」
「見殺し……!?」
「体の弱い女だ。発作でくたばっても誰も疑わない……だいたい祐介。お前もおかしいと思わんかったか？　お前が3つの当時、画才を見出して引き取った？　貴様を飼ってやったのは、サユリの真実に気づかれてはと思ったまで！」
「……フォックス」
――――何も言えない。
これは家族だった間柄の問題だからだとか、真っ先に怒りを顕わに

するべきフォックスに怒らせるべきだとか、そういう話ではなく。
何をどう歪ませれば、母親を殺してその才能と名声を奪うという思考になるのか。
何を踏み違えれば、その行為に罪悪感が浮かばなくなるのか。
拒絶、困惑。思考が受け入れることを拒んで”怒れない”。
「……オタカラは”自己顕示欲”の塊だと考えている。奴を象徴するオタカラが、俺の実の母が描いた作品だったとはな。運命というのは実に残酷なものだ」
「感謝しとるよ、祐介。何せお前がいたから思い浮かんだのだからな」
「ああ、そうだ。貴様が俺に感謝しているのと同様に、俺も貴様に感謝している」
――貴様のような悪鬼外道を、この手で殺せる機会を得られたのだからな。
怒りの熱は天元突破し、ただただ蒼く、蒼く、心で静かに燃え盛る炎。
許す気は失せた。だから思うがままに貴様をこの手で倒すことができる、と。悪人のような笑みを浮かべたフォックスが刀を抜けば、その切っ先を斑目に向ける。
「どいつもこいつも……！　人の美術館に土足で入って好き勝手して！　この世は持てる者がルールを作り、持たざる者は支配される！」
斑目がそう言った瞬間、その体は鴨志田のように変形を始めた。
両目、鼻、口。それぞれが額縁の中に収められ、浮遊しながら怪盗団を眺めている。そのニタニタと笑う目は、強さこそ感じないものの不気味そのもの。
「ワシこそ至高！　ワシは美術界の神なのだ！」
「……来るぞ！」
――虚飾の美術館。
その館主を前に、怪盗団は臨戦態勢を取った。

＊＊＊

各個撃破でどうにかなるタイプか、一斉に全部を倒さければ無限に続くタイプか。
結局分離しようが、人数が多いのは怪盗団。寧ろ斑目が分離したことで、その攻撃力も4つに分離していないか。おそらくこの世界に質量保存の何とやらがあるのであれば、その可能性の方が高い。
「ソルジャー、指示を頼む」
「まずは殴ってみなくちゃな。耐性も確認しなくちゃならない」
「弱点を確認。そして有利を取れ、か」
「良く理解してるな、新参さん。……行ってくる」
まずは耐性、有利不利を確認しなければ何も始まらない。
先陣は任せろ。そう言わんばかりにソルジャーは強く踏み込み距離を詰め、一番近くにあった口を目掛けてナイフを振るう。
口を切り裂けば、ぐおん、と歪むような音が場に響く。無効以上に厄介な耐性――――攻撃そのものを吸い取る吸収。
ニヤリと歪む斑目の両目。”してやられた”。先陣を切ったソルジャーがそう思えば、同時に斑目の鼻梁の攻撃が飛び、それをゼロ距離でモロに受け止めた。
「いっ……」
「ソルジャー!?」
「……たくねえな。大丈夫。見込み通り、分割してるせいで個々の攻撃は低い」
再び距離を取れば、心配ないと言いたげに手を振りジョーカーの隣に立つ。
攻撃力が分割されている。とすれば、体力も分割されていると見るのが当たり前。全体を相手すれば鴨志田と同等の厄介さであるのかもしれないが、それも個々で戦えば封じられる。
「口、鼻、右目、左目。それぞれ耐性が違うだろうが、どれも揃って攻防共に脆いのには変わらない。これで終わるとは思ってないが、暴れるならここだ」
「血気盛んな奴が多いからな。こういう敵だと助かる」
「余裕だねぇ。……ま、それには俺も同意だ。一撃で吹っ飛ばしてや

る。スカル、タルカジャを頼む」
「おうよ！　任せとけ！」
「物理が効かないのなら魔法は効く。パンサーとモナは口をメインに。それ以外は……探りつつで吸われたなら逐一報告すること」
相手は日本画界の巨匠であり、かつ今の時点でデメリットしかない形態で戦い始めたと来た。
弱い形態をあえて取っているのなら、それ相応のメリットが隠されていてもおかしくない。総合火力で見ても怪盗団に一歩劣る斑目の厄介さの正体は――――
（火力とは別……耐久性か？）
推論。しかし現状では不明のまま。
ともあれ、現状やれる事は攻めて攻めて攻めまくることのみ。耐性も何も知らないが、とにかくせめて探りさえすれば勝機は見える。
燃費の悪さ。明確な弱点でもある特徴は、”一撃で仕留められるのであれば”大きなメリットとなる。それが攻防共に弱いという特徴のボス相手であれば、もっと尚更。
間合いに入れば一撃で仕留める。
間合いに入られたら一撃で仕留められる――――だから最大限の警戒を。
最大限の警戒。檻の中のライオンに注意を払うようにして、物理耐性を持っていないであろう両目がソルジャーを注視する。
いくら最速のスピードを持っていたとはいえ、これでは流石に動くこともできない。間合いを詰めずに攻撃を放とうにも、”遠距離は弱い”と悟られてしまう不利益の方が大きい。
味方にかけるバフもなければ、班目にかけるデバフもない。何より強化（や）と弱化（る）のスキル（事）は仲間
が既にやってくれたのもあり、後は自由に動くのみ。
「随分と熱い視線を貰ってるな……なら」
――――こういうのはどうだ？
ゆら、ゆら、ゆらり。下半身は適度なタイミングで動かし一歩で間合いを詰めんとしつつも、上半身は低いスタンスでいつでも攻め、逃

げができるように揺らすことを徹底。
所謂”フェイント”と呼ばれるもの。視線を他に回し、班目の意識の外側へと移った瞬間に圧をかけ直し、再度視線をこちらに向けさせる。
うざったらしい。そうイライラして右目がアギラオ（炎舞）とジオンガ（迅雷）を放つも、元より攻め気がないソルジャーにとって避けることは造作ではない。
しかしゆらゆらと動けば、じわりじわりとスタミナは減っていく。静と動の使い分けは確実に体を蝕み、スプリント程ではないにせよ疲労も蓄積していく。
「小癪な真似を――――『ゴエモン！』」
――――響く怒りの声。
”眼”は死んでいた。敵に向けるための眼も、芸術家としての眼も。
攻め気のないソルジャーを見ていた目は、かつての弟子が間合いに入ったことに気がつけなかった。抜かれた刀が鼻梁を両断すれば、力を失った鼻腔はその場に崩れ落ちる。
スキルでのダメージは入っていた。しかし”斬られた”と。潜り込まれ、更に自身の肉体の一部が崩壊したとなれば、班目の思考を支配するのは動揺のみ。
「詰めろ！」
正常な思考に移ることができない前に、なし崩しに全てを破壊する。
ソルジャーの合図を皮切りに、アギとガルが口腔に飛び、スカルの放った”暴れまくり”が両目にフルヒットする。
異音と共に４つのパーツがガタガタと崩れ落ちれば黒く濁った液体に変わり、そこから出てきたのは生身の斑目一流齋。
逃がさなく、逃がすはずもない。無防備になった斑目を取り囲み、総攻撃の準備に移る。
「くそっ……ワシは”あの”斑目だぞ……個展を開けば満員御礼の斑目だぞ！」

「だからどうした、って感じだがな」
「今更言われてもって感じだよね……」
「満員御礼のタネは暴いちまったからな」
「黙れ！　貴様らのような”無価値なガキ”が逆らっていい存在ではないのだ！」
「まだ言うかっ！　貴様に食い物にされた者の怒り、たっぷりと味わってもらう！」
　斑目を囲み打ち上げれば、そのまま流れるようにして総攻撃を仕掛ける。
　やはり本命はこっちか。斑目本体はダメージを受けてはいるが、それなりに余裕がありそうにも思えた。
「ワシは大家斑目だぞ!?　それがわからぬのなら……貴様らに見せてくれる！　我が最大にして最高の妙技をな！」
「そう簡単には行かないってか……！」
　攻める、攻める、攻める。その攻めが最終的に総攻撃に繋がれば、盤面は再び元通りに――――圧倒的なパワーバランスの差は消え、バランスは元通りになる。
　力関係が元通りになった。怪盗団はもう一度先程のように虚を突けば良く、それは斑目も同様。しかし斑目は、押され続け防戦一方の状態から抜け出した。
――――ならば攻め切るのみ。
”妙技”と称した斑目の技。その発動を高らかに宣言すれば現れたのは、赤、青、黄、緑の色を纏った斑目――――と言っても偽物である分身が数十体。
「同個体を複数……!?」
「本命はこっち。……なら、さっきみたいには行かないかも」
「ハッ、なるほどな……贋作や複製はお手のものってワケか！」
「気をつけろ！　斑目の色が属性に対応して――――っ！」
　指示を出していた。
　たったそれだけ。しかしそれは斑目にとって問題視すべき事。
　言わば怪盗団のエンジン。オートマチックのように動く怪盗団を

支配しているのはあの軍人であり、やはりそこを止めれば勝機があると踏んだ。
風向きが戻った瞬間に贋作を大量生産し、数の暴力で押し切ってしまう。コマ落ちの将棋と同じように戦えば良いと判断した斑目は、赤と緑の斑目をソルジャーへと向かわせた。
ソルジャーの弱点を突き、ソルジャーのガルを封じる個体。
贋作の位置にズレがあった。位置関係のタイムラグが招いたのは、ソルジャーにとっての有利盤面。先に追撃をしてきた赤色に素早く反応し切り込みをいれ、緑色の攻撃は肘で受け止めそのまま蹴り返して距離を取った。
いくら贋作がお手の物とは言え、そう何体も創造して余裕でいられるはずもない。生み出すコストとして払っているのは、班目本体の精神力か体力か。維持コストも馬鹿にならなく、おそらく本体にさえ攻撃が届けばそのまま勝てる。
タイマンなら勝てる。おそらく誰が相手であろうと、怪盗団の誰が相手にされようと、まず苦戦はするが負けはしない。しかし複数体に囲まれれば、負ける可能性もある。
どちらにせよ払い続ければ限界が来る。持久戦を続けていれば、いずれ維持できなくなり贋作の数も減えり、本体に直接攻撃が届くことになるだろう。問題はその”持久戦”で勝てるのはどちらか、であり。
（……まじいな。このまま持久戦をされたら俺が先に負ける）
――――囲まれる。
徹底的にマークされる。行動を封じられれば得意のスピードが死に、真っ先にスタミナ切れを起こす。そうなればほとんど戦力外になったソルジャーは集中放火を喰らい、それを怪盗団が無理に庇い、その結果行きつくのは怪盗団の敗北。
汗を拭う。無尽蔵のスタミナでさえ攻撃を振るえばどんどんと減る。
焦るな、落ち着け。俺には頼れる仲間がいる。そう信じて周囲を見渡し、全方向に圧をかけつつ次の一手を考える。

頼りの綱となる範囲攻撃は相対的に見て圧倒的に苦手となるガル系のみ。しかし、相手はその技を封じることも可能だと来た。
頼れるのはレンジが狭くリーチも短く、更に連続で出し続ければ即ガス欠を起こす物理攻撃のみ。地獄への片道切符を手にして技を出し続ければ、行きつく先は当然地獄。
あっちのキングが斑目本人だとすれば、こっちのキングは自分か。
そう判断した。判断したからこそ、次の最適な戦術を。ポケットの底に眠っていたアイテム――――ドロン玉を取り出し、それを怪盗団全員に見えるように構える。
通常時であれば逃げる際に使うアイテム。投げつけた瞬間に周囲を大量の煙が覆い、その隙に逃げ出して態勢を整えるという優れモノ。しかしパレスの主に対して逃げることは許されざることであり、ここでのドロン玉の用途としては――――
「引け！」
一に距離を取り、二にドロン玉を投げ、それを全員が察し三にドロン玉の奥へと逃げ込む。
強引な時間稼ぎ。煙幕を利用し巨大な煙の壁を即席で作り出し、班目らから距離を取って行きを潜める。
”そこにいる”。斑目はそう理解していても、贋作を突っ込ませることはしない。煙の先でカウンターを仕掛けようともしている可能性もあるし、何よりそうなった場合に不利になるのはこちら側だ。
故に斑目が取った戦略は待ちの手。動向を探り、煙が晴れた瞬間に攻撃を仕掛け、それまでは機を探る。
一方、その煙の先に潜む怪盗団は
「……さて、どうするか」
「ソルジャーでもなんとかならねぇのか？　物理なら色も関係なくゴリ押せんだろ」
「多対一には不向きだ。この先覚える技によってはどうにかなるかもしれないが……」
「今の所は難しい。そうだな？」
「そういう事。だからこの危機を乗り越える打開策を考える」

多対一を避けてタイマンに持ち込めば、班目の適切な配置により怪盗団の不利対面となる。
かと言って多対多でゴリ押そうとすれば、燃費の悪いソルジャーが足を引っ張り敗走ムードとなる。
どちらを取っても厳しい選択。
であれば、残された選択肢は
「先に斑目本体を潰す」
「やっぱ、それしかないよな」
贋作と戦わず、その大本のキングを潰す。
先に首を取れば勝ち。本体が戦わず贋作に戦わせていることから、推測するに斑目本体の戦闘力は戦場の中でも最低値。接近さえすれば一撃で首を獲り、首さえ獲れば贋作は全部消滅する可能性が高い。
ジョーカーが提言した案。確かにそれであれば、この窮地を打開できる可能性は高い。
「でもどうするの？　本体に突っ込めば偽物が壁になるかもしれないし……」
「差し詰め”肉の壁”と言ったところか。奴のプライドを守り続けている物が贋作というのは、確かに覆しようのない事実だな」
「斑目の狙いは俺だ。同時にここから出れば贋作も俺を狙ってくる。なら俺が囮になるしかない」
「そりゃムチャだぜ⁉　いくらソルジャーでも何十体もいる贋作を引き付けるなんて！」
「策はある。……それに、こういった修羅場は何度も自分の力で乗り越えてきた。大事な場面でミスはしないさ」
「……任せよう。ソルジャーに策があるのならな」
「任せておけ。それじゃ、ノワールには悪いんだけど……その銃、貸してくれ」
「えっ？　別に良いけど……ソルジャーが使っても弾は出ないよ？」
「ブラフだ。俺が銃を撃てないことを知らないのを利用する。……それに、本命は他にあるから安心しろ」
ノワールから銃を受け取れば、ソルジャーは立ち上がる。

「護衛が外れた瞬間にタイミングを伝える。合図が来るまでの間に、班目との距離を一気に詰められる物陰に移動。……後は任せたぜ」
灰色の煙を切り裂いて、ソルジャー自らが斑目と相対する。
その右手に握られたのは、先程まで所持していなかった遠距離武器――――通称”グレネードランチャー”と呼ばれる、爆発で範囲内の敵を一掃するタイプの銃。
「小賢しい真似を……出向いてたのであれば共に散るが良い！」
射程と範囲。その両方を補えるグレネードランチャーを先に撃ち込みある程度一掃し、得意の物理技で対応する気か。
斑目の予測は半分正解だった。事実縛りがなければソルジャーはそうする予定でいたし、撃ち込み引き付けた隙に他の仲間に処理して貰うプランを形成していたことだろう。
だからこそ、それを見守る仲間は今の所不安でしかなかった。
これでは自爆特攻となんら変わらない。実際に握っているのは弾の出ないおもちゃであり、それでは贋作を一網打尽にはできない。
無言でグレネードランチャーを構え、少しずつ斑目へと近寄るソルジャーに対し、班目が取った行動は――――
「距離を詰めろ！　爆発にあの男も巻き込んでやれ！」
距離を詰める――――つまりは、グレネードランチャーで作り出した射程の有利を打ち消そうとする行動。
斑目としては、贋作を数体失ったところでこちらの有利には変わらない。そもそもとして鍵になるのはグレネードランチャーではなく、撃ち終わったその後の行動。であれば、その次の行動に移るまでの思考時間を潰せば良い。
敵はたった1人。そしてこちらは多勢も多勢。
最も合理的で、最も取られたくない選択。
――――のように見えたソレは、護衛を引き剥がすという意味では最も理想に近い動かれ方だった。
（これで数体！　後は斑目を護る十数体だけ……！）
絶対にせねばならないタスクは完了した。後はどうにかして奥に潜む護衛をどかすのみ。

――と言えども、流石にそこまで引っ張って来れるとは思ってはいない。これで引っ張れるのは精々５体。残りの１０体は安全のために離さないだろうし、”今”このタイミングでは引っ張れない。そもそも引っ張ろうとすらしていない。

ともあれ、どうにかせねばならないのはまずは目の前の５体だ。

距離を詰められる。身軽で一撃一撃を慎重に出さなければならないソルジャーにとって、接敵は死刑宣告に等しい。

構え続ける。決して弾の出ない銃口を向け続け、距離を縮められるのをただ見守るのみ。

――来い、もっと、もっとだ。いっその事当たりやすくなるのだから、射程圏内まで潜りに来い。いいぞ、もっとだ。

どこからともなく聞こえる気がした囁き声。まるでこちらへ招いているかのような行動に、”何かがおかしい”と思いながらも、班目は通れば勝ってしまう特攻を止めやしない。

詰める、詰める、詰める。そうして、贋作がグレネードランチャーの射程圏内まで詰めてきた瞬間に――

「なっ!?」

――頼みの綱だと考えていたグレネードランチャーを、ソルジャーは上に投げた。

ブン、と。勢いよく投げ捨てられた重火器に、一瞬全員の目が奪われる。

それはそうだ。頼みの綱を投げ捨て、自ら反撃の手まで捨て死にに行くつもりか。そもそもそれをブラフとして扱うのなら、この接敵は文字通りの”死”になる。ここからをどうするつもりなのか。

有り得ない。そう決めつけていた行動を目の前でされれば、いくら敵が目の前にいようが当たり前のように、視線はそちらを向いてしまう。

「……行くぞ」

小声で、そう囁いて。

奪われた数秒。静止から強烈なスピード風へと生まれ変わったソルジャーが、グッと右足を外側に踏み込む。

ここでの外側は、目の前に立ち塞がる5体の肉壁の外側。つまりは――肉壁の端を突いて、持ち前のスピードで強引に駆け抜けた。
数秒もあれば抜けられる。文字通りの”神速”で5体の贋作をいなしたソルジャーは、そのまま引くのではなく奥へと――文字通りの王様がいる場所を目掛け距離を詰めた。
引き付けた贋作が捕らえるには、急バックをした上で最速のスピードに追い付かねばならない。”間に合うはずもない”と断言しているからこそ、後ろは振り向かない。
「小賢しいネズミめ！　もう貴様を守る武器はどこにもないぞ！」
「武器か⁉　武器ならここにあるさ！」
王の首を獲りに来た。しかしもう身を守る武器はどこにもない。
本気で相打ちを狙っているのだとしたら、対策法はただ1つ。おそらくこれ以上は速くならないスピードに最大限注意して、メインウェポンを止めるだけ。
今度は抜かせない。そもそも射程の都合上火炎（アギ）を放つ方が速いのだから、適切な距離で放てばダウンして止まる。
何もかもが破綻している。勝機ではあるが、それでも最大限の警戒は止めない。
息の根を止める。護衛をする贋作にアギの発動を念じれば、赤色を纏った数体の手に魔力が溜められる。
対する持たざる者の右手には、緑色の力――疾風（ガル）の力が溜められている。
全体を巻き込む気か。そう察せども、”先に撃つだけ”の状態に変化はない。
本気か。本気で我が身を捨てる気か。
撃てる、撃つぞ――そして、遂にその思考は撃つへと変換される。
「ここで無様に死ぬが良い！　まずは貴様からだ！」
「見せてやるよ……真の妙技をな！」
力の溜められた腕。
もう囮にする物は何もない。ノワールから借りたグレネードラン

チャーは使い切り、残りの武器としてはナイフのみ。そのナイフも取り出すにはもう時間がない。
焼きつくせ。そう命じられた斑目の贋作から放たれた獄炎が、ただ1人立ち向かうソルジャーを襲う。
火炎に向かい突き進む戦士。――――たとえその身を焼かれども、貴様の首だけは持ち去ってやる。
そんな気すら感じたソルジャーの特攻も、数秒もすれば終わる。”何をしたかったのか”と思われるような破綻の連続によって。
――――やれんのか？
――――やるしかねえだろ！
覚悟は決めた。それに威力と認知が生み出した世界という特徴からして、それが成功する確率は十二分にある。
そして最後に必要なのは――――己の力で成し遂げるという、気概のみ。
バン！　と。慣れないマハガルをソルジャーは撃った。
撃ったは撃った。ただし威力が足らないのか、班目の装甲を1枚も剥がせていない。
ただし――――撃ったと同時に、孤独の戦士は斑目の視線から消えた。
「なっ！」
――――いいや、威力が足らないのではない。
マハガルを撃った場所。正確に言えば”撃ち付けた場所”が違う。右腕に備えられた最大限の火力は地面へと、吸い取られていた。
地面に撃ち付けられたマハガルは、身軽なソルジャーの身を上空へと撃ち上げる推進力へと変わった。
どこへ行った。神風の行方を探すのに、まずワンステップ。
右、左、そして上。周囲を探しやっとの事で見つけ、そしてツーステップ。
「視線は奪った！」
己の身さえも囮にした、一世一代の大仕掛け。
視線は上空へと向いている。そして上空へ向いた視線を正面へ――

――既に斑目本体へと接近している怪盗団に向けようが、時すでに遅し。
ナイフが、棍棒が、長剣が、鞭が、斧が、刀が。
闘争開始。ソルジャーによって引き寄せられた合図に合わせ、班目一流齋を覆い囲う。
「ひっ……！」
声にならない悲鳴。
――完全に、終わる。そう斑目が察するや否や、彼の身が上空へと打ち上がる。
跳ねる、ではなく飛ばされる。
強引な力によって打ち上げられた斑目が最後に見た景色は
――ショータイムだ。
宙を踊るように舞う、怪盗団だった。

＊＊＊

「即席にしては上手く行ったか。……貸してくれてありがとな、ノワール」
「……投げたよね？」
「それは、すまん。ああするしかなかったんだ」
「いいの。ソルジャーが無事に戻ってきてくれた方が嬉しいから」
「……心配かけたか？」
「当たり前だよ。いつも誰かのために頑張って、誰かのために立ち向かって。……私が夢見てたヒーロー像と同じだから、ちょっと羨ましいかも」
「ほらそこ、イチャイチャしない」
「してない。……行くか」
「うん、行こっか」
投げ捨てたグレネードランチャーを回収しノワールに返せば、既に改心は大詰めの模様。
弟子だったフォックスが斑目を詰め、もう怯えることしかできない

斑目は”殺さんでくれ”の一点張り。自白しろと一言言えば、鴨志田の時と同様に現実へと帰りそうで。
　いまいち”説得”ではなく”脅迫”のような気もするが――――今すぐに現実世界に戻れば命だけは見逃してやる、とまでは言っていないから誤差かと。
「外道が芸術の世界を語るな……お前はもう終わりだ。現実に戻って、これまでの罪を全て告白しろ！」
「こ……殺さんのか!?」
「約束しろ！」
「ひぃっ……！　わかったから……！」
　多少強引ではあるがシャドウの了承も取れ、さあ後は粒子として消える斑目を眺めるだけだ、となったところで。
「あ、あやつは来ないのか……？」
「何を言っている！」
「あ、あやつだ！　あや――――」
――――プツン、と。
　テレビの電源が急に落ち、放送そのものが途中で終わってしまったかのように。班目の言葉は途中で止まり、その言葉を発していた斑目本人は俯いたまま無言を貫いた。
　生きてはいる。生きてはいるが、まるで”その先の言葉を発してはならない”――――もっと強く言えば言うな、と命令されたかのような現象。
　しかし数秒もすれば、威勢の良い命乞いがまた始まる。
――――”あやつ”?
　斑目が発そうとした言葉。あやつ、という指示語からして人である事が推測できる。そしてその”あやつ”は、怪盗団の仲間であると思われていた。
　そんな仲間は知らない。しかも特徴は聞いていないが、もしこれが本当であれば、怪盗団の他に潜入していた仲間がいたという事にもなる。
　いったい誰が、いつ、何を求め、どのように。

浮かぶ謎。しかしぐらぐらと揺れるパレスが、思考を元の世界へと引き戻す。

「オマエら、ここも崩壊する！　オタカラ奪ってズラかるぞ！」

モルガナの言葉で正気に戻り、わなわなと震える斑目のシャドウを後にして、怪盗団は虚飾の美術館から脱出した。